

2019 年度 学位論文（博士）

『都林泉名勝図会』における庭園描写の特徴

Characteristics of the Description at the *Miyako-rinsenn-meishou-zue*

(1/3)

京都造形芸術大学 大学院  
芸術研究科 芸術専攻  
白木朝乃

## 目次

### 序章

第1節 研究の目的と方法	1
第1項 目的と方法	1
第2項 『都林泉名勝図会』の史料としての価値	2
第3項 秋里籬島と名所図会	5
第2節 先行研究の状況	9
第1項 『都林泉名勝図会』の書籍の出版状況	9
第2項 『都林泉名勝図会』に関する研究	11
第3項 秋里籬島に関する研究	14
第4項 『都林泉名勝図会』を用いた文化財庭園の保存修理	16

### 第1章『都名所図会』と『都林泉名勝図会』

第1節『都林泉名勝図会』の構成と版種	19
第1項 構成	19
第2項 『都林泉名勝図会』の編集方針に関する考察	23
第3節 挿図の類別	31
第4項 版本の種類	33
第2節 都の範囲と名勝の対象地	37
第1項『都林泉名勝図会』における名勝の対象地	37
第2項『都林泉名勝図会』における都の範囲	38
小結	40

### 第2章『都林泉名勝図会』の庭園描写と演出

第1節 庭園の構成要素の描写	41
----------------	----

第1項	石組・景石・敷石・敷砂利の描写	41
第2項	水系の描写	45
第3項	建造物の描写	47
第2節	季節や気象による演出	50
第1項	植物の描写	50
第2項	時間帯を表す風雨の描写	59
第3項	時間を表す霞・雲の描写	60
第3節	人物による庭園の演出	62
第1項	利用形態を示す人物	62
第2項	人物の位置が示す鑑賞方法	63
第3項	人物の行動による鑑賞のポイント	65
小結		66

### 第3章 『都林泉名勝図会』における林泉図の分析

第1節	情景描写が特徴的な林泉図	68
第1項	季節表現が特徴的な林泉図	68
第2項	時間帯表現が特徴的な林泉図	77
第3項	気象表現が特徴的な林泉図	84
第2節	人物・風景の演出が特徴的な林泉図	92
第1項	人物による鑑賞方法が特徴的な林泉図	92
第2項	庭園の背景描写に特徴がある林泉図	102
第3節	現状との比較において特徴的な林泉図	112
第1項	修理・復元された庭園	112
第2項	現存していない庭園	120
小結		125

#### 第4章 『都林泉名勝図会』の描写の特徴

第1節 京都名所案内記における庭園に関する記述との比較	127
第1項 名所図会における庭園に関する記述との比較	127
第2項 京都の名所案内記	131
第3項 京都名所案内記における庭園に関する記述との比較	134
第2節 『中国名所図会』にみる秋里籬島と籬島軒秋里	139
第1項 『中国名所図会』と名所図会との比較	139
第2項 秋里籬島と籬島軒秋里	141
第3節 『都林泉名勝図会』にみる江戸中末期の庭園	142
第1項 『都林泉名勝図会』における庭園の鑑賞方法と見どころ	142
第2項 『都林泉名勝図会』における庭園の機能	145
第3項 『都林泉名勝図会』における庭園の特徴	148
小結	150

#### 結章 『都林泉名勝図会』における庭園描写の特徴

注	157
---	-----

参考文献	162
------	-----

## 序章

### 第1節 研究の目的と視点

#### 第1項 研究の目的と方法

『都林泉名勝図会』は寛政 11 年（1799）に京都の小川多左衛門書林から板行された、名所図会的一种である。作者の秋里籬島（京都生まれ、生没年未詳）は数多くの名所図会や読本を手掛けており、前作に京都の名所を紹介した『都名所図会』（1780）やその続編である『拾遺都名所図会』（1788）などがある。他にも京都だけでなく、大和、住吉などの畿内の名所図会や、東海道や木曾路など諸国の名所図会を手掛けている。そのなかでも本研究が対象とする『都林泉名勝図会』は他の名所図会と比べ「林泉」、つまり庭園に特化した名所図会である。

本史料は 5 巻 6 冊（巻之一が乾坤に分かれる）からなり、西村中和、佐久間草偃、奥文鳴ら 3 人の画工による 158 の挿図が所収されている。これらの挿図には様々な行動をとる人物が描かれており、その画中人物は庭園の特徴を示し、さらにその特徴を明確にするために風景描写の操作が行われているものと考えられることから、著者である秋里は挿図において庭園の特徴を表現する意図を持って画工に描かせたと推察できる<sup>1</sup>。

本史料について飛田範夫は「観光案内の要素がはるかに強いが、その庭園図が後世に与えた影響は大きい」、「庭園史の研究の上でもこれほど正確に当時の庭園の状態を図として記録したものは少なく、江戸時代の代表的な資料」と評価するように<sup>2</sup>、江戸時代中期の庭園を描いた史料であり、京都の庭園を紹介、解説をするうえで欠くことのできない史料とされてきた。そのため、江戸時代の庭園の様子を知る手段として多くの研究において参照されており、特に現状との比較や変遷の考察に用いられている。さらに、庭園修復の際に本史料の挿図を参考にされることもある<sup>3</sup>。そのほか、本文において、庭園に関する記述以外にも詩歌や什宝の記述、挿図は眺望や景観に関する研究に利用されている。これら先行研究については本章 第 2 節において詳述す

る。

『都林泉名勝図会』の書誌学的な研究は野間光辰によるものが代表として挙げられるものの、史料批判に乏しい。そのため挿図の検証を行わないまま利用されており、先行研究においても本史料における庭園描写の考察は少ない。そのため本研究では、本史料の基礎的な情報を整理し、秋里による他の名所図会における特徴や変遷をふまえ比較することで本史料の特徴を明らかにしたい。さらに各挿図に描かれた要素を抽出し、そこに作者が庭園の特徴をどのように捉え、表現しているかを分析する。第1章では『都林泉名勝図会』において秋里籬島がどのように庭園を扱っているか、前作である『都名所図会』との比較を行いながら検討する。また第2章では本史料の挿図に注目し、庭園がどのように描かれているか、そこから読み取れる秋里の庭園の捉え方を考察する。第3章では各挿図において庭園の構成要素別に細かな分析を行う。そして第4章では数ある地誌の中でも『都林泉名勝図会』が庭園に特化しているという点で特異であることから、このような地誌が他の地誌からどのような影響を受け、さらにその後の地誌に与えた影響について検討、考察する。

## 第2項 『都林泉名勝図会』の史料としての価値

『都林泉名勝図会』は庭園文化史や造園学の視点から使用されることの多い史料であるが文学や地理学、日本美術史においても研究において研究対象とされてきた。

『都林泉名勝図会』を文学的視点から見ると名所記もしくは名所図会に分類される。名所記とは各地の名所を紹介することを目的として著された書物を指し、名所・旧跡を題材にその故事・来歴・風俗などを叙述するもので、挿図を加えることにより娯楽性・実用性を兼ね備えたものであると言える。本史料を名所記としてみた場合、水江漣子は『都名所図会』を名所の所在を示した実用性の高い名所記としている<sup>4</sup>。よって同様の構成、豊富な挿図を持つ『都林泉名勝図会』も名所記に含まれる。

しかし名所図会を名所記には含まないとする論もある。鈴木良明は、名所図会は名

所記と異なり、本来的な概念である歌の名所<sup>などころ</sup>という範疇を越え、寺社・旧跡などを含めた案内地誌であるとしている。系譜は名所記にさかのぼれるが、名所図会は名所案内としての役割と至便さが名所記に比べ大きく異なっているという<sup>5</sup>。

こういった流れや『都名所図会』は名所図会の嚆矢とされていることから、秋里が名所図会というジャンルを確立したことは明らかであり、以降、秋里は多くの名所図会を著作する。

『都林泉名勝図会』の挿図を日本美術史の観点から位置付けるならば、まず思い起こされるのは歌枕としての景勝地を描いた名所絵との類似性であろう。名所絵は平安時代から季節の風物と共に各地の名所を季節感や人事を盛り込んで描かれたものとし、その後中世の縁起絵や高僧伝絵に積極的に取り入れられ、近世になると洛中洛外図屏風や寺社の祭礼図に名所が登場する。また浮世絵風景版画にまで名所絵の伝統は継承されるという<sup>6</sup>。その名所絵は本文テキストと結びついて『京童』（1658）などの名所案内を生み、その完成形として『都名所図会』がある。名所図会は本文によって名所を知り、所々に挿図を挟むことによってさらに名所への想像を掻き立て、文章では分かりにくい伽藍配置などの図解の役割を担っている。さらに『都林泉名勝図会』では画中人物によって名勝の性質や特徴を知らせる役割を担うことになる。

近年では庭園画の研究が盛んとなり、平成 30 年（2018）10 月から 12 月にかけて静岡県立美術館において「美しき庭園画の世界 - 江戸絵画に見る現実の理想郷」と題して、庭園画の様式的な成立から展開までを明らかにし、さらに関東・関西画壇で描かれた庭園画を比較することで、庭園画様式の特徴を把握する狙いを持つ企画展が行われたことから分かる。しかしその中に『都林泉名勝図会』は展示されておらず、庭園画としての位置付けはされていないようであった。そこで『都林泉名勝図会』が庭園画の中でどのような位置付けになるのかを考察する。

一つ目の理由として、展示では模本や下絵を含む絵画作品に絞られていたからと考えられる。絵画とは日本大百科全書において「造形芸術（美術）の一分野に属し、色

と線を用いて、ある形を単独に、あるいは多様な組合せで表現する平面の芸術をいう。狭義には、線を主要な表現とするデッサンや版画を含めない場合もある」<sup>7</sup>と説明されており、そうすると『都林泉名勝図会』は木版であるため、狭義の意味では絵画に含まれないことになる。確かに展示品の中に版画は見られなかった。また、絵画と比べて文章による情報が多い『都林泉名勝図会』は書物であり、定義を考えるうえでは絵画というよりは資料というべきであろう。

もう一つの理由としては、関西・関東画壇における庭園画様式の成立の違いが原因ではないかと考える。展示を企画した野田麻美は、関西では中国古代の庭園を添景に描く作品が描かれ、その後南画家たちによって明清の庭園画に影響を受けた庭園画様式が確立したとしている。一方関東では江戸狩野派により名所絵の枠組みを援用することで庭園画様式を成立させたとしている<sup>8</sup>。仮に『都林泉名勝図会』を庭園画とすると、『都林泉名勝図会』は前作である『都名所図会』に見られるような俯瞰した視点から描かれた境内図のような挿図から庭園に重点を置いた挿図へと変化しているが、名品を明記する挿図の構造からみても名所図会としての根本的な目的は変わらないため、庭園を描いた図も名所絵的な構造を変わず保持し続けたと考えてよいだろう。そのため関東と関西の様式の成立の違いから、京都で制作されたにもかかわらず関東の庭園画の特徴として示した名所絵的な表現をした作品が展示されていると観覧者の困惑を誘い、様式の成立を伝えるには不適切だとされたのではないだろうか。

関西では17世紀に中国古代の庭園を添景に描く作品が描かれ、18世紀には南画家たちによって明清の庭園画に影響を受けて庭園画様式が確立したとしている。その後、18世紀末から19世紀にかけては実景の写実的な要素の強い庭園画様式に展開したことが指摘されており、『都林泉名勝図会』が板行されたのはちょうどこの時期に当たる。さらに18世紀の関西画壇では日本の風景を中国の名勝に見立て、自らの旅の体験や風景を目撃した際の感興を絵の中に表す真景図が流行したという<sup>9</sup>。『都林泉名勝図会』に描かれた庭内の人々の表現は、まさに真景図の表現ではないだろうか。挿



図中に描かれた人物は庭中の石組を指さしたり、借景の山を指して会話をしたりと様々な動きをしており、これらは庭園の特徴を表現する秋里の工夫であり、名勝をただ見るより描かれた名勝を見るほうがその名勝を理解しやすいといった『東海道名勝図会』の秋里の跋文に見られる主張によるものである。名勝を紹介する目的があるため中国の名勝に見立てることはないが、このような秋里の意思は真景図に通じるものがある。

『都林泉名勝図会』は名所図会としての役割を果たすために名所絵の枠組みをとっているが、庭園は構成要素などが細かく描写され、名勝の説明役を担う人物を描き込むことで真景図の様式が利用されている。以上のように、『都林泉名勝図会』は名所図会であることから名所絵としての特徴と、関西画壇で見られる庭園画の特徴を併せ持つ史料であると言える。秋里籬島は『都林泉名勝図会』を手掛けていくうえで、当時の庭園の描き方を真景図に求め、その影響を受けていると考えられる。よって庭園画において『都林泉名勝図会』は、その影響を受けて制作された名所図会であると推察される。

### 第3項 秋里籬島と名所図会

秋里籬島は京都の人で、俳諧師である。名を舜福、字を湘夕と号し、その生没年は明らかにされていない。しかしその住処については竹村俊則によって指摘されており<sup>10</sup>、『都林泉名勝図会』の跋文に「籬が島の古き蹟に棲みて」と記していることや、『木曾路名所図会』（1805）巻之一の首巻に「洛の南、風すさぶ賀茂の流れのすゑ、宣風坊の橋のほとりなる河原院塩籠てふ古跡、籬島の庵に年久しく住みて」と記していることから、源融の六条河原院の旧跡である、五条大橋西隅の地であると推定されている（図1）。

また藤川玲満は秋里自筆の伝記である『秋里家譜』（執筆年不明）を翻刻し、秋里の素性を明らかにしている<sup>11</sup>。これによると秋里籬島の先祖は中世因幡国の秋里城

城主で、鳥取城主に仕えた秋里備前守であるとしている。籬島の祖父が因幡国から上洛し、祖父は医師、父は質屋をするが、籬島は俳諧師になり、寛政年間初頭頃には出家したと見られる。また浄土真宗本願寺派に改宗し、妙順寺の信徒となっている。そして後年には和歌を修めていたとしている。

名所図会を多く手掛けている秋里籬島だが、初作は軍書『信長記拾遺』（1776）であり、同年『俳諧早作伝』という俳諧の作法書を著している。3 作目にして『都名所図会』を刊行し、その後続々と読本や名所図会を板行していく。その間、俳諧師としても活躍しており、『正朔記』（1784）や『芭蕉堂奉納集』（1789）などに句を入集している。よって秋里の活躍は初作刊行年の安永 5 年（1776）から『本朝勝概記』が刊行された文化 11 年（1814）の間となる。秋里の著作一覧は表 1 にて示した。この表は『国書総目録』を用いて作成し、『国書総目録』において分類された類別、版本の構成、著作ごとに記された名前や画工名についても表記した。また、本史料と関連する名所図会に関しては網掛けにて示した。

さて、秋里は『都名所図会』をはじめ、その続編となる『拾遺都名所図会』（1804）を刊行した。その後『京之水』（1790）、『都花月名所』（1793）、『都林泉名勝図会』の 5 作の京都の地誌を手掛けている。さらに京都にとどまらず『大和名所図会』（1791）、『住吉名勝図会』（1794）、『摂津名所図会』（1794）、『和泉名所図会』（1796）、『伊勢参宮名所図会』（1797）、『近江名所図会』（1797）、『東海道名所図会』（1797）、『五畿内名所図会』（1798）、『河内名所図会』（1801）、『木曾路名所図会』が刊行されており、大和、住吉などの畿内各地の名所図会や、東海道や木曾路など諸国の名所図会を手掛けている。

秋里の人となりについて知る史料として、後年のものであるが西沢一鳳の『伝奇作書』残遍（1830）中の巻<sup>12</sup>と滝沢馬琴の『異聞雑稿』（1836）がある。

西沢一鳳の『伝奇作書』残遍中の巻「秋里籬島翁の話」の項をみると、秋里は五条橋下の融大臣の塩釜の旧跡、籬島に住んでいたと書かれている。秋里は人と話すとき

常に墨と紙を持ってメモをしながら聞いていたという。無名の貧書生であった秋里は天明の頃、『都名所図会』を発案し出版を企てたが、書林へ持っていっても喜ばれなかった。刊行されると『都名所図会』は短期間のうちに数千部売れた。さらに買手から『拾遺都名所図会』の出版の催促があった。『拾遺都名所図会』が出版されると、大和・五畿内の名所図会が出版された。執筆にあたり、秋里は画家春朝斎らを連れて大和へ旅行に行った。旅費はすべて書林がもったという。『都名所図会』の噂のおかげで、訪ねる寺社では歓待を受け、縁起宝物を見ることができた。秋里と画工春朝斎は、名所図会を著すために生まれたと述べている。

また、滝沢馬琴の『異聞雑稿』「吉野家為八」の項では秋里について、洛外の俳諧師と述べている。為八が自分の楽しみのために『都名所図会』を秋里と画工春朝斎に執筆を依頼した。執筆にあたり兩人は為八の家に寄宿させられ、3食はおろか午後には煎茶と菓子を勧められ、ときどき酒をもてなされた。また、外へ出て鬱を晴らしたり妻子に会いにいくたびに金を持たされた。そうして執筆に3年かかり、板行するまでには5、6年かかった。しかし、売りだしても思うように売れなかった。そして大坂城代若州小浜の酒井侯が江戸参向の際に土産として『都名所図会』を十数部買ったことが、翌年4,000部の売り上げにつながった。その売れ行きは、製本する暇がなく、摺本に表紙と絨糸を添えて売り渡したという。2,000金の元手を取り戻しても余る利益を得たので、大和、和泉名所図会や『都古迹名所図会』、『拾遺都名所図会』などを出版したと述べられている。

西沢一鳳の『伝奇作書』残遍と滝沢馬琴の『異聞雑稿』では対照的な話である。しかし『伝奇作書』は竹村俊則によって、西沢一鳳が秋里籬島没後の世評を書きとどめたものであると推測されており<sup>13</sup>、また『異聞雑稿』は「吉野家為八」の項の最後に文化年間(1804~17)に河内屋太助の手代曹七に聞いた話であることが述べられているため、事実であったか定かでない。

秋里籬島の著作と考えられる名所図会に『中国名所図会』(刊行年不明)があるが、

卷之一本文冒頭下に「籬嶋軒平秋里図著」とある。この籬嶋軒秋里という人物は秋里籬嶋と同一人物であるかどうかこれまで議論されてきた。

籬嶋軒秋里とは『石組園生八重垣伝』（1827）や『築山庭造伝』後篇（1828）の作者である。『築山庭造伝』後篇の中扉には「庭造家元預籬嶋軒秋里圖述」とあり、「庭造家元預」という肩書を持った人物であることが分かる。

千田稔は『都林泉名勝図会』を著したことによって庭園に関する知識を持っていたことや、『都林泉名勝図会』の凡例に

一 この書は前板築山庭造伝を基とし、京師四方名庭の林泉を聚て、新に都林泉名勝図会と題書す。しかれども宮殿、台榭、三閣、水亭、蝸舎、蓬戸の林泉なほすこぶる多し、余は他日縁を需て巡覧し、後編に備ふとあり、北村援琴の『築山庭造伝』（1735）を基として庭園をとりあげ、記載しきれなかった庭園は後編に備えると記述しており、この後編が『築山庭造伝』後篇にあたると考えられていること、また名前が非常によく似ていることなどから秋里籬嶋と同一人物とみなしている<sup>14</sup>。さらに『築山庭造伝』後篇の序文から推察している。

予此道に心神を砕き産を東海の籬の島の方辺にしるし西海の平波に漂ひ北海の荒磯に膝頭を破り江湖の八景那智の白瀑及松橋宮の三景より芙蓉の高峯と本邦の深山幽谷は凡至らざる処なく、遍歴六十二州を跨り終に此家元の後見をなす。故今幸に此一本を願しく後世の好奇者の翫とせんと号けて庭造伝と題し三卷とす。真行草の三体委しく其法と術を示して綴畢ぬ。文政十一戊子秋の末に浪花の旅ののきにて籬嶋軒前青柳堂秋里識

籬嶋軒秋里は諸州をくまなく旅し、最後に作庭家の後見となったとあり、元から庭作りと関係がなかったことを指摘している。

しかしこの籬嶋軒秋里と秋里籬嶋を別人とする見解もある。竹村俊則は籬嶋軒秋里が秋里籬嶋と同一人物とした場合、『築山庭造伝』後篇を記した年齢に疑問をもっている<sup>15</sup>。竹村は『木曾路名所図会』巻之一のはじめに

よはひは古稀に近づきて、鬢の霜厚く、眼は春の夜の朧となりても、例の癖お  
こり、道祖神のまねきにあひて、ことし享和二の年の夏、卯花月中の六日とい  
ふ日に旅立ちぬ、云々

とあり、この頃すでに 70 歳に近い年齢であったこと、またこの時の旅が同書の西村  
中和による跋文に文化 2 年（1805）に終えたとあり、これらのことから考えて秋里の  
古稀を文化 2 年頃と推定している。すると『築山庭造伝』後篇を執筆した年齢は 93  
歳となり、「いかに頑健とはいえ、それまで生きながらえていたとは到底考えられぬ」  
と否定している。そして「籬島はあくまで婦女子を対象とした通俗的な読み本作家で  
あって、『築山庭造伝』の如き、専門的な内容のものを執筆する作家でない」と断言  
している。さらに当時秋里籬島の名声にあやかろうとして、名前を似せた『花洛名所  
記』（1854～1859）の著者で池田東籬いけだとうりや『心学世渡名所図解』（1802）を著した春里はるさと  
湘朝しょうちょうといった人物の存在を示し、籬島軒秋里もそういった人物の一人でないかと述  
べている。

秋里籬島と籬島軒秋里が同一人物かどうか、第 4 章 第 2 節において見解を述べる。

## 第 2 節 先行研究の状況

本節では『都林泉名勝図会』の活字翻刻本等の出版状況、そして本史料または著者で  
ある秋里籬島に関する研究、さらに『都林泉名勝図会』を用いた研究として本史料を参  
考に庭園修理を行った事例について各項に分けて述べる。

### 第 1 項『都林泉名勝図会』の活字翻刻本等の出版状況

近現代、『都林泉名勝図会』は活字翻刻本等として 6 箇所の出版社から出版されて  
おり、以下に刊行年順に示す。

①桜井庄吉編『都林泉名勝図会』日本随筆大成刊行会 1928 年

②野間光辰編『新修京都叢書』第 9 巻 臨川書店 1968 年

③上原敬二編『都林泉名勝図会（抄）』加島書店 1972 年

④井口洋校訂『都林泉名勝図会』柳原書店 1975 年

⑤竹村俊則『日本名所風俗図会』7 京都の巻 I 1979 年

⑥白幡洋三郎監修『都林泉名勝図会』上下 講談社学術文庫 1999－2000 年

各書について底本やその中で論じられている解説について紹介する。底本について、『都林泉名勝図会』の版は数種が確認されているが、2 種に大別されている。これは野間が指摘したイ本 259 丁とロ本 262 丁である。ロ本はイ本に挿図の追加が行われており、本項における版種の判断はこの挿図の違いによって判別した。版種について詳しくは第 1 章 第 1 節 第 4 項において述べる。

日本随筆大成刊行会から出版された①桜井庄吉編『都林泉名勝図会』は本文が翻刻されており、挿図も所収されている。底本は明らかにしていないが、イ本とみられる。解説はない。

②野間光辰編『新修京都叢書』第 9 巻に収録された『都林泉名勝図会』は翻刻せずに版をオフセット印刷にて複製しており、刷りの状態は比較的良い。底本は京都大学附属図書館の小川版<sup>16</sup>ロ本を採用しており、その理由を「作者籙島の意のあるところを尊重したため」としている。巻頭には解題が著されており、史料の構成や版本の丁数の差異について指摘している。

さらに③上原敬二編は『都林泉名勝図会（抄）』と題して庭園の挿図を選出して掲載しており、版を抄出して所収したものである。底本について明記しておらず、また抄本であるため判別できない。巻頭にはまえがきがあり、その中で史料の構成、『築山庭造伝』（前編）との関係を述べている。本史料を名勝地の案内記とし、庭園のあるがままを記録した史料として庭園を本位とした図の描き方を評価している。

④井口洋校訂『都林泉名勝図会』は大阪府立図書館所蔵の史料を底本としており、これはイ本とみられる。本文は翻刻されているが挿図はところどころ掠れており、刷りの状態はそれほど良くないが、巻末には挿図内の文章も翻刻されている。また「異

本について」と題して、野間光辰が指摘した箇所に加え、異なる箇所がさらにあることを指摘している。

⑤竹村俊則『日本名所風俗図会』7 京都の巻Ⅰでは底本について記載していないため分からないが、イ本を用いているとみられる。本文と挿図内の文章が翻刻されており、各名勝には注釈がつけられ、現在地や現況について記されている。さらに解説として「秋里籬島と名所図会」と題し、秋里の人物像について論じている。これについては第3項に詳しく述べる。

近年のものでは⑥白幡洋三郎監修『都林泉名勝図会』上下があり、底本には監修者所蔵の小川版を使用しており、イ本であるとみなされる。本文は翻刻され、挿図中の文章も図枠の外に囲み書きで記されている。挿図の刷りの状態もよく、挿図ごとに監修者の解説がつけられている。上巻の巻末にある解説では史料の構成、名所図会について、『都林泉名勝図会』の価値について論じられており、下巻巻末では「挿絵について」と題し、画工や彫り師について論じられ、また異本については図を掲載するにとどめている。

## 第2項 『都林泉名勝図会』に関する研究

まず初めに挙げるべきは野間光辰の『都林泉名勝図会』に対する「解題」である<sup>17</sup>。史料の構成や丁数の異なる版の存在について、『築山庭造伝』（前編）との関係について論じている。彫り師について、巻之一乾の序の1丁表綴じ目下匡郭外に「従是奥彫工 井上治兵衛」、また同巻2丁表に「此一冊彫工 井上治兵衛」、巻之三の目録1丁目に「彫工 樋口源兵衛」、巻之四の目録1丁表に「此一冊 井上治兵衛」と記されていることを指摘している。したがって、井上治兵衛・樋口源兵衛の2名が版木彫工として関わったことが、欄外の記載から知られると述べている。さらに版種について、版本の丁数の差異から2種の版本があることを指摘している。それぞれ同じ寛政11年の刊記を記しているが、一方をイ本（259丁本）、もう一方をロ本（262丁本）とし

ており、その差異は2箇所である。①一つ目は、イ本は巻之一「林一ノ五十八」表は懷円が輔親邸を訪ねる様子を描いた〔東六条祭主三位輔親卿旧館を尋ねる図（中和）〕（図2）、裏は東本願寺枳殻邸を描いた〔枳殻馬場（中和）〕（図3）であるが、ロ本は〔東六条祭主三位輔親卿旧館を尋ねる図（中和）〕の後にさらに「林一ノ五十八」があり、〔東六条祭主輔親卿旧館（中和）〕（図3）の図がある。②二つ目に巻之二の慈照寺の項、イ本は「林二ノ三上」裏、「林二ノ三中」表の本文に続いて銀閣寺の挿図が「林二ノ三中」裏、「林二ノ三ノ下」表・裏とあり、「林二ノ四」表の寺宝の記事に移るが、ロ本では「林二ノ三ノ下」と「林二ノ四」との間に「林二ノ四十一」・「林二ノ四十一」が2枚挿入され、「林二ノ四」を彫り改めて「林二ノ四下」としている。つまり重複した「林二ノ四十一」の丁付は「林二ノ四ノ上」・「林二ノ四ノ中」の誤りであり、この2枚がイ本より多くなっていることを指摘している。以上の増減の出入りから、イ本がまず版刻され、後にロ本のような追加が行われたとしている。①の重複分について野間は「序者である水竹居主人藤波李忠に敬意を表して、その祖輔親の故事を図するとともに、輔親の旧跡が籬島の号に因みある河原院の旧跡らしく思はれることを誇示するために、ことさら同趣の図柄を拡大重複して掲出したのであらう」としている。

さらに版の違いについては井口洋が「異本について」と題し、柳原書店から出版された『都林泉名勝図会』にて論じている。野間が明らかとした版種の差異に加え、ロ本には巻之一乾の31丁表にある「大徳寺龍光院聯芳堂」の項に改変が見られること<sup>18</sup>、巻之二20丁裏、21丁表の図〔南禅院大名国師坐禅（草偃）〕（図4、図5）について、風を示す斜線の入っている版があることを指摘している。しかし両者が指摘した箇所に加え、さらに異なる図があった。詳しくは版種の詳細とともに、第1章第1節第4項において述べる。

『築山庭造伝』（前編）との関係は上原敬二も『都林泉名勝図会（抄）』のまえがきで触れており、『築山庭造伝』（前編）を参考として『都林泉名勝図会』が作られ



ているとしている。また、上原は「本図会は名の示すごとく京都における名園・名勝地の案内記である、庭園の批判でもなければ作者その他について著者自説の展開でもない、あるがままを記録し、世評・世論にしたがって述べている。（中略）百七十年の昔にすでにこれらを図示したこと、しかも庭園を本位とした図の描き方によって示したことは現代の造園家にとって無二の参考である」と評価している。

白幡洋三郎は自身が監修する『都林泉名勝図会』上巻において、史料の構成、名所図会について、『都林泉名勝図会』の価値について論じている。『都林泉名勝図会』の魅力は挿絵にあるとし、図を解説しながら具体的に述べられ、さらに本史料でしか見ることが出来ない庭園があること、現存する庭園を挿絵と比較して庭園景観の変遷をうかがえることから貴重な史料であると評している。

『都林泉名勝図会』に取り上げられた庭園や名勝と現状との比較研究については、井口海仙の「都林泉名勝図会考」がある。これは「淡交」に 1965 年 2 月から 1967 年 12 月の間に連載され、現存している庭園を巡り、現状と挿図を対照的に示し、名勝を紹介したものである。ただし史料に掲載された全ての庭園を論じているわけではない。

飛田範夫は「『都林泉名勝図会』（巻 1）の庭園」として、巻之一に掲載されている庭園を現状と比較している。由緒や変遷について述べられ、一部本文を引用しながら考証をおこなっており、井口の「都林泉名勝図会考」が名勝的解説色の強いことに対し、飛田は造園の観点から著述している。なお飛田は平成 29 年（2017）に『京都の庭園 御所から町家まで』上下巻を出版しており、その中の「寺社の庭園」の中で『都林泉名勝図会』の挿図を多く用い、現況との比較や図の解説を記述している。

そして『都林泉名勝図会』の描写方法について龍居竹之介が「月刊公園緑地建設産業」に連載した「植栽の流れ」のなかで「『都林泉名勝図会』の植栽」について論じており<sup>19</sup>、挿図に描かれた植栽の様子を分析し、植栽方法とその効果に言及している。そこから庭の姿が分かるように庭園の手前の植栽部分は省略している可能性を指

摘し、現状との比較を行いながら挿図を読み解いている。さらに植物に注目することで、庭園以外の「伏見梅溪（中和）」（図 6）や「高雄看丹楓（文鳴）」（図 7）などの挿図に対して、「秋里が境内林、あるいは梅、紅葉といったものの楽しみ方を、とりあげていることは、庭の中の植物のありようとは別の意味で、これらの大事さを示している」<sup>20</sup>のではないかと論じている。そのため秋里は自然景観も広義の庭園と捉えていることを指摘している。

描写方法については白幡洋三郎の『庭〔にわ〕を読み解く』のなかで論じられている<sup>21</sup>。京都の庭園を論じるなかで『都林泉名勝図会』の挿図を使用し、現状との比較を行っている。その中でも龍安寺の項では、白砂の描写について言及し、「不二菴遺愛石（中和）」（図 8）のような白砂の面と芝生あるいは裸地面との境界線や「銀閣寺林泉（中和）」（図 9）での銀沙灘の形状が点線で描かれていることから、白砂はそれと分かるように表現の使い分けがされていることを指摘している。よって当時は現在のような砂紋を描けるほど厚く白砂が敷かれていなかったと推測している。また、白幡も龍居と同様に「東福寺通天橋観紅楓（文鳴）」（図 10）や「高雄看丹楓（文鳴）」（図 7）に描かれる自然風景を庭であると考えている。また、『彩色みやこ名勝図会—江戸時代の京都遊覧』<sup>22</sup>と題し、『都林泉名勝図会』を含む名所図会の挿図に彩色し、解説している。

### 第3項 秋里籬島に関する研究

秋里籬島に関する先行研究に野間光辰「附 秋里籬島ならびに竹原春朝斎について」や浅野三平「秋里籬島」、藤森玲満『秋里籬島と近世中後期の上方出版界』などがある。

秋里籬島の年齢について序章 第1節 第3項において述べたが、おおよそ生きた年代について竹村俊則が『木曾路名所図会』冒頭部、また同書巻之六の末尾にある画工西村中和の跋に

そもそも、筆を山階の里より立ちそめて、香取・鹿島・筑波山の影深く、  
このもかのもの、くまぐまで見廻りつつ、数の月日を送り迎えて、東の都  
に事を終りぬるは、ことし文化二とせの弥生なりけり、云々  
とあり、この旅行に 3 年の年月を費やしたことから籬島の古稀 70 歳は文化 2 年頃と  
推定しており、よって生年は享保 20 年（1735）頃になる。同様に藤川玲満は享和 2  
年（1802）に 65～70 歳であると仮定し、生年は享保 18 年（1733）～元文 3 年（1738）  
と推定している<sup>23</sup>。

そして藤川は籬島の文芸活動について、終末期は文化 7 年（1810）冬の『赤星さう  
し』の自序、同 9 年（1812）5 月の『ももしき』の識語、同じく文化 9 年刊の『ひし  
のはな』への出句があり、以上のことから文化 9 年までは生きていたことがわかると  
指摘している。一方竹村は文化 7 年に『秋里随筆』3 巻を著し、同 11 年（1814）に  
は『本朝勝槩記』2 巻 2 冊を刊行し、また『近江名所図会』後篇 5 冊を著そうとした  
が前篇 4 巻 4 冊のみに終わり、完成するには至らなかった。よって文化 11 年頃に病  
んで、その後間もなく没したとすれば 80 歳前後であったろうと推測している。しか  
し竹村は文政 11 年（1828）に執筆された『築山庭造伝後篇』の著者である籬島軒秋  
里という人物が秋里籬島と同一人物であるという説を挙げ、その時の籬島の推定年齢  
は 93 歳であり、そのような高齢まで生きながらえたことは考えられないと否定して  
いる。

秋里の人物像について分かる史料に国文学研究資料館蔵『秋里家譜』がある。形状  
は、縦 37.7 cm、横 51.7 cm の内雲の料紙一枚であり、家譜は墨書の本文に朱筆で振仮  
名が施される。印記は関防印と末尾署名「籬」「島」の印があり、秋里籬島の手写本  
である『天橋立紀行』（1795）の筆跡と酷似していることから『秋里家譜』は籬島の  
自筆と考えられると藤川によって指摘されている<sup>24</sup>。藤川によると、籬島の祖先は  
因幡国鳥取近くの秋里城主、秋里備前守であった。そして百年前に一家の主人が因幡  
国を出て、京都二条小川に来て医者業とし、その息子の仁左衛門は五条室町で質屋

を営み、そしてさらにその息子の仁左衛門が出家して籬島と改めた。その籬島は醒ヶ井五条に住み、かつ建仁寺町五条に別邸を構え、宗旨を浄土真宗本願寺派に改め、妙順寺の信徒になったこと、そして高瀬五条橋の北に隠居したことが書かれている。

籬島の出家の時期について藤川は、作品にみられる署名から検証している。文学活動全般を通して最も早い、宝暦 10 年（1760）の而咲堂鞭石追善俳諧集『其やなぎ』への出句以来用いているのが「湘夕」の号であるという。また「舜福」、「斑竹」の名も用いられ、そうしたなかで「籬島」の初出は俳諧の師匠である而咲堂練石の追悼文「石々翁傳」であるという。この「石々翁傳」は寛政元年（1789）に著されたものであり、末尾に「籬島 秋里湘夕」とある。その前後の著作を見ると、『拾遺都名所図会』の天明 6 年（1786）7 月自跋に「秋里舜福湘夕」とあり、「石々翁傳」以降の『大和名所図会』の寛政 3 年（1791）自跋の「秋里舜福湘夕」の署名に「籬島」の印があり、図会中にも籬島名の句が収載されている。以上のことから籬島の出家は、天明 6 年 7 月から寛政元年までの間であると推測している。

そして籬島との宗旨との関連については浅野三平が『連如上人御旧跡絵抄』等の著書があることから仏教とくに浄土真宗への強い関心があったとの見解を示し、さらに『都名所図会』の板元である書肆吉野屋為八が西本願寺に出入りしていた書肆であることを日下幸男が指摘していることを紹介している。

#### 第 4 項 『都林泉名勝図会』を用いた文化財庭園の保存修理

『都林泉名勝図会』はその豊富な挿図と江戸時代の姿がうかがえる史料として、庭園修理や整備時の参考資料として使用されることがある。その代表的な例に大徳寺方丈庭園、東福寺塔頭靈雲院庭園、建仁寺塔頭靈洞院庭園、松花堂庭園、養源院庭園、智積院庭園がある。

国の名勝である建仁寺塔頭靈洞院庭園は昭和 14 年（1939）に重森三玲によって復元修理が行われたが、その際に中島の亀頭石が崩れていたため、挿図を参考に復元さ

れた<sup>25</sup>。復元修理前は園池の護岸がかなり荒廃していたが人工が加えられていなかったため、完全に復元することができたという。

国指定史跡・特別名勝である大徳寺方丈庭園は第1期工事が昭和30年（1955）10月15日から11月15日、第2期工事が翌年6月18日から7月18日の2期に分けて修理工事が行われた。その第1期工事において白砂の鋤取りを行った際、東庭の南端にある3つの石組部分に砂中に埋まっていた2石が発見された。この事に加え、修理計画を担当していた中根金作は『都林泉名勝図会』の挿図に滝口から東庭へ一連に続く石組が描かれていること、椿その他の大刈込は滝口の立石の上に三連しか描かれていないことから現況と著しい相違があることに疑問を持ち、埋没した石組がかなりあると確信して砂中を探ったという<sup>26</sup>。その結果、滝口から東庭の最北端までの石組の間の砂中から10個の石が発見された。石が1尺以上も砂中に埋まった原因は、方丈の西から東庭の東端の地盤の高さが9寸違っており、東端が低くなっている。そのため自然排水により雨水が東の溝へ流れ入るようになっていること、日常の掃除に際して西から東へ掃く習慣があったことにより少しずつ砂が移動したために石が埋没したと中根は考えている。

京都市指定名勝である養源院は明治4、5年（1872、73）に書院が撤去されたことにより地割の変更があり、池の北方の張り出し部分的が新たに整備された。その後長らく放置されたため荒廃した。しかし築山部分の枯滝石組の優秀さが評価され、平成元年（1989）に京都指定名勝となった。庭園は植物の繁茂、園池の護岸石組の一部崩壊など美観が著しく損なわれていたため、平成3年（1991）4月より3年にわたり、庭園の復旧整備事業が行われた。この時の植栽について、『都林泉名勝図会』の挿図を参考に滝添えにアカマツを、そのほか根締めにつツジ類、ヒサカキを配植し、景が整えられた<sup>27</sup>。

国指定名勝である智積院庭園は平成21年（2009）から庭園の保存修理事業が進められている。智積院庭園は昭和20年（1945）、国指定名勝に指定された際、『都林

『泉名勝図会』の挿図に描かれた景観をよく残していることが評価されている<sup>28</sup>。そのため修復時は挿図に基づいた景観の復原が行われている。特に植栽景観について、庭園の東側にある裏山のシイの巨木化によって庭園に影を落とす等の庭園の植物に対して悪影響が出ていることや、『都林泉名勝図会』の挿図に描かれていないことを理由に伐採されている<sup>29</sup>。

## 第1章 『都名所図会』と『都林泉名勝図会』

### 第1節 『都林泉名勝図会』の構成と版種

#### 第1項 構成

研究にあたり底本として初刷りと推定される献呈本（個人蔵）を用いた（図 11）。本書は絹張りの表紙であること、摺りの状態が非常によく初刷りと見られること、紙質が良いことなどから献呈本であると考えられる。版本は木箱に収納されており、木箱の左下に「鯉印」の墨書きが見られるが何を指すかは不明である。版本の表紙は絹張りで桜の花と楓の葉が描かれている。大きさは縦 25.4 cm、横 18.1 cmの四ツ目綴じである。

底本として献呈本を選択した理由は他に類を見ない装幀であること、摺りの状態が非常に良いこと、野間の論ずるところのイ本であり挿図数が多いこと、他の研究や活字翻刻本等に使用されていないことが挙げられる。

版本の表紙は3種類が確認できており、青表紙と唐刷りの表紙、そして本研究で底本とする絹張りの表紙である。青表紙と唐表紙の版本の大きさは縦 26.2 cm、横 18.3 cmであり、献呈本と横幅はほぼ等しいが、縦 1 cmほど大きい。しかし匡郭の大きさは同じであった。献呈本は匡郭の下部が他の2部より狭くなっていることから、下部を裁断されたとみられる。また紙質にも違いが見られ、青表紙と唐刷り表紙の2部は繊維がほぐれきっておらず、繊維の塊が所々に見られるが献呈本では見られず、紙質の良いものが使用されている。版本構成は表紙の種類によって変わることなく5巻6冊構成であり、巻之一が乾・坤に分かれている。巻之一には主に洛中、巻之二には洛外北東部、巻之三には洛外東南部、巻之四には洛外北西部、巻之五には洛外南西部の林泉名勝が紹介されている。

巻之一は序文、凡例、目録、中扉、本文、挿図によって構成されており、序文は「寛政とおあまりひととせの春 水竹居主人書」とあり、署名の横に「藤波二意李忠卿」と示されていることから、寛政11年の春に藤波李忠ふじなみすえただによって書かれたことが分かる。

藤波李忠（1739～1813）とは藤波家 39 代の当主であり、伊勢神宮 95 代祭主を務めた人物である。波家は明治初期まで伊勢の神宮祭主として代々神宮祭祀に奉仕してきた家柄であり、その祖先は神代まで遡ることができる<sup>30</sup>。李忠は下冷泉家に生まれたが寛延 4 年（1762）13 歳で藤波和忠の娘 伊子の婿となり、養嗣子となった。宝暦 12 年（1762）には養父である景忠に祭主職を譲られ、95 代祭主となり、在任 17 年を経て安永 7 年（1778）に子息寛忠に祭主職を譲った。李忠は茶道を一灯宗室に学び、応挙に学び絵画を巧みにし、晩年まで筆をおくことがなかったという。文化 10 年（1813）75 歳で薨去した。

凡例は次節にて詳しく述べるとし、目録に続き中扉となる。中扉は花菱唐草紋様の地紋の中央に円相があり、その中には「剩水滄江破 残山碣石開 橘洲書」と書かれている。この詩は杜甫の「陪鄭廣文遊何將軍山林十首」の中の第 5 首の起連であることが野間によって指摘されている。白文方形の関防印は「筆研精良」、署名下の朱文方形二顆の印記は「橘」「洲」と読める。橘洲は御医法橋畑、柳泰、名は惟禎、字は世吉、橘洲と号し、詩文にも有名であったという<sup>31</sup>。

巻之五の奥には「都林泉名勝図会跋」と題する秋里の自跋がある。題下には白文方形の関防印があり「天隣白、隔囂塵」と読める。文末には「寛政十一載仲夏 平安 秋里籬島湘夕」と署し、「河原院古跡印」「籬島」の方形朱・白文二顆の印記がある。跋文に続いて以下の刊記が記されている。

法橋佐久間草偃印

畫工

法橋西村中和印

奥文鳴源貞章印

京都

吉野屋爲八

江都

須原屋善五郎

浪速

河内屋喜兵衛

河内屋太助



寛政十一巳未歳仲夏發行

六角通御幸町西江入町

皇都書齋

小川多左衛門梓

本文は名勝ごとに文頭を1字上げており、次行に続く文章を下げて記していることから、項目として分けられていることが分かる。よって本文中の項目は93項目あり、巻之一に21件、巻之二に27件、巻之三は15件、巻之四は16件、巻之五は14件の名勝が紹介されている。本史料に見られる名勝を各巻ごとに項目を抜き出し、一覧にしたものを表2の本文項目とその内容一覧にて示した。取り上げられている名勝は寺院や神社が多く、古跡や陵、野や溪などの自然名勝も含まれている。各名勝における記述内容は所在地、山号、開山、沿革（解説）、塔頭・坊、建築、庭園、境地、持仏、什宝、虫干し、名水、年中行事・祭事、植物、引用・参考文献、詩歌について記述されている。同表内で、各名勝の記述内容に従って項目を最上段に示し、各項目において記述されている内容については○印で示した。各項目の凡例として、塔頭・坊の中にも建築や庭園、什宝については個別で明記しているが、ここではそれぞれ建築、庭園、什宝の項目に振り分けている。建築では建築年代や大きさ、扁額について書かれている。什宝の多くは襖絵などの障壁画であり、その他の絵画、工芸品などがある。虫干しは文章で書かれているのではなく、本文中に建物に見立てた枠の中に絵画の名称や作者名を什宝があった位置に書き込み、虫干しをしている室内の様子が図によって示されている（図12）。植物の項目では境内地にある名のある植物や、植物によって名勝となっている場合の記述を分類した。なお庭園内の植栽については庭園の項目に含めている。その結果、各名勝によって記述項目は異なるが、寺院の沿革や名勝の解説は多くの名勝で記されており、また大多数の名勝において引用や参考とした文献を挙げて客観的な内容を示している。

庭園に関する記述については、表2において各項目における庭園の記述がされているものについて「林泉」の欄に○印で示した。これを見ると、庭園に関する記述の全

体に占める割合を見ると 93 件中 33 件に庭園に関する記述があり、全体の約 35%にあたる。庭園に関する記述について、本文中の該当箇所を抜粋した表を表 3 に示す。これによれば、内容は庭園の評価、庭園内にある名石や名水、作庭者であり、挿図に描かれていない庭園についても記述されている。

次に挿図の構成について述べる。挿図の構成は図 13 において図説する。挿図には名勝に関する図が描かれているほか、挿図題名、文章による名勝の説明、名勝に関する漢詩や歌が図の余白部分に書かれている。これらはすべての挿図に書かれているわけではなく、名勝の名前と詩歌が書かれたり、庭園を描いている図では作庭者や庭園の特徴が書かれたり、挿図によって様々である。挿図の中にはその名勝の名石や名木、名水などの名品が囲み文字で書き示されている。挿図は西村中和、佐久間草偃、奥文鳴の 3 人の画工によって描かれており、挿図の裾辺に画工の名前が記され、どの図をどの画工が描いたか分かるようになっている。各画工の印象については次に述べる。

挿図は巻之一に 43 件、巻之二に 45 件、巻之三に 27 件、巻之四に 24 件、巻之五に 19 件あり、全体で 158 件ある。本研究において挿図の考察を行うため、掲載順に挿図に番号を振り、図題と丁数、画工を一覧にした表を作成した（表 4）。なお、図題のないものは描かれた内容を参考に図題をつけ、判別できるよう括弧書きで表内に示した。

挿図は名勝につき 1 件から複数件の図が描かれている。挿図の描き方には 4 つのパターンがあり、挿図に用いる丁数の違いによって分けられる。①「大徳寺塔頭芳春院（中和）」（図 14）の様な半丁分の挿図、②「大徳寺方丈（中和）」（図 15）の様な 1 丁分の挿図、③「大徳寺塔頭寸松庵（草偃）」（図 16）、「其貳（草偃）」（図 17）の様な 1 丁と半丁分の挿図、④「金閣寺（中和）」（図 18）、「其二（中和）」（図 19）の様な半丁と 1 丁分の挿図、⑤「知恩教院方丈林泉其一（草偃）」（図 20）「其二（草偃）」（図 21）の様な 2 丁分の挿図がある。③～⑤のパターンの挿図の図題は其一、其二とされる場合やどちらか一方の図題が省略される場合がある。ただし図題に其一、其

二とあっても「清水成就院其一（草偃）」（図 22）「成就院其二（草偃）」（図 23）の様に 2 図が連続していない挿図もある。

挿図には庭園や名勝そのものを描くだけではなく、そこに集う人々の生き生きとした様子が共に描かれている。例えば、安養寺の塔頭のひとつを描いた「圓山多蔵庵春阿弥（中和）」（図 24）では、室内で食事をしたり遊んだりのにぎやかな様子が描かれている。その賑わいの中で、庭園を鑑賞している人物が描かれている。縁先では 2 人の人物が話し合いながら庭園を鑑賞している姿や今散策に出ようとしている女性の姿がみられ、庭園の奥には散策している人物の姿がみられる。また、南禅寺の境外塔頭である「光雲寺（中和）」（図 25）の挿図を見ると、室内にいる人は煙管をふかして外を見ている。そばにはうちわが置いてあることから、夏の様子であると分かる。その手前には行燈の明かりによって障子越しに人影ができていたり、縁側に立って外を見ている人が手燭を持っていることから夜の風景と分かる。庭園には蛙や鷺が描かれており、その鳴き声に誘われて人々は庭園を見ているのかもしれない。

これらの挿図のように庭園を鑑賞する人物や、その場でにぎやかに宴をしている様子などが描かれ、人の生き生きとした姿を庭園とともに描かれていることが本史料の特徴である。本史料では文章で庭園の見どころや特徴をほぼ説明していないため、挿図にそのヒントが隠されているのではないかと考える。

そこで、多くの人物が庭園と共に描かれていることから、人物が示す行為が庭園とどのような関係性にあるのかを考察する。その結果、挿図内に描かれた人物によって示される働きは 3 種類見られ、その働きは庭園の性質を示す人物の働き、庭園の鑑賞位置を示す人物の働き、庭園の見どころを示す働きの 3 種類に分けることができた。それぞれの人物が示す働きについては次章にて述べる。

## 第 2 項 『都林泉名勝図会』の凡例にみる編集意図

『都林泉名勝図会』の編集方針について以下に引用するように、凡例にその大要が

示されている。凡例の考察を踏まえ、その編集意図を明らかにしていく。

まず、『都林泉名勝図会』を著すにあたり、指針を示した凡例がある。

- 一 この書は前板築山庭造伝を基とし、京師四方名庭の林泉を聚て、  
新に都林泉名勝図会と題書す。しかれども宮殿・台榭・山閣・水亭・  
蝸舎・蓬戸の林泉なほすこぶる多し、余は他日縁を需て巡覧し、後編  
に備ふ

『都林泉名勝図会』が享保 20 年（1735）に刊行された北村援琴による『築山庭造伝』を参考とし、京都の名園を収録し、新たに編集したものであることを示している。

しかし多種多様の庭園が『都林泉名勝図会』で取り上げられたもの以外にも多くあるため、他日調査をして後編に向けて準備するとしている。よって『都林泉名勝図会』を執筆した時点では、秋里は続編を制作するつもりがあったことが分かる。

次に凡例で掲げられたのは寺院の什宝についてである。

- 一 諸寺方丈書院の名画名筆、または什宝虫干の体相の大略を書する  
は、その寺院の莊嚴京師の美観なり。しかりといへども際限あらざれ  
ば具に記するは事あたはず、余は寺僧に尋て詳にすべし

本文中に寺院が所有する名画や名筆などを記し、さらに虫干しの様子を図式して掲載している。秋里はその光景を寺院の莊嚴、京都の美観と捉えていることが分かる。すべての什宝を記すことはできないため、詳細は寺を訪れ、僧に尋ねるよう断っている。

次に、挿図関する凡例である。

- 一 勝地によつて風流の図あり、あながち林泉に寄ざれどもその地の  
風光を彰さんためなり。また典故の絵あり、これも右に准ず。いはゆる  
紫野若草、伏見梅溪、河合納涼、高雄紅葉、大堰川三船等のたぐひ  
なり

必ずしも庭園を取り上げるとは限らず、その地の風光、つまり自然の美しい景色を

紹介するため、勝地によっては「風流の図」が描かれている。また同様に、故事などを基として描いた「典故の絵」があることも述べている。本史料には多くの挿図があるが、それらは林泉図、風流の図、典故の絵の3種があることが示されており、これに従って挿図を類別することが出来る。類別については次項にて詳しく述べる。

次に庭園に関連する詩歌についての凡例が示されている。

- 一 林泉に古人の詩歌寡なし。かるがゆへに今時京師において名家の詩歌を乞需て多く図中に釘す。その中に作者自筆の詩歌もあり、俳諧狂歌もまたこれに准ず

庭園に関する個人の歌が少ないため、当時の京都の名家に詩歌や俳諧、狂歌の制作を依頼し、それらを図中に記すとしている。また、その中には秋里自作の詩歌もあるとしており、俳諧師らしい工夫が見られる。

挿図中に示される詩歌、俳諧、狂歌をすべて抜き出し、挿図ごとにまとめたものを表 5 に示す。図中の詩歌について、全挿図 158 件のうち 92 件（59%）にあり、半数以上の挿図に詩歌が記載されている。さらに詩歌のある図を挿図の種類別にみると林泉図は 49 件（49%）、風流の図は 34 件（84%）、典故の絵は 9 件（53%）であった。詩歌のない図では林泉図は 50 件（51%）、風流の図は 7 件（17%）、典故の絵は 8 件（47%）であった。凡例で言及している林泉に関する詩歌は林泉図の約半数に詩歌が記載されているのに対し、風流の図が詩歌を有する割合は高く、林泉に関する詩歌が少ないためかと考えられる。さらに挿図と相対する本文を見ると、28 件の項目に詩歌の記載があった。挿図にのみ詩歌が記載されているものは 72 件であり、挿図と本文の両方に詩歌が記載されているものは 20 件、本文にのみ詩歌が記載されているものは 8 件、そして本文と挿図の両方に詩歌が記載されていないものは 57 件であった。本文に詩歌が紹介されていない名勝において挿図中に詩歌が記載されている場合が多いようである。

挿図中の詩歌が持つ役割を明らかにするためには、挿図との関係性を考える必要が

ある。各挿図中の詩歌をみると①～⑤の特徴がみられた。それらの特徴は①宴会や紅葉などの描かれている光景に合わせて採用された挿図の情景にあわせた詩歌、②名勝に直接結びつくものではなく、挿図に描かれたものから連想した詩歌、③名勝の祭礼を詠んだ詩歌や名勝と関連のある作者が詠んだ歌など、名勝と直接的に関連した詩歌、④名勝名や名勝の姿から連想して選ばれた詩歌、⑤名勝と直接的な関連性はないが、その季節感を強調した詩歌の 5 種類が見られた。これらの分類は表 5 において色を分けて示した。その結果、③名勝と直接的に関連した詩歌が多く、61 首あった。次いで②挿図に描かれたものから連想した詩歌が 28 首、①挿図の情景にあわせた詩歌が 10 首、⑤季節感を強調した詩歌が 5 首、④名勝の姿から連想した詩歌が 3 首あった。依然未分類のものも多く、研究を深める必要がある。

挿図と詩歌の関係について検討した研究として、ロバート・ゴーリの「名所図会解釈の可能性―秋里籬島の句の働きについて―」がある<sup>32</sup>。ゴーリは秋里が名所図会において詠んだ和歌や発句を文学的な視点から検討し、詩文が名所図会を解釈することに役立っていると述べている。『都名所図会』、『拾遺都名所図会』、『大和名所図会』、『和泉名所図会』、『摂津名所図会』、『東海道名所図会』、『河内名所図会』、『木曾路名所図会』の 8 作の名所図会における秋里の詩歌を分析し、詩歌に 8 種の機能があることを指摘している。その機能は広告としての句、風景賞賛としての句、日常性の面白みとしての句、感覚的に人を刺激させる句、歴史・伝説を想像させる句、編集者の籬島が文学者であると認識できる句、文学的に楽しむ句、旅そのものを描写した句、女性の心に訴える句があるとしている。このことから、名所図会において詩歌と挿図の関係は強く見られることが分かる。その一例を挙げると、広告としての句に挙げられた『木曾路名所図会』巻之一「鳥居本神教丸店」という挿図には「くれなゐの花にいみじくおく露も薬にならひ赤玉といふ」という狂歌がある。図を見るだけで神教丸に興味を持つのは明らかだが、薬という名物が読者により強いインパクトを与える。赤い花を薬に見立て、この薬の赤い色をよりいっそう印象付けてい

る。この店は新名所であるが、詩文で表現されることにより、店が文化的な価値を持つように見えるという効果もあると指摘している。

本文と挿図中の詩歌の作者は 146 人おり、その詳細は作者ごとに詩歌の掲載数と共に表 6 に示す。これを見ると、最も多く詩歌が記載されている作者は秋里籬島の 20 件であった。次いで多いのが伴蒿蹊の 7 件である。この伴蒿蹊（1733～1806）という人物は、秋里が後年に師事していた歌人である<sup>33</sup>。他の名所図会に共通して取り上げられている作者について藤森玲満が指摘しており<sup>34</sup>、竜公美（草廬、草蘆）：『摂津名所図会』に漢詩を 2 篇所載、六如庵慈周：『摂津名所図会』に漢詩を 1 篇所載、鶴山畑維龍：『東海道名所図会』に 2 篇の漢詩を所載、皆川淇園：『東海道名所図会』に 2 篇の漢詩を所載、千代道：『木曾路名所図会』に狂歌を 1 首所載、九鯉：『摂津名所図会』に狂歌を 2 首所載、東海澤菴：『和泉名所図会』に 1 篇、『東海道名所図会』に 4 篇、『木曾路名所図会』に 1 篇の漢詩を所載、以上の 7 名である。

さらに、次の凡例では画工について言及している。

- 一 画工は一筆にあらざれば、図ごとの印章におのおの姓名あり、これをもつて画師を鮮に知べし

図は 1 人が描いているものではないため、挿図ごとに画工の印章を示し、どの画工が手掛けたものかを知ることができるようにしている。挿図は西村中和、佐久間草偃、奥文鳴の 3 人の画工が描いている。それぞれの印章は図の裾部に示されており、中和は 2 つの半円形の枠にそれぞれ「中」「和」の文字を入れ直径同士を上下に向き合わせた形状（図 26）、草偃は「艸」「偃」をそれぞれ 2 つの円形の枠に入れて上下に並べた形状（図 27）、文鳴は 3 種あり、多く用いられているのは 2 つの角丸方形の枠にそれぞれ「文」「鳴」を入れた形状（図 28）であり、「文鳴画」の下に角丸方形の枠にそれぞれ「貞」「章」を入れた形状のもの（図 29）、もうひとつは「文鳴」の署名の下に「貞章」と印記された白文方形の印章（図 30）である。

次に庭園を描いた図についての凡例である。

一 庭造の法則あるは側の亭宅を除て画く。これは林泉の軌範となるべきの料なり。法則僉なるは舎屋を図し、風景を専とす。また四季折々の花樹あるは、大略その樹々をしらせんために、時節に寄らずこれを画く、たとへば梅桜蓮楓あるの類なり

庭園が造園技法にしたがって造られている場合は側にある邸宅の建物を除き、庭園のみを描くとしている。反対に技法のおろそかな庭園では建物を描き、風景を主要とした図を描くと述べられている。このことから秋里は、意図して庭園の背景を描かせていたことが分かり、少なからず造園技法の知識を有していたことが分かる。さらに植物については、庭園の植物が判別できるように梅や桜、蓮、楓などは開花期やその見ごろの時期の様子を描くとしており、その様子から季節を知ることが出来る。

最後に挿図における遠景についての凡例を示している。

一 法則によつて遠景をとる庭中はすべてその遠景を図し、遠景不用意の庭はこれを省く。また図ごとに人物の画の小大あり、その貌の小大によつて林泉の広狭をしるべきなり。

遠景を利用した庭園は全てその景を描き、遠景を利用していない庭園は景色を省くとしており、明確に分けられていることが分かる。また、スケールについては図ごとに人物を描き、その大きさによって庭園の大きさを知る目安としていることが分かる。そのため全ての挿図に人物が描かれている。

秋里籬島は『都名所図会』をはじめ、近畿各地や東海道など多くの名所図会を著しており、『都林泉名勝図会』は 11 作目の名所図会にあたる。その後も河内、木曾路と計 16 種の名所図会を記している。それらの凡例と比較し、『都林泉名勝図会』の凡例の特徴やそこに至るまでの変遷を知ることができ、さらに秋里の名所図会に対する考えや編集方針を明らかにすることができると考える<sup>35</sup>。各名所図会の凡例の差異は表 7 に示す。凡例は書物の性格を示すものと、挿図に関する凡例とに分けられ、さらに細かく内容が別れている。書物の性格を示す凡例の中には対象とする地域、対象



とする名所、底本・種本、執筆姿勢、引用に関するもの、続編についてなどが見られた。挿図に関する凡例については対象とする名所、スケール、風流の図、祭礼図、詩歌、画工について見られた。表中では各項目に分け、該当する記述内容を引用して示した。史料によって書かれている項目が異なるため空白があるが、対象となる記述がなかったことを示す。

名所図会の凡例は、まず対象となる地域の範囲と相対する巻号について述べられ、続けて対象となる名所の選定基準が示されている。例えば『都名所図会』では「神社の芳境、仏閣の佳邑、山川の美観等」としている。『木曾路名所図会』と『東海道名所図会』では『延喜式』神名帳を参考に取り上げる神社を選定している。そしてその名所の記載や図が当時の姿を現すのか、過去の姿なのかといった時間軸について説明している。そして『都名所図会』や『木曾路名所図会』では執筆に当たり参考とした書を明記している。挿図に関する凡例では、境地が広大なものは細画で表し、小祠は図にしないなど図の示し方について明記し、名所や古跡以外にも祭礼を描いた図があることを示している。

各名所図会の凡例を見ると、当時の風景をありのままに写すことが共通しており、『大和名所図会』の凡例に始めて「古歌のこころを画する」とあり、実際の風景以外の画題があることを述べている。これは『住吉名勝図会』の凡例にも書かれており、これらは『都林泉名勝図会』の典故の絵に通じるものである。そして『都林泉名勝図会』の凡例には風流の図があることを述べているが、同様の凡例が『都名所図会』からすでに見ることができた。『都名所図会』では「図中の間に人物の大画あり。四時の佳観を賞して遊樂の地を知らせんためなり。洛東の花見、宇治螢狩等なり」とある。

『拾遺都名所図会』では「あながち名所古跡にかかはらず、その辺の地勢によつて風流の景気を画するものなり。旅行の人、道に迷ふて里人に声を上げ尋ねる体、または野原を往来するに、暴風に適ふて笠をとらるる体などの類なり」とあり、『都名所図会』より物語性のある画題となり、より読者を楽しませる性質が強くなっている。名

所や古跡の姿をそのまま描くだけでなく、よりその名所を知ることが出来るよう、風俗画を加える姿勢は名所図会刊行当初から見られ、『都林泉名勝図会』まで変わらず引き継がれていることが分かる。

『都林泉名勝図会』は3人の画工によって挿図が描かれていることから、画工がその図を手がけたかが分かるように図に印章を施すことで示すことが凡例に書かれているが、同様に複数の画工によって挿図が描かれている名所図会に『摂津名所図会』と『東海道名所図会』がある。両名所図会とも神社の細画は『都名所図会』など名所図会で挿図を多く描いている竹原春朝斎が手がけており、そのほか景物などは複数の画工によって描かれていることから、凡例には春朝斎以外の図に印章を施すことが記されている。

『都林泉名勝図会』の挿図に人物が描かれていることが特徴であることは前述にも述べたが、そもそも画中人物は『都名所図会』から見る事ができる。その人物について凡例では「形容いたつて微少なる人物は、その地の広大をしるべし。形容微少ならざるは境地狭少なり」とあり、人物の大きさが名所の広さによって描き分けられており、境地の大きさを知るスケールの役割を担っていたことが分かる。これは『都林泉名勝図会』でも同様の働きを持つことは変わっておらず、当初から変化のない基準であったことが分かる。

さらに、『都林泉名勝図会』は序者藤波李忠によって「貴賤老幼も車馬のいたはりなく、居ながらにして幽邃の風景をめでたのしませむの心おこして、あづさにちりはむるこそまことにおおかたならぬ雅趣なりけれ」と評された挿図のありようは、『都名所図会』の凡例から見る事ができた。『都名所図会』では挿図について現在の風景をありのままに模写し、「幼童の輩、坐らにして古蹟の勝地を見ることを肝要とす」ことが記されている。また『大和名所図会』でも「事実を画するは、童蒙の見安からん便とす」とあり、秋里籬島は名所図会を手掛け始めた初期から、実際の風景そのままに描くことは、子供が家に居ながらにして名勝を見ているように思わせることが

できると考えていたことが分かる。その考えが『都林泉名勝図会』まで変わらず引き継がれていたことが分かる。

### 第3項 挿図の類別

挿図は前項で上述したとおり、庭園が描かれた林泉図の他に、その地の風光を描いた風流の図と典故の絵があるという。この凡例に従い、挿図を3種に類別した。その類別の基準として凡例に挙げられた挿図の例を参考とし、また挿図の主題によって判断した。林泉図は庭園が図の主題となるものを分類した。挿図によって庭園の描き方は様々であり、「西六條本願寺對面所林泉（中和）」（図 31）のように庭園のみを描く挿図や「清水寶生院（中和）」（図 32）のように庭園とそこから見ることのできる景色をともに描く挿図、「赤山社（中和）」（図 33）のように境内伽藍をともに描く場合などがあるが、どれも主題は庭園であるため等しく林泉図に類別した。典故の絵は故事をもとにした挿図であり、「田村將軍遇僧延珍（草偃）」（図 34）がこれにあたる。この図は『清水寺縁起』中の坂上田村麿が妻高子の出産のために菓狩をしている最中に賢心、のちの延鎮に出会ったという故事を参考にして描かれている。このほかにも白河院（1053～1129）御遊の時、鵜が池中から金覆輪の太刀をくわえて上がってきたという逸話を基に描いた「神泉苑御遊（草偃）」（図 35）などがある。典故の絵には庭園が描かれた図もあるが、庭園よりも故事に重きを置いているので、典故の絵に分類した。風流の図は凡例に挙げられているように「紫野若菜摘み（文鳴）」（図 36）、「伏見梅溪（中和）」（図 6）、「河合納涼（文鳴）」（図 37）、「高雄看丹楓（文鳴）」（図 7）などがある。どれも季節に応じた名勝のようである。また、凡例には「大井川三船御遊（中和）」（図 38）も挙げられているが、これは故事を基にした挿図であるので典故の絵であると考えられる。

上記の分類基準をもとに挿図の分類を行った結果は表 4 の右欄に挿図の種類を示した。また、その表をもとに、表 8 に各巻の挿図種類の割合を示した。挿図は全部で

158 件あり、最も多い挿図は林泉図の 100 件であり、全体の約 63% を占める。次いで風流の図が 41 件（約 26%）あり、典故の絵は 17 件（約 11%）であった。やはり庭園に特化して書かれた書物であるため、林泉図が最も多いことは当然と言える。さらに林泉図以外の風流の図と典故の絵にも庭園が描かれていることがあり、これを含めると全体の約 77% の挿図に庭園が描かれている。

秋里の著作による京都の名所記での林泉図と比べると、『都林泉名勝図会』の挿図数は圧倒的に多いことが分かった（表 9）。書名に「林泉」と冠することから、庭園を描く図が最も多い。京都の名所案内記である 5 作中で林泉図の件数を比較すると、『都名所図会』では 244 件の挿図のうち林泉図は「神泉苑」、「東殿」、「銀閣寺」の 3 件（約 1%）であった。『拾遺都名所図会』では 164 件の挿図のうち林泉図は「大泉寺」と「藪内茶亭庭中之図」の 2 件（約 1%）であった。『京の水』、『都花月名所』には林泉図は描かれていない。これに対して『都林泉名勝図会』では 100 件（約 63%）である。京都の名所案内記のなかで本史料の林泉図の割合が圧倒的に多く、『都林泉名勝図会』は庭園に特化した名所図会であることがこの結果からもうかがい知ることができる。

他の 4 作は挿図の件数より本文の項目数が多いことに比べ、『都林泉名勝図会』では本文の項目数より挿図の件数が勝っている。また本文内の庭園に関する記述は 3 割程度であり、ひとつの庭園に対しての記述量が少ない。さらに、挿図で取り上げている庭園すべてに記述がされているわけではない。このことから、『都林泉名勝図会』は文章による庭園の紹介ではなく、挿図によって庭園の紹介、説明をしており、いかにこの名所案内記で挿図が重要視されていたかが分かる。そのため文章頁より挿図頁のほうが多くなっているのだろう。よって『都林泉名勝図会』では挿図に重きを置いていたと考えることができる。

さらに画工別に注目すると（表 10）、最も多く挿図を描いたのは中和で 79 件、次いで草偃の 52 件、文鳴は 26 件である。圧倒的に中和の挿図が多い。中和は『都林泉

名勝図会』以前に版行された秋里の著書『源平盛衰記図会』（寛政 6 年（1794））や『近江名所図会』（寛政 9 年（1797））などで挿図を手掛けていたこともあり、秋里との関係性から挿図の多さが比例している可能性がある。『都林泉名勝図会』以降も秋里の著書の画工を務めている。

画工ごとに挿図の種類をみていくと（表 11）、各画工が手掛けた挿図の特徴が分かる。中和は 79 件の挿図のうち、林泉図が 53 件、風流の図が 18 件、典故の絵が 8 件であった。草偃は 53 件の挿図のうち林泉図が 44 件、風流の図が 2 件、典故の絵が 7 件であった。文鳴は 26 件の挿図のうち林泉図が 3 件、風流の図が 21 件、典故の絵が 2 件であった。挿図の種類に関係なく、庭園が描かれた図は中和が 63 件の約 40%、草偃が 50 件の約 32%、文鳴が 9 件の約 6%である。中和と草偃は庭園の描かれた図を多く描いている。一方文鳴は、庭園を描いた図が中和と草偃と比べて少ないが、風流の図を多く描いている。

#### 第 4 項 版本の種類

序章 第 2 節 第 2 項でも述べたが、『都林泉名勝図会』は野間光辰や井口洋によって異なる版があることが指摘されており、その差異は 4 箇所見られることが分かっている。また、野間は巻之五の 31 丁裏と裏表紙見返しとの間に河内屋太助蔵版書目 2 丁を挿入したもの、口本の 58 丁重複分を 1 枚除いた版があることも指摘している。よって、先行研究において 4 種の版があることが判明しており、以下に示す。

- ・ A 墨付 259 丁本（イ本）
- ・ B 墨付 262 丁本（ロ本）：巻之一に「林一ノ五十八」が足され、巻之二に「林二ノ四十一」、「林二ノ四十一」（「林二ノ四ノ上」、「林二ノ四ノ中」の誤りか）が増補され、「林二ノ四」が「林二ノ四下」に改められている。
- ・ B'（ロ本の後摺本）：ロ本の巻之五に河内屋太助蔵版書目 2 丁を挿入したもの

・B' '

: ロ本の巻之一の 58 丁重複分を除いたもの

しかしこの指摘以外にさらに異なる箇所があり、「吉祥院村中陽泉亭（中和）」の挿図において 2 種が存在する。本研究の底本とする献呈本では、園池に船を浮かべて遊んでいる図が描かれている（図 39）。一方、野間が『京都叢書』において底本としたロ本には園池に船が描かれていない（図 40）。しかし献呈本もロ本であるため、同じロ本でも異なる版があることは明らかである。

この結果をふまえ、翻刻活字本や複製本などの書籍を含む 19 部の調査を行った。調査項目として、「大徳寺龍光院聯芳堂」の記述に改変があるかどうか、〔東六条祭主三位輔親卿旧館を訪ねる図（中和）〕・〔枳殻馬場（中和）〕の図があるかどうか、〔南禅院大明国師坐禅（草偃）〕に風の表現があるかどうか、「吉祥院村中陽泉亭（中和）」の図に船が描かれているかどうか、奥付における差異、この 5 点について確認を行った。その結果を表 12 示し、「大徳寺龍光院聯芳堂」の改変前は○、改編後は×で示した。〔東六条祭主三位輔親卿旧館を訪ねる図（中和）〕・〔枳殻馬場（中和）〕の図がある物には○、ないものには×で示し、〔南禅院大明国師坐禅（草偃）〕、「吉祥院村中陽泉亭（中和）」の 2 つの挿図の差異について調査した。「大徳寺龍光院聯芳堂」は改変前を○、改編後を×で示し、〔南禅院大明国師坐禅（草偃）〕に風の表現があるものを○、描かれていないものを×で、「吉祥院村中陽泉亭（中和）」で船が描かれているものを○、描かれていないものを×で示した。

その結果、本文や挿図の差異によって版本の種類を分類することは不可能であった。本文や挿図の差異に明確な規則性はなく、おおよその板行年を考慮しても使用される板は違っていたことが考えられる。しかし、奥付の違いから版が分かれているのではないかと予想できる。①板行書林を「京都 吉野屋為八、江都 須原屋善五郎、浪速 河内屋喜兵衛、河内屋太助、皇都書齋 小川多左衛門」とする奥付と②「京都 吉野屋為八、江都 須原屋善五郎」の丁だけを除いた版、③「京都 吉野屋為八、江都 須原屋善五郎」の丁を残し、その後「浪速 河内屋喜兵衛、河内屋太助、皇都書齋 小川多左

衛門」にあたる丁部分に多数の書林を列記している版の 3 種が確認できた。ただし、③の版には多数挙げられている書林に違いが見られ、この版のなかでさらに 2 種に分かれている。さらに、①や②には見られない扉絵が加えられたり、巻一の乾坤に分かれる部分が異なっていたり、構成に手が加えられている様子が見られた。

奥付の後に蔵版目録が足されている版本が個人蔵（旧来田蔵）と国際日本文化研究センターデータベースに掲載されている版の 2 種あり、その目録に示されている版本について検討を行った。書名からその板行年と作者を『国書総目録』によって明らかにした。

まず、個人蔵（旧来田蔵）の蔵書目録には「名所記総目録（浪華心斎橋通唐物町書林）河内屋太助梓行」と示され、2 丁にわたり蔵書が示されていた。その書名は以下に記す通りである。これらの書名において明らかになった板行年の中で、最も遅いのは嘉永 4 年（1851）の『紀伊国名所図会』の後編である加納諸平撰『同後集続編』である。目録には「続出」とあることから、後編はすべて板行済ではなかったようである。即ち、個人蔵（旧来田蔵）版は 1851 年以前に刊行されていたことは確かである。以下にその蔵書目録を示す。

『五畿内名所図会』：秋里籬島著 寛政 10 年（1798）、『都名所図会』：秋里籬島著 安永 9 年（1780）、『大和名所図会』：秋里籬島著 寛政 3 年（1791）、『和泉名所図会』：秋里籬島著 寛政 8 年（1796）、『東海道名所図会』：秋里籬島著 寛政 9 年（1797）、『木曾路名所図会』：秋里籬島著 文化 2 年（1805）、『伊勢路名所図会』：不明、『廿四輩順拝図会』：了貞著 前編：享和 3 年（1803） 後編：文化 6 年（1809）、『山陰道名所図会』：不明、『南海道名所図会』：『南海道名所志』不明陰山梅好著 寛政 4 年（1792）、『紀伊国名所図会』：（初・二編）高市志友撰 文化 9 年（1812）（三編）加納諸平撰 天保 9 年（1838）、『同後集続編』：（後編）加納諸平撰 嘉永 4 年（1851）、『唐土名勝図会』：岡田玉山（1737-1812）・岡熊岳（1762-1833）・大原東野（1771-1840）、『唐土訓蒙図会』：不明、『山城

名勝志』：大島武好 正徳元年（1711）、『山州名跡志』：白慧 正徳元年（1711）、  
『帝都画景一覽』：（前編）章川清勲 文化 6 年（1809）（後編）頼山陽 文化 13  
年（1816）、『京の水』：秋里籬島著 寛政 2 年（1790）、『都細見之図』：『都  
細見図』不明 正徳元年（1711）、『都名所〇〇』：不明、『花洛細見図』：金屋平  
右衛門編 宝永元年（1704）、『出来斎京土産』：延宝 5 年（1677）、『京師巡覧』：  
『京師巡覧集』 丈愚 延宝 7 年（1679）、『都歳時記』：坂内直頼 文化 3 年（1806）、  
『日本風土記』：坂内直頼 秋里補 享和 3 年（1803）、『大日本国花万葉記』：『国  
花万葉記』不明 元禄 10 年（1697）、『難波丸綱目』：志田垣与助撰 延享 5 年（1748）、  
『摂州志』：『五畿内志』の内 49-61 巻を指すか 享保 20-21 年（1735-1736）、  
『長崎記行』：下夜庵太祇 宝暦年間（1751-1763）、『東国名勝志』：鳥飼醉稚 宝  
暦 12 年（1762）、『東此記行』：不明、『西国船路記』：『西国船路名所記』不明  
元禄 15 年（1702）、『都みなしの〇』：不明、『住吉名勝図会』：秋里籬島著 寛  
政 6 年（1794）、『勝地真景 山水奇観』：淵上旭江（前編）寛政 11 年（1799）（後  
編）享和 2 年（1802）、『摂津名所図会』：秋里籬島著 寛政 8 - 10 年（1796-1798）、  
『難波国の〇』：不明

一方、国際日本文化研究センターに所蔵されている版には半丁分の目録が掲載され  
ている。それらの書名は以下に示すとおりである。『国書総目録』に見られない書名  
が多かったが、明らかとなった書物の内、最も遅い板行年は『喫茶余禄』の天保 6 年  
（1865）であった。よって、それ以前に板行された可能性があるが、板行年の不明な  
ものが多かったため定かではない。以下にその蔵書目録を示す。

『綱鑑易知録』：河内屋太助刊行か、『同明鑑』：不明、『呂氏読詩記』：『呂氏家  
塾読詩記』不明宝永元年（1704）、『読書録并続』：不明、『新刻助字考』：『助字  
考』伊藤東涯 『新刊助字考』不明 寛政 8 年（1796）、『箋淫李杜絶句』：不明、  
『文章軌範評林』：松井羅洲 天明 8 年（1788）、『題書詩選』：不明、『同詩刪』：  
不明、『考槃余事』：不明、『喫茶余禄』：深田正韻（香実）（初編）文政 12 年（1829）



序、『同二編』：深田正韻（香実）『喫茶余録』（二編）天保6年（1865）、『茶話指月集』：藤村庸軒（当直）述 河東散人鶴巢記 元禄14年（1701）、『敢学集腋』：不明

蔵書目録によって、①の版は後年にも板行されていること、また表12中にある国文学研究資料館一般④のように『五畿内名所図会林泉韻』と書名を変えて板行されていることを考慮すると、複数の書林がそれぞれ組み合わせの異なる版木を所有したために、版によって本文や挿図が異なり、その版木の組み合わせが統一されていなかったことが推測できる。

## 第2節 『都林泉名勝図会』における名勝の対象地と都の範囲

### 第1項 『都林泉名勝図会』における名勝の対象地

『都林泉名勝図会』の本文中に取り上げられている93件の項目の内容について、本章第1節第1項において論じたが、本史料に取り上げる名勝にはどのような項目があるのか。本文項目を寺院、古跡、門跡寺院や御陵などの皇室関係、名勝、神社、行事、物語に分類した。その結果は表13に示す。本文に取り上げられる名勝は93件あり、それらを名勝の性格によって分類すると、寺院40件（約37%）、古跡28件（約26%）、皇室関係18件（約17%）、名勝16件（約15%）、神社5件（約5%）、行事1件（約1%）、物語1件（約1%）であった。古跡と皇室関係など2種の種別を備えた名勝もあるため、重複しているものもある。以上のように、寺院に関する名勝が最も多いことが分かった。

さらに、それらの名勝が同じ京都を舞台とした秋里の名所図会である『都名所図会』と『拾遺都名所図会』に同じ項目が見られるかを調査した。表の右側に本文中に名所の項目があったものは○で示し、項目名が異なる物は括弧がきで示した。項目が見られなかった名所は空欄で示している。その結果、『都名所図会』と『拾遺都名所図会』に取り上げられた名所が『都林泉名勝図会』にも多く取り上げられていることが分か

った。一方、本史料にのみ取り上げられている名勝には、白河院の新宮であり、その後万寿寺となったとしている「六条内裏」や神楽岡の近くにあるが当時は曖昧となっていた「冷泉院陵」、邦綱の山荘の園池から名付けられたという「若松池」など当時古跡となっていた場所やその所縁の場所、天皇陵などが見られた。本史料に古跡が多く取り上げられている理由として、秋里は跋文において知ることができる。以下に跋文の一部を記載する。

いにしへをしたふからに、なほこゝかしこを思ふに、寛平法皇の亭子院の御園、中川の水せき入れし上東門院のわたどのゝやり水、鳥羽の離宮祭主輔親卿の天橋立なども、唯名のみなるは悲し。されば、今さだかに遺れる所を見ぬ人にも、しらせまほしく、画工をいざなひて、露たがはずうつさしめ、<sup>なづけ</sup>目で都林泉図会といふ

古跡となって忘れ去られることを憂いた秋里は、画工を連れてその景色を描かせたと記しており、本史料にはその狙いがあるとしている。秋里にとって古跡を取り上げることは重要なことであつたと指摘できる。そのため、本史料には林泉図や風流の図だけでなく、典故の絵が示されていることが指摘できる。

物語に分類した「清少納言」の項は本史料の最初に登場する項目であるが、その内容は『枕草子』に登場する前栽に関する記述を取り上げ、続けて『徒然草』に登場する庭の植物の話、そして紫宸殿南庭の左近の桜、右近の橘を取り上げ、京都の林泉の基礎となったことを綴っている。冒頭に庭園について記すことで、『都林泉名勝図会』が林泉を取り上げることを強調する働きを持たせたと考えられる。

## 第2項 『都林泉名勝図会』における都の範囲

『都林泉名勝図会』の挿図に描かれた名勝を現在の地図に落とし込むと図 41 のようになった。赤丸は巻之一、青丸は巻之二、緑丸は巻之三、黄丸は巻之四、紫丸は巻之五のそれぞれの挿図に描かれた名勝の位置を表す。庭園や門前の様子などは細かく

位置を落とし込むことができるが、典故の絵や風流の図では広範囲を指す名勝もあり、位置を特定することが難しいものに関してはおおよその目安により位置を示している。

その結果、巻ごとに取り上げる範囲が別れており、巻之一では東は建仁寺、西は千本閭魔堂、南は大通寺、北は大徳寺を限りとした範囲が描かれていることが分かった。よって主に洛中とその周辺が取り上げられている。巻之二では東は光雲寺、西は河合神社、南は靈山、北は赤山社を限りとし、洛外北東部の名勝を取り上げている。巻之三では東は清閑寺、西は蓮華王院、南は深草、北は清水寺を限りとし、洛外南東部の名勝を取り上げている。巻之四では東は鹿苑寺、西は高雄、南は妙心寺、北は高山寺を限りとし、洛外北西部の名勝を取り上げている。巻之五では東は島原、西は嵐山、南は石清水八幡宮、北は天龍寺を限りとし、洛外南西部の名勝を取り上げている。以上の様に、巻ごとに取り上げる範囲を明確に分けていることが分かる。

一方、前作である『都名所図会』における挿図範囲図（図 42）は赤丸が巻之一、青丸が巻之二、緑丸が巻之三、黄丸が巻之四、紫丸が巻之五、桃丸が巻之六の挿図の位置を示した。これを見ると、各巻の目録において巻之一は「平安城首」、巻之二は「平安城尾」、巻之三には「左青龍」、巻之四には「右白虎」、巻之五には「前朱雀」、巻之六には「後玄武」と書かれている通り、巻之一は洛中北部、巻之二は洛中南部、巻之三は洛外東部から北東部、巻之四は洛外西部、巻之五は洛外南部から南東部、巻之六は洛外南西部から北部の名所を取り上げていることが分かった。

両図会の範囲を比較するため、青丸を『都林泉名勝図会』の挿図位置、赤丸を『都名所図会』の挿図位置として範囲図を重ねた結果（図 43）、『都林泉名勝図会』は林泉に特化した名所図会であるため『都名所図会』より名勝の数が減少しており、東西の範囲は大きな差異はないが、南北方向の範囲は『都名所図会』の最北は大原地区に対して『都林泉名勝図会』は修学院地区であり、『都名所図会』の最南は相楽郡であるのに対し、『都林泉名勝図会』は八幡地区であることから範囲が狭まっていること

が分かる。

## 小結

『都林泉名勝図会』は 5 巻 6 冊構成であり、巻之一が乾・坤に分かれている。巻之一には主に洛中、巻之二には洛外北東部、巻之三には洛外東南部、巻之四には洛外北西部、巻之五には洛外南西部の林泉名勝が紹介されている。その内容は本文と挿図があり、名勝ごとに記述される本文の間に挿図が挿し込まれている。

本文中の項目は 93 項目あり、巻之一に 21 件、巻之二に 27 件、巻之三は 15 件、巻之四は 16 件、巻之五は 14 件の名勝が紹介されている。取り上げられている名勝は寺院や神社が多く、古跡や陵、野や溪などの自然名勝も含まれている。項目中の記述の内容は名勝の沿革や建築、什宝についてなどがあり、庭園に関する記述も見られる。ただし、庭園に関する記述がある項目は全体の 3 割程度にとどまっている。

挿図は西村中和、佐久間草偃、奥文鳴の 3 人の画工によって描かれており、巻之一に 43 件、巻之二に 45 件、巻之三に 27 件、巻之四に 24 件、巻之五に 19 件あり、全体で 158 件の挿図がある。これらの挿図は凡例に林泉図、風流の図、典故の絵の 3 種類に類別できることが示されており、これに従い図を類別すると林泉図は 99 件であり、全体の約 63%を占め、庭園を描いた挿図が最も多いことから、庭園に特化して書かれた書物であることが分かった。

秋里は挿図の描き方について名所図会を手掛け始めた初期から、名勝の風景そのままに描くことは子供が家に居ながらにして名勝を見ているように思わせることができるとの考えが『都名所図会』の凡例に示されており、その考えが『都林泉名勝図会』まで変わらず引き継がれていたことが分かった。

『都林泉名勝図会』には数種の版本が見られ、主に野間の論ずるところのイ本、ロ本が基本となっているが、その他にも細かな差異が見られ、本文や挿図の改変がみられることから板木の組み合わせが様々あることが分かった。

## 第2章 『都林泉名勝図会』の庭園描写と演出

本章を通して本史料の挿図における描写表現について検討する。本史料の挿図は写実性の高い史料として扱われているが、その実態については明確にされていない。しかし挿図を見ると石造物や樹木には一定の描写表現が見られ、統一された描写表現をもって描かれている可能性が考えられる。植物に関しては凡例に「四季折々の花樹あるは、大略その樹々をしらせんために、時節に寄らずこれを画く、たとへば梅桜蓮楓あるの類なり」とあることから、秋里は明確に樹種を描き分ける意思を持っていたことを示している。

そこで挿図内で庭園の様々な構成要素がどのように描写されているかを類型化し、表現方法にどのようなものがあるのかを考察する。さらに、類型化した描写方法は次章での林泉図の分析における指標とする。描写表現の参考として中国で板行された『芥子園画伝』（初集：1679、二・三集：1701）を用いた。いつ日本へ入ってきたかは不明であるが、享保9年（1724）に萩生惣七郎が徳川吉宗に旧刻本を献上していることから、この時期にはすでに日本にあったと思われる。本書は日本の画家によって利用・研究され、特に日本の南画は本書に負うところが多いと言う<sup>36</sup>。序章 第1節 第2項で述べた通り、関西の庭園画は明清の庭園画に影響を受けて庭園画様式が確立した。その後、真景図へと発展した。

『都林泉名勝図会』は人物表現などが真景図と似ていることから、庭園画の影響を受けて描かれていることが分かる。そのため、植物や水の表現などが『芥子園画伝』と似ており、参考史料として有用であると考ええる。

### 第1節 庭園の構成要素の描写

#### 第1項 石組・景石・敷石・敷砂利の表現

庭園には石組や景石が据えられ、敷石によって園路が作られ、場合によって敷砂利が敷かれている。本項では、そういった庭園内の石に関する構成要素の描写表現について論じる。

庭園には様々な石が使用されているが、本史料の挿図ではどのように表現されてい

るかを検証する。庭石はチャートや結晶片岩など種々の石質を用いるが、本史料の挿図では庭石がどのように表現されているのか。石質による描写の違いについて考察する。

例えば「大徳寺方丈（中和）」（図 15）をみると、中央の 2 石の立石を挟んだ塀沿いに石組が見られるが、立石は短い縦線を用い（図 44）、伏石は短い横線を用いて石肌を表現している（図 45）。小さく丸みを帯びた石は形状に合わせて線描は弧を描いたり、点描で描き表されたりしている（図 46）。そのほか、天端が平らな石や平たい石など形状は様々であるが、石の種類を描き分けているようには見えない。参考までに現況の庭石の石質と比較を試みる。挿図に描かれた庭園が当時の実態を忠実に描いたものかどうかの問題はあるが、大徳寺方丈庭園の石質分類図（図 47）を見ると、中央の 2 石の立石は左が結晶片岩であり、右がホルンフェルスである。挿図を見るとどちらも短い縦線を用いて石肌を表現しており、石質による違いは感じない。

「大徳寺方丈」は中和による図であるが、同じ中和の図である「妙心塔頭靈雲院」（図 48）では現況と比較すると滝石組の左側が異なっているが、右側の石組はよく似ている。靈雲院庭園の石質分類図（図 49）では滝石組の右側の立石は結晶片岩であり、その正面の右側にある花が乗った石と図の最も右にある石も結晶片岩である。そのほかの石はチャートや砂岩などがあるが、やはりこれらも石質による描き分けはされていないようである。

別の画工はどうか。草偃が描いた「南禅寺方丈」（図 50）の石の描写を見ると、左の大きな石はごつごつとした荒い岩肌のように見える。同じような石質の石が中央と右側の松の隣にある。南禅寺方丈庭園の石質分類図（図 51）をみると、3 石ともチャートである。右側の大きな石の前にある石は 3 石とは異なる石肌に見えるが、これもチャートである。一見異なる石質の石に見えるが同じ石質であることが分かった。

「龍安寺方丈林泉（草偃）」（図 52）では「南禅寺方丈（草偃）」で見られたようなごつごつした石や天端が平らな石や小さな石を組み合わせた石組が見られる。石肌は

短い縦線を重ねて描いたり、伏石には短い横線を重ねて描いたりしている。龍安寺方丈庭園の石質分類図（図 53）を見るとチャートや頁岩、花崗岩、結晶片岩の石質があるが、結晶片岩とされる図の右にある石組の左右の小さな石はその奥にあるチャートと同様の描写がされている。また、図の中央の塀際にある唯一の花崗岩も他の石と同様に複数の短線で石肌が描かれており、石質の違いが描写されているとは考えられない。

文鳴による石の描写は「松花堂全圖」（図 54）に見られる。松花堂の前に飛石が打たれており、複数の単線で描き表されている。石の形状により単線の描き方が異なるが、石質の差によるものではないと思われる。さらに、この図には蹲踞や石燈籠が描かれており、その石肌は点描で描き表されている。蹲踞の下には小さな丸がいくつも描かれており、玉石が敷かれている様子が分かる。

石質の差異の描写はないが石肌の表現をおろそかにすることはなく、石燈籠や手水鉢のような加工石などの滑らかな石肌を点描で表現するほかに、何も描かずに無地で表す場合がある。ただし、一つの挿図に両方の描写方法が使用されることがあり、その表現の使い分けについては不明である。たとえば、「南禅塔頭聴松院（中和）」（図 55）では建物の前にある沓脱石、その奥にある縁先手水鉢や園池の奥にある層塔は石肌が無地で表現されているにも関わらず、層塔の左隣に描かれている石燈籠の石肌は点描で表現されている。よって、遠近の差で描写方法を変えているわけではなさそうである。また、「八條遍照心院方丈其一（中和）」（図 56）では図の右手の石橋は無地であるのに対し、図の左手の刈込の隙間に描かれている小さな石燈籠は点描で描かれている。小さく描かれているものに対しても点描表現を使用することから、描く対象の面積の大小で描き分けているのではないことが分かる。

以上のことから本史料の石の表現は石質による描写の違いはなく、複数の短線で石肌を表現していることが分かった。ただし石の形状は様々であり、例えば立石であれば短い縦線で描写し、伏石であれば横線にするなど形状に合わせて線の向きや長さを

変え、小さな石には点描を用いる場合も見られた。ただし、自然石と加工石の表現の差は明らかであり、画工によらず描写は統一されている。加工石の石肌の描写は全面を点描で表現する、もしくは無地で表現する方法の2種が見られた。しかしその描写の使い分けは不明である。

次に敷石の描写方法について述べる。敷石は建物の軒内に多く見られ、そのほかは参道にも見られた。そのすべてが四盤敷であり、その並べ方から碁盤敷と四半敷の2種が見られた。碁盤敷は「建仁寺門前笑姿参（中和）」（図 57）の参道や「南禅金地院其一（中和）」（図 58）の軒内に見ることができる。四半敷は「大徳塔頭碧玉庵（中和）」の軒内（図 59）や「圓山正阿弥其二（中和）」の軒内（図 60）に見られる。また、「恵日塔頭即宗院自然居士墳（草偃）」（図 61）では前に挙げた2例と異なり、黒く塗りつぶされている。軒内であることを考えると、塼敷と推測できる。

さらに、特殊な例として「本圀寺中真如院（草偃）」（図 62）に描かれた小板石を敷き並べた枯池の表現がある。本史料にはこの挿図にのみに見られる描写表現である。

敷砂利は2種の表現が見られた。一つは「雙林寺長喜菴（中和）」では縁先手水鉢の鉢前に丸がいくつも描かれている（図 63）。鉢前は玉石などが敷きつめられることから、玉石であると判断した。「西六條本願寺對面所林泉（中和）」では庭内に同様の描写があり（図 64）、枯池の底に玉石が多く敷かれていることが分かる。「圓山多福菴也阿弥（草偃）」では図の下部中央に枯流れがあり、そこに玉石が敷かれているが（図 65）、雪見燈籠がある枯池内には黒い点描が見られる（図 66）。さきほどの「西六條本願寺對面所林泉（中和）」でも軒内に同様の表現が見られ（図 67）、軒内を玉石敷か洗い出しと考えられるが、洗い出しとするには石が密に描かれているため玉石敷であると判断した。苔のようにも見えるが、苔の表現は「龍安寺方丈林泉（草偃）」石組の側に見られるような点描（図 68）であり、「圓山多福菴也阿弥（草偃）」での描写とは表現が異なっている。そして軒内に描かれている例が他にもあり、水はけの面から考えても軒内に苔を植える可能性が低いことから玉石であると推測した。先に



述べた丸を描いた玉石の描写とは異なり、黒い点描であることから黒い玉石であり、石の色によって描写を変えていたと分かる。

次に白砂の描写方法について考察する。「恵日塔頭即宗院（草偃）」の中央やや右下には「白砂」と書かれた文字が見える（図 69）。そのため、地面に描かれた点線は白砂を表現していることが分かる。さらに「銀閣寺林泉（中和）」には客殿の前に点線で地面に線を引かれており、四角の枠の中には「銀沙灘」の文字が見える（図 70）。また、その奥には同じく点線で円形に描かれた「向月台」がある。これらは「恵日塔頭即宗院（草偃）」と同様に点線で描かれていることから白砂であることがわかる。さらに白砂について、白幡洋三郎が「龍安寺方丈林泉（草偃）」の挿図を用いて考察している<sup>37</sup>。このことは序章 第2節 第2項においてすでに述べたが、龍安寺の庭石の周囲の点描（図 68）は苔であり、当時の庭は現在のような砂紋を描けるほど白砂を敷いていなかったと考えている。しかし挿図中の漢詩に「白砂平ナリ」とあることから、まったく敷かれていなかったわけではないことが想像できると指摘している。

## 第2項 水系の描写

前項で石の描写方法について取り上げたが、本項では水の描写方法について考察する。庭園には滝や園池を用いて造園されているものも多く、本史料の林泉図にも園池や滝が作られた築山林泉が描かれている。さらに、風流の図や典故の図には林泉図に使用されない描写方法が見られたため、同様に取り上げることとする。

水流の表現は川や滝、流れ、池の水の動きなどに描かれており、5種類の描写方法が見られる。

・緩やかな流れの描写：緩やかな長い線を複数本描いて表した水流である。「四条河原夕涼（文鳴）」（図 71）や「花園輔仁親王山亭（草偃）」（図 72）などに用いられ、川や流れに用いられる表現である。『芥子園画伝』『画平泉法』（図 73）には起伏のない川の緩やかな流れの画法として紹介され、川の形に合わせた緩やかな曲線で表現さ

れている様が似ている。

・荒い流れの描写：大きく曲線を描き、隙間に小さい波を描き表した水流。これは「建仁寺七条鴨川（中和）」（図 74）と「大井川三船御遊（中和）」（図 75）に見られ、水量が多い川の流れを表す描写方法である。『芥子園画伝』では「画江海波涛法」（図 76）とあり、荒れた波の描法としており、図がよく似ている。

・さざ波の描写：緩やかな短い線と曲線を組み合わせた水流。林泉図の園池によく使用される描写方法であり、緩やかな水流を表現している。「銀閣寺林泉（中和）」（図 77）や「圓山多蔵庵春阿弥（中和）」（図 78）などに見られる。『芥子園画伝』に「画溪澗漣漪法」（図 79）とあり、さざ波の描法として紹介されている。この描法と似ており、『都林泉名勝図会』の挿図では線の本数は省略されて描かれている。

・乱石箇所の流れの描写：数本の線を用い、山なりに表すことで高低さのある流れの水流を表現している。林泉図で用いる場合は段落ちの滝を表している。「端之寮其貳（中和）」（図 80）や「圓山長寿院左阿弥（中和）」（図 81）に見られる。これとよく似ている描写が『芥子園画伝』「亂石疊泉法」（図 82）である。石が乱集した場所にある泉の描法として記述され、『都林泉名勝図会』の林泉図でこの描法が用いられている滝は築山や石組が複雑になっている。

・瀑布の流れ描写：高低差のある滝の水流表現。「銀閣寺林泉（中和）」（図 83）や「光雲寺（中和）」（図 84）などに見られる。これは『芥子園画伝』「画大瀑布法」（図 85）に見られ、瀑布を緩やかな長い線を用いて水流を表現している。『都林泉名勝図会』では高低差のある滝の表現にこの描法が流用されている。

次に水面の描写について考察する。水面の描写方法は4種類見られた。

・水面 - 1：緩やかな波線を複数本用いて表現した水面。多くの水面の描写に使用されており、「神泉苑御遊（草偃）」（図 86）や「南禅寺亀山法皇古墟（中和）」（図 87）などに見られ、最も多用される描写方法である。画工によって多少描写の違いが見受けられる。中和や草偃は護岸部分や景石の周りに波線を描き、中央部は空白を多くす

るが、文鳴は「紫野若菜摘み（文鳴）」（図 88）のように園池全体に波線を描く。

・水面 - 2：同心円状に線を描き、手水鉢や桶に張った水を表現する描写。〔大徳寺一休和尚（中和）〕（図 89）や「伏水龍徳菴（中和）」（図 90）などに見られる。

・遠景の水面描写：船を描いて水面を表す描写。「東福寺南明院（中和）」（図 91）や「伏水龍徳菴（中和）」（図 92）などに見られ、船を描くことによって、そこに川があることを示している。遠景の描写に用いられる方法である。

氷が張った水面の描写 菱形を組み合わせて氷を表現する手法。これは中和によるものであり、「建仁塔頭霊洞院（中和）」（図 93）と「金閣寺（中和）」（図 94）「其二（中和）」にのみ見られる。一方、文鳴による描写手法は、いわゆる氷裂紋様で表された氷の描写方法であり、〔安居神事（文鳴）〕（図 95）にのみ見られる。これらの挿図はすべて冬の情景を描いたものであり、他の季節の水面表現には見られないことから氷の表現であると判断できる。

### 第3項 建造物の描写

次に建造物の描写方法である。特に屋根の種類によって描写の違いが見られたため、屋根の描写方法の差異を論じる。

瓦葺の描写方法は多種にわたるが、大きくは本瓦葺と棧瓦葺に分けられる。まず、本瓦葺は3種類の描写が見られた。

・近景の本瓦葺：丸瓦、平瓦ともに1枚ずつ表された本瓦葺であり、軒先には軒瓦が描かれている。「千本焰魔堂（中和）」（図 96）や「妙心塔頭海福院（文鳴）」（図 97）などにみられる。

・中景の本瓦葺：縦線のみで瓦が表されており、軒瓦も描かれている本瓦葺の描写。この描写方法は最も多く使用されており、八条遍照心院「其貳（中和）」（図 98）や「養源院其一（草偃）」（図 99）などに見られる。

・遠景の本瓦葺：縦線のみで瓦を表現し、軒瓦が描かれていない本瓦葺の描写。最も

簡略化された描き方であり、遠景に描かれる建物の屋根などにはこの描写が使われている。「高臺寺小方丈（草偃）」（図 100）や「成就院其二（草偃）」（図 101）などに用いられている。

棧瓦葺は 4 種類が見られた。

- ・近景の棧瓦葺 - 1：瓦を 1 枚ずつ描くが、軒先に丸を描いて小巴のある軒瓦を表現している棧瓦葺。「圓山正阿弥其二（中和）」（図 102）や「宝輪院茶亭庭（中和）」（図 103）などに見られる描法である。この描写には軒先瓦が描かれているが、瓦は二重の縦線のみで表現した、簡略化された描写もある。この描写方法は「西六条本願寺對面所林泉（中和）」（図 104）と「知恩院御忌詣（文鳴）」（図 105）に見られる。

- ・近景の棧瓦葺 - 2：1 枚ずつ瓦を表現し、棧の部分を二重線で表した棧瓦葺である。「喁蘭人觀耳塚（中和）」（図 106）や「清水瀧下南藏院（文鳴）」（図 107）などに見られる。また、「建仁塔頭正傳院織田有樂斎茶亭（中和）」（図 108）や「深草里墨染花魁（中和）」（図 109）ではさらに簡略化され、棧を表す二重線のみで表現されている。

- ・中景の棧瓦葺 - 1：瓦を 1 枚ずつ描くが、棧を表す二重線は描かれていない。また、軒瓦の小巴が描かれている棧瓦葺の描写。「吉祥院村陽泉亭（中和）」（図 110）や「東福塔頭莊嚴院（中和）」（図 111）などに見られる。

- ・中景の棧瓦葺 - 2：瓦を 1 枚ずつ描くが、棧を表す二重線は描かれていない。また、軒瓦の小巴が描かれていない棧瓦葺の描写。「智積院（草偃）」（図 112）、「雙林寺文阿弥（中和）」（図 113）などに見られる。

檜皮・柿葺には 3 種類の描写方法がある。檜皮葺と柿葺を分類しなかった理由として、現在柿葺の建物であっても図には檜皮葺と同じ描写が用いられていることや、寺院建築と神社建築の屋根の描写に違いがないことなどから、檜皮葺か柿葺かの判別がつかなかったためである。そのため無理に分類することはせずに、両者の描写として分類した。

・ 檜皮・柿葺 - 1 : 屋根全面が無地で表された檜皮もしくは柿葺の表現。「清水寺西門（中和）」（図 114）や「赤山社（中和）」（図 115）などに見られ、寺院建築、神社建築の両方に使用されており、典故の絵に見られる寝殿造りの屋根にも同じ描写が見られる。

・ 檜皮・柿葺 - 2 : 短い縦線を複数用い、線のかたまりごとに弧を描くように描かれた檜皮もしくは柿葺の描写。「相国寺林光院鶯宿梅（草偃）」（図 116）、「雙林寺桜花（草偃）」（図 117）、「花園輔仁親王山亭（草偃）」（図 118）にのみ見られ、典故の絵にのみ使用される描写方法と考えられる。

・ 檜皮・柿葺 - 3 : 短い横線を多数用いて表された檜皮もしくは柿葺。「大徳寺塔頭寸松庵（草偃）」（図 119）や「大徳塔頭碧玉庵紫式部碑（中和）」（図 120）などに見られる。寺院建築や遊興施設の屋根に多く用いられていることから、この描法が柿葺の表現と考えられるが断定できない。

檜・柿皮葺 - 2 の描写方法は典故の絵にのみ使用されているので、現状を描いたものと故事を描いたものとの描き分けていた可能性がある。さらに、「桂宮（文鳴）」（図 121）では塀と門の屋根に檜皮・柿葺 - 3 の描写が用いられているが、その所々に檜皮・柿葺 - 2 の描写表現が用いられている。「桂宮」では塀が痛んでいる様子が描かれていることから、屋根の痛みの表現としても用いられている。

茅葺の描写方法は 4 種類見られた。

・ 茅葺 - 1 : 短い縦線を複数用いて、直線にそろえて描かれた茅葺。「圓山多蔵庵春阿弥（中和）」（図 122）や「龍安塔頭西源院（草偃）」（図 123）などに見られる。

・ 茅葺 - 2 : 短い縦線を複数用いて、円弧を描くように描かれた茅葺。「赤山社（中和）」（図 124）や「等持院（中和）」（図 125）などに見られる。

・ 茅葺 - 3 : 比較的長い線を複数用いて、位置を揃えずに描かれた茅葺。「端之寮其貳（中和）」（図 126）や「田村將軍僧遇僧延珍（草偃）」（図 127）などに見られる。

・ 茅葺 - 4 短い線を屋根の中心から放射状に描いた茅葺。「八幡泉坊（文鳴）」（図 128）

と「松花堂全圖（文鳴）」（図 129）にのみ見られた。

茅葺の描写方法は 1 件の挿図に 2 種類の描写が見られたり、画工ごとの共通性が見られたため、それぞれの茅葺屋根を描き分けていたと思われる。茅葺 - 1 の描写方法は線が揃っていることから、葺きたてのきれいな茅葺屋根を表しているように見える。茅葺 - 2 の描写方法では葺いてから時間がたち、やや不揃いになっている様を表しているように見える。茅葺 - 3 や茅葺 - 4 の描写方法では意図的に線を不揃いにし、荒れた茅葺屋根を表現していると推測できる。

板葺屋根の描写方法は 5 種類見られた。

- ・近景表現の板葺：二重線で抑え枠が描かれた板葺屋根の描写。「建仁寺門前十日笑姿参（中和）」（図 130）と「喎蘭人觀耳塚（中和）」（図 131）などに見られる。
- ・中景表現の板葺：抑え枠を単線で描いた板葺屋根。「圓山端之寮玄関（中和）」（図 132）や「圓山長寿院左阿弥（中和）」（図 133）に描かれる正方形に区切って描かれた板葺屋根と「夕涼其貳（文鳴）」（図 134）と「河合納涼（文鳴）」（図 135）に見られるような長方形に区切って描いた板葺屋根がある。前者には中和、後者には文鳴の挿図に詩歌見られないことから、画工による描写の違いの可能性はある。
- ・堀に用いられる板葺：1 枚ずつ板が描かれた板葺屋根の描写。堀の屋根に用いられる描法である。「八条遍照心院其一（中和）」（図 136）や「妙心塔頭大通院（草偃）」（図 137）などに見られる。

## 第 2 節 季節や気象による演出

### 第 1 項 植物の描写

樹種が描き分けられていることは本章の冒頭で述べたが、その樹種をわかりやすくするために開花時期の姿を描くことが凡例に示されており、それにより植物を手掛かりに季節を読み取ることが出来る。

全ての挿図に松が描かれ、その描写方法も様々である。松の種類までは判別し得な

いが、松の描写方法の代表的なものを紹介する。

- ・近景の松の描写：松葉が1本1本描かれている松（図 138）。松の中で最も写実的に描かれる描写方法である。またこの描写方法は、幹の部分が作者ごとに若干の差が見られた。中和は幹の輪郭に沿って点を描いて表皮を表し（図 139）、草偃は幹の輪郭に沿って円形を描いて表皮を表し（図 140）、文鳴は幹全体に楕円を描いて表皮を表現している（図 141）。

- ・中景の松の描写：松葉を塊ごとに描いた松（図 142）。これは近景の松の描法と比べ、デフォルメされた描写方法である。この描写方法は挿図の中で最もよく使用され、また画工ごとに描写の差異がみられる。中和は松葉の塊が山形になっており（図 143）、草偃と文鳴は松葉の塊を平坦な形に描く（図 144、図 145）といった違いが見られる。

- ・遠景の松の描写：松葉の群を楕円で表し、短い線で幹を表した松。「八幡泉坊」（図 146）など多くの挿図に見られ、最も遠い位置にある松を表し、最もデフォルメされた描写方法である。

以上3種の松の描写の分類にあたり、3種の松の描法が一度に使用されている挿図に着目した。その例として「雙林寺文阿弥（中和）」（図 147）があり、図の左にある松は葉を1本ずつ描き、幹の様子もよくわかる。それに対して図の中央に葉を枝ごとに塊で表現した松が描かれている。この松の位置は石組の後ろにあることから、図の左の松より後ろに位置する。さらに庭園の背後に山があり、遠景が描かれている。その山に楕円と短い縦線を組み合わせて表現した松が描かれており、先に挙げた2本の松よりかなり遠い所にある。よって松が位置する差によって描写を使い分けていることが分かり、規則性を持たせていることが指摘できる。しかし一つの挿図に3種の描法を使用することは少なく、多くは1種か2種の描法を使い分けている。ただしこの規則性が無視されることはない。

楓は3種類の描き分けがされている。

- ・近景の楓の描写：葉を1枚1枚描き、白抜きで表している楓。「東福寺通天橋観紅

楓（文鳴）」（図 148）や「高雄看丹楓（文鳴）」（図 149）などに見られる。どちらも楓を図題としていることから、図に多く描かれているこの描写の樹木が楓であると判断した。また、「嵯峨少督隱家（中和）」（図 150）にも見られる。

・遠景の楓の描写方法：数本の線で葉 1 枚の形を表現している楓（図 151）。この描写は『芥子園画伝』では「菊花点」という点葉法を用いて描かれた樹木（図 152）によく似ている。『都林泉名勝図会』では高尾山神護寺の項に地藏院について「当山地蔵院の林泉は、客殿の庭中より溪間を臨ば、潺々とながれて尾崎より谷崖まで紅葉ならぬ所なし」と記述されている。これを踏まえて「高雄地藏院（中和）」（図 153）の挿図を見ると、溪には菊花点を用いて描かれた樹木が多くあり、これが紅葉であることが分かる。この描写方法は多くの挿図に見られる。

前者の描写は図の主題となる木や図の手前に描かれる場合に使用されることから近景の描写とし、菊花点で描かれた描写は画面奥や小さく描かれる楓などに使用されることから遠景の描写とした。そして凡例では、樹木は見頃の季節を描くとし、その中に楓が含まれている。そのため、楓は常に紅葉した姿を描いていると考えられ、挿図内に楓が使用されている場合はその挿図の季節を秋であると判断できる。

杉は 4 種類見られる。

・杉 - 1：細い針のような形状であり、上に向かって生える葉が描かれている杉。幹はまっすぐ伸び、幹肌は縦線で表されている。「大徳寺塔頭寸松庵（草偃）」（図 154）に見られる。

・杉 - 2：一枝ごとに葉が 1 枚ずつ上に向かって生えている様子が良く分かる。幹はまっすぐ伸び、幹肌は縦線で表されている。「吉田山遊宴（文鳴）」（図 155）や「祇園御輿濯漣物其一（文鳴）」（図 156）などの文鳴が描いた挿図に見られ、文鳴の描く杉の描写である。

・杉 - 3：葉は上に向かって生え、他の描写より葉が長く描かれている杉。また枝張りが小さいことも特徴である。幹はまっすぐ伸び、幹肌は縦線で表されている。「赤



山社（中和）」（図 157）や「建仁塔頭正伝院織田有楽齋茶亭（中和）」（図 158）などに見られる。

・杉 - 4 : 杉 - 3 の描写と似ているが、葉の長さが短く描かれている杉。幹肌は縦線で表されることが多いが、省略されているものもある。「清水寶生院（中和）」（図 159）や「妙心塔頭大通院（草偃）」（図 160）などに見られる。

「大徳寺塔頭寸松庵（草偃）」の右手前に描かれている樹木（図 154）について龍居竹之介は槇柏類であると述べているが<sup>38</sup>、葉が上を向いている同様の描写をされる樹木が「龍安塔頭大珠院（中和）」（図 161）の中央に描かれている。挿図の書き込みによると、この樹木は「綾杉」であることが分かる。葉の太さに違いはあるが、幹はまっすぐ伸び、幹肌も同様に縦線で表されることから同じ樹種ではないだろうか。一方で、同様に幹がまっすぐ伸び、葉が上を向いて描かれているが幹肌が横線で表されている樹木がある。「妙心塔頭大通院（草偃）」（図 162）にその 2 種が同時に描かれていることから別種であることが分かる。「龍安塔頭大珠院（中和）」の「綾杉」が幹肌を縦線で描いていることから杉の幹肌を縦線で、杉の異なる種もしくは槇を横線の幹肌で表した可能性が考えられる。その描写方法は 2 種であった。

・槇 - 1 : 杉-1 の描写方法と類似しているが、幹肌は横線で描写される杉。「銀閣慈照寺集芳軒（草偃）」（図 163）にのみ見られる。

・槇 - 2 : 幹はまっすぐ伸び、幹肌は省略される場合もあるが横線で表され、短い葉が枝に沿って上に伸びている描写。「妙心塔頭大通院（草偃）」（図 162）のほか、「黒谷西翁院反古菴（草偃）」（図 164）や實法院「其貳（草偃）」（図 165）に見られる。

竹の描写は 5 種類の描き分けが見られた。

・竹 - 1 : 棹を 1 本の線で表し、その周りに点で葉を表現している竹（図 166）。最も多く使用される描写方法である。この描写方法は画工によって差異が見られ中和と文鳴は竹の棹が先に行くほど寝ている（図 167、図 168）が、草偃が描く竹は棹が直線的であり、棹先は筆をはねて描いている（図 169）。

・竹 - 2 : 節と枝を描き、葉を白抜きで表している竹。この描写方法は「西六条本願寺對面所七夕籠花（中和）」(図 170) に見られる。

・竹 - 3 : 棹は線で表すが節ごとに離して描かれ、葉は筆をはねて描き表した竹。「東山殿御茶水（中和）」(図 171) に見られる。

・竹 - 4 : 棹を一本の線で表し、枝から葉が生えている様子を描く竹。これは「妙喜庵茶室袖摺松（草偃）」(図 172) に見られる。

・竹 - 5 : 棹を一本の線で表し、枝から葉がでており、3、4 枚の葉をひとかたまりとして表した竹。これは「清水瀧下南蔵院（文鳴）」(図 173) に見られる。

桜の描写方法は 6 種見られた。

・近景の桜の描写 - 1 : 花の形が表され、葉の描かれた桜。「雲林院花見（中和）」(図 174) や「靈山珠阿弥（中和）」(図 175) などに見られ、風流の図や典故の絵に描かれる描写方法であり、中和と文鳴が使用する描写方法である。

・近景の桜の描写 - 2 : 花卉を一枚ずつ表し、葉が描かれた桜。〔双林寺桜花（草偃）〕(図 176) と「花園輔仁親王山亭（草偃）」(図 177) にのみ見られる。どちらも典故の絵であり、草偃が使用する描写方法である。

・近景の桜の描写 - 3 : 花の形が描かれ、葉のない桜。「千本焰魔堂（中和）」(図 178) にのみ見られ、千本閻焰堂に普賢桜があることが本文中でも述べられていることから、普賢桜ではないかと考える。

・中景の桜の描写 - 1 : 花を一つずつ、丸の中に点を描いた形で表し、葉を描いた桜。「西六条本願寺對面所林泉（中和）」(図 179) や「黒谷西翁院反古菴（草偃）」(図 180) などに見られ、最も多く使用される描写方法である。

・中景の桜描写 - 2 : 中景の桜の描写 1 と同じ花の表し方であり、枝が垂れている桜。「赤山社（中和）」(図 181) や「圓山多蔵庵春阿弥（中和）」(図 182) に見られる。

・遠景の桜の描写 : 花を塊ごとに短線を円形に配置して表し、葉を描いた桜。「清水瀧下南蔵院（文鳴）」(図 183) の挿図にのみ見られ、最も遠い場所にある桜の描き方

である。

蓮の描写には3種類みられる。

- ・近景の蓮の描写：葉の葉脈を描き込んだ写実的な蓮である。大通寺中實法院「其貳（草偃）」（図 184）や「東寺御影供（文鳴）」（図 185）などにみられる。
- ・遠景の蓮の描写：葉を丸く表しただけの蓮である。もっともデフォルメした形であり、〔東山六条祭主三位輔親卿旧館（中和）〕（図 186）にみられる。また、葉を表す丸の中に点を描いた描写もある（図 187）。点は葉の中心である窪みを描いていると思われる。

藤は3種類の描き分けが見られる。

- ・近景の藤の描写：葉の形をよく表した藤。「端之寮其二（中和）」（図 188）や「圓山多福庵也阿弥（草偃）」（図 189）などに見られる。
- ・遠景の藤の描写：葉を黒い点で表した藤。「銀閣寺林泉（中和）」（図 190）などに見られる。
- ・木に巻き付いた藤の描写：他の木に巻きついており、花を太い線で表した藤。「成就院其二（草偃）」（図 191）にのみ見られる。

遠景の描写は他の2種の描写より図の奥に描かれているため、しっかりとした葉の形が描き表されておらず、また近景の藤の描写では葉の形がしっかりと表現されていることから判断できる。

燕子花の描写は1種類しか見られないが、画工によって筆致の差が見られた。

- ・文鳴の描写：葉を白抜きで描かれた燕子花。文鳴が使用する描写方法であり、「祇園神輿濯遶物其一（文鳴）」（図 192）や「清水瀧下南蔵院（文鳴）」（図 193）に見られる。
- ・草偃の描写：葉を反らした線で描いた燕子花。草偃が使用する描写方法であり、「東林院其貳南谷師書齋幻華庵（草偃）」（図 194）や「蓮華王院燕子花（草偃）」（図 195）に見られる。

・中和の描写：葉を直線で描いた燕子花。中和が使用する描写方法であり、「光雲寺（中和）」（図 196）や「靈山叔阿弥（中和）」（図 197）に見られる。

柳には 3 種類の描写方法が見られた。

・近景の描写：葉を少し外にはねた短い線で葉を表した柳。画面の手前に描かれる柳で、「大井川三船御遊（中和）」（図 198）にのみ見られる。

・遠景の描写 - 1：垂れた枝を線のみで表現した柳。「大徳塔頭寸松庵（中和）」（図 199）や「金閣寺（中和）」（図 200）などに見られる。『芥子園画伝』『高垂柳宋人多畫之』（図 201）に同様の描写が見られることから柳の描写であると判断できるが、『都林泉名勝図会』ではやや簡略化されている。

・遠景の描写 - 2：上述の描写に葉を点で表した柳（図 202）。ほかにも「神泉苑御遊（草偃）」（図 203）に見られる。この描法は『芥子園画伝』『點葉柳唐人多畫之』（図 204）に見られることから、柳であると判断した。

棕櫚は 3 種類の描写方法が見られた。

・棕櫚 - 1：葉の下に黒い返しが描かれた棕櫚。「大通寺中實法院（草偃）」（図 205）や「東林院其貳南谷師書齋幻華庵（草偃）」（図 206）、「妙喜庵茶室袖摺松（草偃）」（図 207）のみに見られ、草偃の描写方法である。

・棕櫚 - 2：葉の下に白い返しが描かれた棕櫚。「八幡泉坊」（図 208）や「妙心塔頭海福院（文鳴）」（図 209）に見られ、文鳴の描写方法である。

・棕櫚 - 3：葉の下の返しが描かれていない棕櫚。「伏見龍徳庵（中和）」（図 210）のみに見られ、中和の描写方法である。

梅の描写方法は 2 種類見られた。

・近景の梅の描写：花の形を表した梅。「相国寺光林院鶯宿梅（草偃）」（図 211）や「松花堂全圖（文鳴）」（図 212）などに見られる。枝ぶりが『芥子園画伝』に描かれた梅（図 213）と似ていることから、梅と判断した。

・中景の梅の描写：花を丸で表した梅。「成就院其二（草偃）」（図 214）や「伏見龍

徳庵（中和）」（図 215）に見られ、近景の描写方法に比べ、ややデフォルメされている。また、花を黒い大きい点で表した梅の描写もあり、この描写方法は「本圀寺中真如院（草偃）」（図 216）に見られる。

蘇鉄は 3 種類の描写方法が見られた。

- ・蘇鉄 - 1：幹の表皮を短い横線で表した蘇鉄。「西六条本願寺對面所林泉（中和）」（図 217）と「圓山勝興庵正阿弥書會（中和）」（図 218）のみに見られる。中和が使用する描写方法である。

- ・蘇鉄 - 2：幹の表皮を下から上へ引いた線で表した蘇鉄。「圓山多福菴其貳（草偃）」（図 219）にのみ見られる。草偃の使用する描写方法である。

- ・蘇鉄 - 3：幹が黒く塗られている蘇鉄。「稻荷社初午詣（文鳴）」（図 220）にのみ見られる。文鳴が使用する描写方法である。

笹は 2 種類の描写方法が見られた。

- ・笹 - 1：葉が白抜きで描かれた笹。背の低い笹に用いられている描写方法であり、「宝輪院茶亭庭（中和）」（図 221）や「龍馬献上（中和）」（図 222）などに見られる。また、中和が使用する描写方法である。

- ・笹 - 2：葉が黒色で描かれた笹。「建仁寺門前十日笑姿参（中和）」（図 223）や「顔相見（文鳴）」（図 224）などに見られ、風流の図に使用されている描写方法である。

庭園の築山や地面には点描や短い縦線を広範囲に描くなどの描写が見られる。すでに述べたように「龍安寺方丈林泉（草偃）」では苔の描写をされていることが、先行研究によって指摘されていることから、地被類の描写があることが分かる。挿図に描かれた地被類には 3 種類の描写が見られた。

- ・平地に描かれる地被類：短い縦線を多用して地被類を表現した描写。芝類のように見えるが種類までは不明である。この描写は平庭部分に描かれることから、平地での地被類の描写であると判断した。庭園において、「南禅塔中牧護菴（草偃）」（図 225）のように地面を覆うように前面に地被類が描かれる場合や、「建仁寺正伝院（草偃）」

(図 226) のように地被類を描く場所と描かない場所を明確に分けて園路を作る場合、「赤山社 (中和)」(図 227) のように池の護岸に描かれる場合などがある。

- ・斜面に描かれる地被類：弧を描いた短い縦線を並列に描き、これを段状にかさねて表現した描写。この描写は築山の斜面に描かれることから、斜面での地被類の描写であると判断した。「圓山延寿庵連阿弥其一 (草偃)」(図 228) や「清水成就院其一 (草偃)」(図 229) などに見られる。

- ・苔の描写：点描で表現される描写。庭石が据えられた地面、樹木や建物の側などに描かれることが多い。「南禅金地院其一 (中和)」(図 230) を例に挙げると、本章 第 1 節 第 1 章で挙げたように白砂は点線で、玉石は丸で表されることから、礼拝石前の点描が砂利を表したのではなく、地被類を表現したものと考えることができる。そのほか「南禅塔中聴松院 (中和)」(図 231) の建物や樹木の側に描かれたり、「妙心塔頭靈雲院 (中和)」(図 232) の景石が据えられた地面に描かれたりしている。

全図を通して 14 種の樹種・草本類が判明した。同じ植物でも描き分けがされており、特に松は紹介した以外にも描写方法は多岐にわたる。しかしその描き分けが遠近の差以外に、種類の違いによるものか、手入れの程度の違いによるものかは判別しない。

そのほか、樹種は不明であるが挿図に共通して見られる描写方法で描かれる樹木があった。これらの樹木について、『芥子園画伝』に共通する樹木がないか照合した結果、点葉法を示した頁に挿図に用いられている樹木のいくつかの葉の描写に共通する描法が見られた。

- ・介字点を用いた樹木：介の字の様な下方に垂れ下がるような点を用いて葉を表現した介字点の描法 (図 233) で描いた樹木。「大徳寺方丈 (中和)」(図 234) や「松花堂全圖 (文鳴)」(図 235) などに見られる。

- ・胡椒点を用いた樹木：胡椒の実のような点を用いて葉を表現した胡椒点の描法 (図 236) で描いた樹木。「大徳寺塔頭寸松庵 (草偃)」(図 237) や「清水寶生院 (中和)」

(図 238) などに見られる。

- ・一字点を用いた樹木：横向きの点を用いて葉を表現した一字点の描法（図 239）で描いた樹木。「大徳寺塔頭寸松庵（草偃）」（図 240）や「梅尾高山寺三尊院（中和）」（図 241）などに見られる。

- ・杉葉点を用いた樹木：杉の葉のような点を用いて葉を表現した杉葉点（図 242）で描かれた樹木。この描写が杉を表現しているかどうか判断がつかないため、ここに挙げる。「大徳寺方丈（中和）」（図 243）や「南禅寺亀山法皇古墟（中和）」（図 244）などに見られる。

- ・夾葉法を用いた樹木：下に垂れた葉の輪郭を描いた描法（図 245）で描いた樹木。〔大徳寺一休和尚（中和）〕（図 246）や「赤山社（中和）」（図 247）などに見られる。

以上の 5 つの描法が確認できた。これらの描法は『芥子園画伝』では雑樹の描法に用いられており、本史料でも樹木の特定は難しく、図内でも強調して描かれている樹木ではない。よって、本史料においても雑樹として表現され、特定の樹木を表現しているわけではないと推測できる。

本調査により、14 種類の樹木と 5 種の描法が用いられた樹木を特定することができた。そして、その描写方法は『芥子園画伝』の描法に類似する点が多く見られた。しかし今回の調査において、すべての樹木の樹種や描法を特定することは叶わなかった。その原因として樹木が密集して描かれているために葉が他の植物と混同し、判別がしづらい。よって種類が不明の植物については、今後さらに調査を進めたい。

## 第 2 項 時間帯を表す風雨の描写

植物以外に季節を示す描写として雨風を表現したり、積雪の様子を描いたりする挿図がある。

雨が降る様子を描いた挿図に「妙心塔頭靈雲院（中和）」（図 48）があり、雨の表現として図の上部に左下の斜線がいくつも描かれている。同様の表現が『都名所図会』

の御所八幡社を描いた挿図（図 248）にあり、図内の詩歌から夕立であることが分かり、慌てる人物らの様子が描かれている。これにより斜線が雨の表現であることが分かる。しかし雨が降る様子を描く図は「妙心塔頭靈雲院（中和）」のみである。

風が吹く様子を描いた挿図に「南禅院大明国師坐禅（草偃）」（図 4）がある。降雨表現と同じような斜線が描かれているが、墨線は孤を描いており、また図内の詩歌が「梁の塵もをとるや秋の風」と詠んでいることから風の表現であると考えられる。風の表現がされたものは本図のみであるが、本論で底本とした献呈本には見られず、他の版本に見られる。版種については第 1 章 第 1 節 第 4 項にて詳述している。

積雪の描写は画工によって異なる。

- ・草偃の描写：植物の葉の上に縁取りがされ、積もった雪を表現している描写。これは草偃による描写であり、「足利將軍義満公衣笠山夏観雪（草偃）」（図 249）にのみ見られ、その図題から雪を描いていることが分かる。ただし本図は夏に雪見をするために山に白い布をかけたという故事を基に描かれているため、厳密には雪ではない。

- ・中和の描写：草偃の雪の描写と同様に植物の葉の上に縁取りがされ、積もった雪を表現している描写。さらにその上に点描で細かな雪を表現していると思われる。この描写方法は中和によるものであり、「金閣寺（中和）」（図 18）や「建仁塔頭靈洞院（中和）」（図 250）などに見られる。

- ・文鳴の描写：植物の葉の上を白抜きにすることで、積雪を表現している描写。これは文鳴による描写方法であり、「同所角屋雪興（文鳴）」（図 251）にのみ見られる。図題や詩歌から雪の表現であると判断した。

### 第 3 項 時間帯を表す霞・雲の描写

挿図には文章を記入するための空白を作る手段として、または図の省略として雲や霞が使用されている。特に霞はその線の多さによって、挿図に描かれた時間帯の指標としている。その省略の描写である雲と霞の描写方法を述べる。



雲は2種類の描き分けが見られた。

- ・雲 - 1: 小ぶりの半円をつなげて表された雲。この描写方法が最も多く使用され、「七夕蹴鞠」(図 252) や「八條遍照心院方丈其一 (中和)」(図 253) などに見られる。

- ・雲 - 2: 小ぶりの半円を少し重ねてつなげて表された雲。「靈山珠阿弥 (中和)」(図 254) や「高雄地藏院 (中和)」(図 255) の2件の挿図にのみ見られる。

雲のほかに図の省略として用いられるのが霞である。しかし霞は図の省略以外にも、その描写の違いから時間帯の指標に使われている。

- ・日中を表す霞 - 1: 横線と曲線を組み合わせた表現方法であり、「圓山正阿弥其二 (中和)」(図 256) や「東福寺通天橋観紅楓 (文鳴)」(図 257) などに見られる。

- ・日中を表す霞 - 2: 横線複数本用いて描かれ、町並みの省略や庭園と外部空間との区切りに用いられる。「龍安塔頭西源院 (中和)」(図 258) や「圓山多福菴也阿弥其一 (草偃)」(図 259) などに見られる。

- ・夕暮れを表現する霞: 夕方の時間帯を表す霞。日中を表す霞 - 2 の描写方法よりさらに線の本数が増加するが、夜の描写より線の本数や線の間隔が広いことから夕方と見られる。「龍安塔頭大珠院 (中和)」(図 260) や「同所角屋雪興 (文鳴)」(図 261) の2件に見られる。

- ・夜を表す霞 - 1: 横線を多数用いることにより、日中を表す霞 - 1 の形と似た、楕円形を複数個組み合わせた形によって霞を表している。日中を表す霞 - 1 の描写と異なるのは霞を表す横線の本数であり、隙間なく描くことで霞を黒く表している。この描写とともに挿図には行灯やろうそくの火がともされていることから、夜であると判断できる。「光雲寺 (中和)」(図 262) や「靈山叔阿弥 (中和)」(図 263) などに見られる。

- ・夜を表す霞 - 2: 月を白抜きにし、その周囲を多くの横線を隙間なく描いて表現する手法である。「清水圓養院 (草偃)」(図 264) や「同所藤屋月興 (草偃)」(図 265) などに見られる。

雲と霞は同時に挿図の中に存在する場合や、霞が 2 種、3 種と異なる描写が同一画面に混在する場合がある。これらについては、直線と曲線を用いた日中を表す霞-1 と直線のみで描かれた日中を表す霞-2 が 1 件の挿図に同時に描かれる場合は画面手前に日中を表す霞-1 が描かれ、画面の奥に日中を表す霞-2 が描かれており、遠近で使い分けられていることが分かった。

### 第 3 節 人物による庭園の演出

#### 第 1 項 利用形態を示す人物

挿図には様々な行動をしている人物が、生き生きとした様子が描かれている。これらの人物の動きを読み取っていくと、庭園の性質を表すための演出、庭園の鑑賞位置、庭園の見どころを説明するために人物を配置していることが分かった。まずひとつ目は、庭園の利用方法を知ることができる人物の行動である。この種類の人物がどのように図に描かれているのか、「圓山正阿弥其二（中和）」（図 266）を例に挙げて説明していきたい。

「圓山正阿弥其二（中和）」では、室内にいる人物が宴会をしている様子が庭園とともに描かれている。庭園には降り立って鑑賞している人物も描かれており、円山正阿弥は庭園が優れた遊興施設であると紹介しているのである。しかし本文では遊興施設であることは述べておらず、図の表現でのみ示している。

正阿弥は東山区円山町にある時宗正法派、安養寺の塔頭、六坊のひとつであり、風流行楽の場として栄えていた。六坊とは勝興庵（正阿弥）、長寿庵（左阿弥）、花洛庵（重阿弥、庭阿弥、橋之寮とも）、多福庵（也阿弥）、延寿庵（連阿弥）、多蔵庵（眼阿弥、春阿弥とも）であり、円山の六坊と言われていた。いずれも庭園や眺望に優れており、多くの遊興客を集めていた。その様子は『都林泉名勝図会』にも描かれており、「圓山正阿弥其二（中和）」だけでなく残りの五坊もそれぞれ庭園や遊興の様子が、計 10 件の挿図によって紹介されている。これらもまた同じように、庭園や

眺望と一緒に遊興客の様子が描かれている。

このように、庭園の利用形態を読み取ることができる挿図が他にもある。「吉祥院村中陽泉亭（中和）」（図 40）では、大きな池と池中に大きく張り出した建物が描かれている。池には船を浮かべて楽しむ人や鴛鴦が多く描かれている。この挿図では建物内、縁先にいる女性たちが、鴛鴦に餌をやっている姿が描かれている。鴛鴦と戯れることができ、また煙管をふかしたながら庭園を鑑賞する姿が描かれている。ゆったりとした冬の景色を描いており、この庭園での過ごし方や楽しみ方が紹介されている。林泉図には、庭園を鑑賞する人物のみを描くだけでなく、庭園内で遊んだり動物と戯れたりする姿が描かれ、建物内では宴会をしたりくつろいだりする姿が描かれる。ほかに、庭園で涼をとる姿や、書会をしている様子が描かれている挿図がある。林泉図では庭園内で何ができるか、庭園を眺めながら室内で何ができるかが、挿図内に描かれた人物の行為によって紹介されている。

## 第 2 項 人物の位置が示す鑑賞方法

挿図内に描かれた人物の行為だけが庭園の特徴を表しているのではなく、人物が描かれる位置も重要になっている。庭園を鑑賞するとき、見る位置によって景色が変化する。そのために、どこから庭園を見るべきか案内するための工夫が挿図に施されている。

例えば、「大徳寺塔頭芳春院（中和）」（図 14）である。図では画面右の手前に呑湖閣を指差した人物と指差す方向を見ている人物が描かれている。この 2 人が立っている場所は、呑湖閣を含めた庭園全景を見渡することができる位置である。庭園だけを鑑賞するなら、打月橋に立って鑑賞してもよいだろう。しかし筆者である秋里籬島は、呑湖閣を含めた庭園の景色を見ることを推奨しているため、画面右の手前に人物を配置したのである。

さらに「南禅金地院其一（中和）」（図 267）「其貳（中和）」（図 268）には南禅寺

塔頭金地院の庭園が描かれている。金地院庭園は鶴亀の庭とも呼ばれ、鶴島と亀島の石組が左右対称になるように配置されている。挿図にもその様子が描かれ、画面中央やや右に鶴島が、画面中央やや左に亀島が描かれている。その手前には大きな空間が描かれており、そこに人物が描かれている。庭園の奥には本光国師開山堂が描かれており、さらに東照宮へ続くと思われる道も描かれている。描かれた人物は、3箇所配置されている。画面右の飛石や橋の上にいる人物たちは、庭園を鑑賞しておらず、奥にある開山堂もしくはさらに奥にある東照宮へ赴く参拝客を表現している。画面中ほどにいる人物たちは、庭園を見ておらず、開山堂などに背を向けていることから、参拝もしくは庭園の鑑賞を終えて帰る人物を示していると考えられる。さらに画面左に描かれる僧形の男性は扇子で庭園の方向を指しているのも、一緒にいる人物と庭園の話をしているようである。

そして庭園を歩いている人物は皆、飛石の上か石組から距離を取った位置を歩いている。これは、石組に近づいて鑑賞するより、遠くから庭園を見るべきであることを示していると考えられる。近づいて鑑賞することを推奨する場合は、近づいて鑑賞する様子が描かれている。その様子が描かれているのが「本法寺（草偃）」（図 269）である。挿図では男と僧形の人物が庭に下りて枯滝石組の前に立ち、石組に注目しているようである。さらに2人とも、石組を指さして話をしているようである。このことから、枯滝石組をこの庭園のひとつの見どころとして紹介しているとわかる。

またこの挿図では、実際の庭園の大きさと比べると図の人物が小さく描かれている。これは一見誇張表現のように見えるが、しかしそうではなく、当時は庭園の東北隅にある宝蔵はなく、さらに書院南側の縁先が現在より北にあったため<sup>39</sup>、庭園の大きさも現在より大きかった。よって、現在感じる庭園の大きさとは異なり、図は当時の庭園の大きさを表現したものであることから、実態を示していると考えられる。人物の大きさについては凡例にも述べられており、

一 法則によつて遠景をとる庭中はすべてその遠景を図し、遠景不用意の

庭はこれを省く。また図ごとに人物の面の小大あり、その貌の小大によつて林泉の広狭をしるべきなりとあり、人物が庭園の広さを知る手掛かりとなっていることがわかる。

### 第3項 人物の行動による鑑賞ポイント

他にも「大徳寺方丈（中和）」（図15）には見どころの紹介のために、工夫がなされている。挿図には、庭中に1人の僧と2人の男性が庭園を散策している様子が描かれている。この図で注目したいのは、庭園に降りている人は何を見ているかである。3人は庭園の外を見ており、僧は扇子で何かを指示している。当寺の東には比叡山があり、そのことは挿図中にも描かれ、比叡山と達磨峰を書き示している。

しかし、描かれた3人は図中の比叡山がある方向を見ていない。比叡山は当寺の東にあるが、図では南東方向に描かれている。比叡山を本来の位置に、方丈のさらに東におくと、挿図からはみ出たところに描かなければならなくなる。比叡山を挿図に収めようとする、今度は主役である庭園を小さくするか、ほんの一部しか描けなくなる。それでは本末転倒である。そこで考えられるのが、「ねじれ表現」である。人物を本来ある比叡山の方角に向けさせ、図の奥に比叡山を描く。読者はこれを読み取り、頭の中で比叡山を東へやる。読者にも絵解きが求められる挿図である。

さらに飛田範夫は挿図と現状を比較して、挿図は現状より東庭が広いことを指摘しているが<sup>40</sup>、これについては意味がある。参考として、庭園の平面図を図270に示した。本庭の石組は、平庭を囲うように塀や生垣に沿って配置されており、擬似的に広く見える庭園を造っている。また、石組を置く位置だけでなく、地割や石組そのものにも工夫がされている。南庭は、東南隅に建てた滝口石組から西に行くに従い、石の大きさを小さくし、樹木の密度を減らしている。東庭は北隅から南中心部に向かうに従い、敷地の幅を狭めている。それに応じて、石組を低くしている。これらは遠近法の効果を狙っているものである。そのため、実際より広く見える庭園を表すために、

画工は東庭を誇張して描いたと考えられる。よって現状を描くことより、手家を見て感じた情報を図に描いたのではないか。

庭園の見どころの紹介のために、見どころとなるところに人物を配置し、指や扇子でそのものを指したり、人物同士がそのものについて話をしているように描いている。また、挿図には本来の景色と異なる点があり、必ずしも現状を表しているわけではない。見どころの紹介のための演出を考慮すると、図はデフォルメされており、それは、見どころの紹介のためや庭園の特徴を示すという、目的に応じたものである。

## 小結

『都林泉名勝図会』ではその写実性の高さが評価されていたが、石の形状による表現の微差はあるものの、石質の違いによる線画表現の差は確認できなかった。ただし自然石と加工石の石肌の表現の違いが見られることから、その 2 種は明確に描き分けられていた。

植物の描写について、14 種の植物の種類が判明した。同じ樹種でも描き分けがされており、特に松は紹介した以外にも描写方法は多岐にわたる。近景描写の樹木は葉の形状がしっかりと描写され、蓮は葉脈まで描かれている。それに対して遠景描写の樹木は簡略化した葉の形で描写されており、『芥子園画伝』に見られる点葉法が確認できた。『芥子園画伝』との類似が見られることから、日本の南画は『芥子園画伝』の描法を基礎としており、ひいてはその南画家たちが手掛けた庭園図を参考として挿図が描かれたと推測できる。

しかし、樹木種類の判別できない植物がまだ残っている。その理由として、植物が密集して描かれているため葉が他の植物と混同し、判別しづらい。よって、樹種不明の植物については今後も研究を進めていきたい。

全挿図を通して描写方法を考察する上で、描写方法は同じであるが画工によって若干の差異が見られた。特に分かりやすいのは近景の水面描写、竹-1、近景の松の描写と中

景の松の描写である。これらについては項中に述べたが、その描写の特徴を踏まえて挿図全体の印象を見たとき、中和は柔らかなタッチで描き、図内の構成要素をしっかりと表現しているため分かりやすい図である。草偃は堅いタッチであり、植物の描き込みが多い。そのため植栽が密集しているように見え、やや鬱蒼とした印象を受ける林泉図が多い。庭石の描写も角張った表現を用いることが多い。文鳴はタッチが柔らかく、中和の描く図と印象が似ている。しかし、文鳴が風流の図を多く手掛けていたため人物表現が細かい。人物の動きはもちろん、顔の表情まで細かく描写している。また文鳴は、竹の描写方法一では中和と同じ表現をし、中景の松の描写では草偃と同じ表現をすることから、中和と草偃の中間的な表現をしている。

風流の図に関わらず林泉図にも必ず人物が描かれるが、その行動によって庭園の利用形態、鑑賞位置、見どころを示していることが分かった。本史料の本文には庭園に関する記述が少なく、その庭園の見どころや特徴の説明はほぼない。その代わり、挿図内には人物を描き、その行動や配置で庭園の特徴を伝えている。

以上のことから挿図には名勝の特徴を伝えるために植物や人物の描写が利用されており、読者がそれを読み取って名勝を知る手掛かりとしている。特に林泉図では人物の演出が顕著であり、構成要素の表現や人物の演出から秋里がその庭園の見どころがどこであったか、どう捉えていたかを知ることができる。

### 第3章 『都林泉名勝図会』における林泉図の分析

林泉図においてさらに詳細な分析を行うため各構成要素を抽出し、挿図に描かれた庭園の状況を客観的に整理し、描かれている人々の行動の分析などを行う。ただし本研究は庭園描写に重点を置くため、分析する挿図を99件の林泉図のみに絞った。

分析の方法について、『史跡等整備のてびき―保存と活用のために―』の歴史的庭園の主な構成要素を参考<sup>41</sup>とし、挿図から読み取ることができる季節や気象などを含めた12項目に分けて構成要素を抽出した。各項目は地割、水系、石組・景石・敷石・敷砂利・敷砂、植栽、構造物、建造物、周辺景観、背景の種類、庭園の機能、詩歌、季節・時間・気象、人物、動物である。これらの項目に従い、挿図から読み取れる情報をまとめ、『都林泉名勝図会』林泉図調査票を作成した。庭園の構成要素については挿図から、第2章で類型化した描写方法をもとに描かれた要素について読み取ったままを記した。背景の種類については無地（庭造の法則ある）、建物・風景（法則儼なる）、風景（遠景をとる庭中）の3種に分類した。これは凡例に拠るものであり、その凡例については第1章 第1節 第2項にすでに述べたとおりである。これを踏まえて庭園の背後に注目すると、背景が無地である林泉図はその庭園が作庭技術をもって造られた庭園であると知ることができる。背景に建物や風景が主として描かれている林泉図は庭園が小さく、風景が図の主題となっていることから庭造の法則儼なる庭園であることが分かる。そして山並みや町並みなどが庭園の背後に描かれている林泉図は遠景をとる庭園であることが分かる。

すべての林泉図について述べることはできないが、特徴的な林泉図を選出して以降に示す。また、本論で記述できなかった他の林泉図は資料編『都林泉名勝図会』林泉図調査票を参照されたい。

#### 第1節 情景描写が特徴的な林泉図

##### 第1項 季節表現が特徴的な林泉図

- (1) 冬の情景が描かれた「建仁塔頭靈洞院（中和）」



本図は建仁寺の塔頭である霊洞院庭園を描いた挿図である（図 250）。霊洞院庭園は昭和 52 年（1977）に国の名勝に指定されており、その解説文には「寛政 11 年（1799）刊行の『都林泉名勝図会』に載せられた絵図は現在の庭景とほとんど変わらず、遅くとも江戸時代中期の作と認められる」とあり<sup>42</sup>、『都林泉名勝図会』に描かれた当時と変わらぬ姿が評価されている。

本図は雪が積もっていること、池に氷が張っている描写が描かれていることから冬の景色が描かれていることが分かる。地割の多くを占める大きな園池には中島があり、書院から続く飛石の先に石橋が架けられている。画面奥側には土橋であろうか、反り橋が出島に架けられている。中島や反り橋の奥に石組が見られるが、全体的に石組は少なく、庭園の奥には社も見られる。人物は画右手前の建物内に 3 人の僧侶が描かれており、室内から庭園を鑑賞している様子が描かれている。

本文の建仁寺霊洞院の項には庭園に関する記述はない。

#### ・地割

本庭園は方丈と書院を囲むように南面し、北へ折れた形状の地割である。池の南側には西から続く野筋が見られる。池の北東側には中島があり、南東には出島が大きく張り出している。庭園の敷地は南側を塀と高い生垣によって区切られ、東側は低い生垣によって区切られている。

#### ・水系

池は書院に面しており、建物に沿う形で折れ曲がっている。書院の縁がから続く飛石の先には石橋が架かり、中島に通じている。画面奥側には出島上に突き出た部分に土橋が架かり、土橋の奥にも小面積ではあるが池が繋がっている。

修復前の重森三玲の実測図（図 271）と比較すると大変良く似ているが、中島に架かる橋付近の護岸の形が挿図より緩やかな弧を描いている。

#### ・石組・景石・敷石・敷砂利・敷砂

中島と土橋の奥、出島部分に石組が見られるが、他に目立った石組はない。画面左手前に池へ続く沢飛石、土橋の中腹付近の池中に景石が見られる。

昭和 14 年（1939）に重森三玲によって復元修理が行われたが、その際に中島の亀頭石が修理以前は崩れていたため、挿図を参考に復元された。石橋の先にある中島の蓬莱石と護岸石を兼用して用いていることが挿図に見られると重森が指摘している<sup>43</sup>。

護岸石組について、飛驒は現状では板状の石と自然的な石を交互に置かれていること違和感を持っているが、挿図の書院手前の護岸にも同様の手法が見られることを指摘している<sup>44</sup>。

#### ・ 植栽・ 植生

本図に見られる植栽は中島と庭園の奥側に松が見られ、塀の外に竹が見える。そのほかの樹種については、積雪表現のため判別し難い。画面右側の土橋の袂には刈込が見られ、庭園の奥側へと続いている。また、画面奥と左側には庭園の敷地を仕切る生垣が見られる。

#### ・ 構造物

本図の中には石橋、土橋、燈籠、石塔、社といった構造物が見られる。中島に架かる石橋は自然石と見られる。土橋は橋脚が 1 本ある木造の反橋であり、床板である丸太が見てとれる。現在、挿図に描かれた土橋の位置には石橋が架けられている（図 272）。『花洛林泉帖』（1910）の写真（図 273）では仮設的な板橋が架けられており、実測図には石橋に変更されていることが飛田によって指摘されている<sup>45</sup>。形状は延石 3 本を 2 列に並べて橋とし、2 本の橋脚がある。

画面中央に石燈籠があり、竿石は円柱、火袋は四角の織部式燈籠の様に見え、笠の部分には雪が積もり、石肌の描写表現が見られない。現状では竿石に仏が彫られ、火袋は六角の寄燈籠である。見る角度によって挿図と同じ形に見えるが、このような差異が見られた。石燈籠の右側に五重の石塔が見られる。

そのほか現状では書院の東側に層塔がある。重森は近年になって南山城地方から求められたものとしており<sup>46</sup>、基礎に桶狭間が入り、塔芯には四方仏が彫刻されている。

#### ・建造物

挿図内に描かれている建造物は書院とそこから延びる渡廊下、敷地を区切る塀の3つである。書院は庭園のある方向の障子を開け放つ様子が描かれている。縁側には欄干が付いており、東側から外に出られるようになっている。現在の書院は嘉永6年(1853)に改築されており、入母屋造り瓦葺、東西に書院と方丈が並ぶ南面した建物である。挿図との相違点は瓦葺になっている点と書院南東隅に花燈窓の書院がつけられている点の2点である。挿図では柿葺もしくは檜皮葺であると思われるが、現在は瓦葺である。久恒は東南隅の出書院を付けたことで、東縁により南に降りる沓脱石が3尺南に寄ったことを指摘している<sup>47</sup>。さらに久恒は、建物改造は書院と玄関との間に東西7間、南北6間の方丈を造ったことも指摘しており、南側の庭に比べて方丈が大きく、玄関書院に対してゆとりの内へ面構成をしていることから、改造前の建物は現在の方丈より小ぶりの建物であったと推測している。

庭園を仕切る塀は軒丸瓦がみえていることから、本瓦葺であると思われる。

#### ・周辺景観

塀の外に竹林が見られるのみであり、その他の景物は見られない。よって秋里は「庭造の法則ある」庭園と判断していたことが推察される。

#### ・季節・時間帯・気象

積雪と池に貼った氷から冬であることが分かり、見ごろは冬であると判断できる。

#### ・人物

室内に3人の僧侶が描かれている。ともに庭園に視線を向けており、その内の1人は縁に立ち、欄干に手をかけて身を乗り出すようにして庭園を眺めている。視線の先には島があることから、島が見どころのひとつであったと考えられる。

- ・動物

動物は描かれていない。

- ・詩歌

詩歌なし。

## (2) 洛東の佳邑を描いた「高臺寺方丈林泉其一（中和）」

本図（図 274）は高の方丈庭園を描いたものである。現在、高台寺庭園は 1927 年に国指定史跡・名勝に指定されており、慶長 10 年（1605）の本寺創設時に造られた庭園とされ、東山を背景とし、開山堂を挟んである偃月臥龍の 2 つの池を主景とした庭園である。挿図にも開山堂や背後の山々が描かれており、図の中央部に庭園が描かれている。図の下部には庭園を散策する人物らが描かれている。次頁には「高臺寺小方丈（草偃）」と題し、渡廊下の左部分が描かれている。

本文中における高台寺の項では、まず初めに庭園についての記述がある。

高台寺の林泉は豊太閤御霊舎の下段方丈の東にあり、風光奇雅にして洞庭を縮む<sup>おもかげ</sup>の悌あり。（中略）されば当山は洛東の佳邑にして名区多し。春は桜花幽艶として匂ひ濃なり。夏は庭中の池の面に燕子花咲乱れ、また秋は萩の花錦を晒すがごとく、露深うして色をまし、鷺峯の月皎々として鮮なり。冬は連峰に雪續粉續と風に随ふて花を飛し、東坡が白鳳に騎かと疑ひ、宋玉が幽蘭白雪の曲を作れるの勝地なり

高台寺の庭園は洞庭湖を思わせるような庭園であり、風光明媚であることが記されている。さらに、洛東の佳邑と称され、四季折々の姿が楽しめる名勝地であったことが分かる。

そのほか本文中には沿革、御霊舎などの建築意匠について、豊臣家とのゆかり、持仏などの記載がされている。

- ・地割

本文中に御霊社の下段、方丈の東に庭園があることが記されており、図の左上部に

「御霊舎」と記された建造物があり、その屋根だけが描かれている。その手前には開山堂があり、さらに手前には庭園が広がっている。庭園は御霊舎の下段にあることから、庭園には高低差があることがわかる。そして方丈の東に庭園があることから、図の右下に描かれた屋根が方丈であり、挿図が東を向いて描かれ、背後に描かれた山々が東山であることがわかる。庭園の東側には築山が多く配置され、築山の間には開山堂へ至る園路が設けられている。北側には渡廊下が描かれており、園池の一部分が見える。

#### ・水系

図の左方、庭園の北側に園池があり、その一部が描かれている。池には穏やかな水流の描写が見られ、流れがあったことが分かる。この園池は次頁の「高臺寺小方丈（草偃）」に描かれた園池の南端である。ただし図は視点が変わっており、連続していない。

現在、園池は「偃月池」と呼ばれ、挿図に描かれた形によく似ており、開山堂前へ張り出している。現状では園池の南西に鶴島があるが、挿図では築山の背後に隠れて描かれていないため不明である。また、「高臺寺小方丈（草偃）」に描かれた園池も現状とよく似ている。

#### ・石組・景石・敷石・敷砂利

築山の所々に石組があり、図の中央には大きな立石が見られる。また開山堂の南西の角に石組が見られる。門から開山堂までは延段が設けられ、開山堂前は飛石になっている。

#### ・植栽・植生

手前の築山は地被類で覆われており、中景描写の松や刈込が植えられている。開山堂前の延段東側から開山堂の東側にかけて燕子花が多く植えられ、その奥の築山には多くの遠景描写の楓が植栽されている。よって本図は夏と秋が表されていることが分かる。

本文中に「夏は庭中の池の面に燕子花咲乱れ」ることが記されており、本庭にも燕子花が多く描かれたのか。四季折々の花木が楽しめる名勝であるからこそ、燕子花や楓を多く植えられていたと考えられる。

#### ・ 構造物

図の左には開山堂につながる欄干付きの渡廊が池の上に架けられている。この橋は現在、渡船橋と呼ばれ、橋の中央部分には観月台と呼ばれる亭がある。その亭は本図では描かれていないが、「高臺寺小方丈（草偃）」に描かれており、屋根の四方が唐破風である。本図では檜皮葺-3の描写で屋根が描かれ、「高臺寺小方丈（草偃）」では白抜きになっているため檜皮葺か柿葺きが考えられるが、現状は柿葺である。開山堂前には四角型石燈籠が2基見られる。宝珠があり、反りの付いた笠、やや丸みを帯びた火袋、竿の帯や基礎部まで描かれている。

#### ・ 建造物

図の右下には方丈、左下には渡廊下、左中央には「開山堂」が描かれ、図の右中央には門があり、その左上には社が建てられている。また図の中央上には「御霊舎」の屋根が見える。方丈は檜皮・柿葺-1の描法で描かれている。渡廊下は檜皮・柿葺-3の描法で屋根が描かれ、欄干がつけられている。開山堂は本瓦葺である。

#### ・ 周辺景観

庭園の背後には東山の山並みが描かれており、図の右から「雲鷲山」「白山」「將軍塚」と書き記されている。山には遠景描写の松が多く描かれ、松山であることが分かる。背景に山並みだけが描かれており、庭園が主題となる図であることから遠景をとる庭園であると判断できる。

#### ・ 季節・時間帯・気象

植栽・植生の部分でも述べたが、庭内に燕子花と楓が描かれていることから夏と秋が同時に描かれている。時間帯の指標となる霞は庭園と山並みの間に描かれており、霞-2の描写が用いられていることから日中を描いた図である。

- ・人物

僧侶が2人、武士が4人、男性が2人の合計8人が挿図中に描かれている。人物らは方丈へ至る渡廊下を歩く僧侶や庭内を散策する武士らが描かれている。池に架かる渡廊にも人物が描かれており、橋上からの景色を鑑賞のポイントとしていることが分かる。

- ・動物

描写なし。

- ・詩歌

描写なし。

### (3) 暮秋の眺望を描いた「歌中山清閑寺（草偃）」

本図（図 275）は東山にある清閑寺の庭園を描いたものである。図の下半分には枯山水の平庭が描かれており、庭内には散策する人物が描かれている。図の左には山々が描かれ、図の右上部には京都の町並みが描かれており、眺望が開けた庭園であることが分かる。

本文中には「歌中山清閑寺」の項のはじめに庭園について記述されている。

歌中山清閑寺の林泉は真妙にして、庭中に要石あり（或云六条院御陵小堂の趾なりといふ）この地嵯峨渡月橋より見れば獅子口に似たるとてこの名を呼ぶ

このことから、庭中には「要石」があり、見どころであることが分かる。挿図にも「要石」と書き記された石が描かれている。

- ・地割

眺望が見下ろせることから高い土地に庭園があり、眺望を活かした平庭であることが分かる。敷地は塀や生垣で囲まれて、矩形の敷地が描かれている。

- ・水系

描写なし。

- ・石組・景石・敷石・敷砂利

庭園には図の中央に「要石」と書き記された景石が一つあるのみである。要石はコの字型に柵で囲まれ、空いた左側は植栽によって囲まれている。柵の中には立て札が立てられており、字が書かれていることが分かる。要石の説明書きがされていたのか。本文から六条院御陵小堂の趾とも言われていたことが分かる。

- ・ 植栽・植生

庭内には遠景の描写方法で描かれた楓が8本植えられており、庭外にも楓が描かれている。その他は松や杉などの植物や刈込が見られる。地面は地日で覆われていたようである。

高倉院御陵が近くにあることから本文にもその記述が見られ、「御愛樹の丹楓多くして暮秋の眺望錦繡を晒すがごとし」とあり、付近に楓が多く、紅葉の名勝となっていることが分かる。関連して本庭園も楓が多く植えられていたのかと推測できる。

- ・ 構造物

要石の周りにコの字型の柵が設けられている。材質が不明であるが、現在は挿図に描かれた形と同様のコの字型に石で作られた柵で囲まれている（図 276）。

図の左側の庭園を区切る柵が描かれ、門も設けられている。また、図の右下には沓脱石のような描写が見られる。

- ・ 建造物

図の右側に板葺屋根の塀が描かれており、図の右下に沓脱石と思われる石があるため、図の手前には建物があることが想像できる。

- ・ 周辺景観

図の左には山々が描かれ、図の右上部には京都の町並みが描かれており、眺望が開けた庭園であることが分かる。その景色には山並みや町並みが描かれ、図の中央には2階建てと思われる建築が描かれており、その描写から大仏殿と思われる。現在の清閑寺庭園からも眺望が望め、山の間から東本願寺や京都タワーを見ることができた（図 277）。



庭園外には建物の描写はなく、眺望だけが描かれている。よって遠景をとる庭園として描かれていると判断できる。

- ・ 季節・時間帯・気象

季節は楓が描かれていることから秋であることが分かり、この庭園の主要な樹木であり、何本も植えられていることから庭園の見頃を秋としていることが分かる。

そして日中を表す霞 - 2 の描写が用いられていることから時間帯は日中であり、風雨の表現がないため晴であることが分かる。

- ・ 人物

庭中には 5 人の人物が描かれており、どの人物も要石に注目し、この庭園の見どころであることが分かる。本文と挿図内にも要石について書き記されていることからこの庭園の見どころであることが既に分かるが、人物を描くことによってさらに強調されている。

- ・ 動物

描写なし。

- ・ 詩歌

図の左上に詩歌が描かれている。「秋興 とくおきていそく茸狩り紅葉かりあかてそ秋の日影くれゆく 慈延」とあり、きのこ狩りや紅葉狩りについて詠まれた歌である。紅葉については庭内に楓があることから関連が分かる。きのこ狩りについては、本文中に「山谷に松茸生じて洛陽の貴賤むれ来つて游蕨を催す、風流の勝邑なり」とあり、多くの人がきのこ狩りに興じていたことが分かる。この事に由来して、詩歌が選択されたと思われる。

## 第 2 項 時間帯表現が特徴的な林泉図

### (1) 夜の情景を描く「光雲寺」

本図（図 25）は光雲寺の夜の情景を描いた挿図である。現在の光雲寺庭園は昭和 2

年（1927）に7代目小川治兵衛によって新規に策定されたものであり、京都市の名勝に指定されている。そのため図に描かれた庭園とは園池の形にやや名残が見られるものの、姿は大きく変えている。

図には中央に園池が広がり、図の右には滝が造られている。右下には建物が建ち、屋内にはくつろいだ姿の僧侶が描かれている。

#### ・地割

建物前は平庭であるが、図の中央には大きな園池があり、左右に広がっている。その右側には高低差を活かした落差の大きい滝が描かれている。池の対岸には高い築山があり、その背後には園路が見られる。庭園の背後は山々がえがかれており、遠景を取り入れた庭園であることが分かる。

#### ・水系

図の中央に大きな池があり、左右に広がっている。園池の水面は水面-1の描写を用いられている。そして図の右側には落差のある細い滝が描かれている。水流の表現には瀑布の水流描写が用いられていることから、大きな滝であることが分かる。

図の右下の建物の縁先にある縁先手水鉢には、笕を利用して水が注がれている様が描かれている。

#### ・石組・景石・敷石・敷砂利

護岸や滝の部分に石組が見られ、橋のたもとやその奥などに集中して石が組まれている。平庭部分には建物から直線的に飛石が打たれており、途中で折れ曲がり、池の護岸まで続いている。

#### ・植栽・植生

全体的に遠景描写の楓が多く、中景描写で描かれた松が所々に植えられている。護岸には小さな刈込が植えられ、出島には大きな刈込が目立つ。図の手前の池中には燕子花が植えられ、花を咲かせている。楓と燕子花が描かれていることから、この挿図は夏と秋が混在した季節表現がされている。ただし、人物の項で詳述するが、人物ら

の表現から夏を強調していることが分かる。

- ・ 構造物

池には反りのある土橋が架かっており、桁の上に並べられた丸太の小口が見え、その上面は白抜きで描写されている。他の図に見られる土橋には上面に地被類が描かれていることが多いが、本図の土橋には描かれておらず、地被類を植えていない土橋であると思われる。

右側の建物の側には「手水瑠手水鉢」があり、簀から水が注ぎこまれている。手水鉢は円柱の台石の上に乘せられた、蓮型の鉢である。現在の庭園にも瑠瑠手水鉢と呼ばれる縁先手水鉢があるが、挿図に描かれた形状と異なっている（図 278）。また、同じ縁先に加工石の沓脱石も描かれている。

- ・ 建造物

図の右側に建物があるが、屋根の描写が檜皮・柿葺-3 であり、柿か檜皮かは判別できない。室内には行灯が置かれ、その光によって映し出された室内の人物の影が障子に描かれている。このような表現は本図にのみ見られ、この図の最も特徴的な描写である。

- ・ 周辺景観

庭園の背後には山が描かれている。このことから、遠景をとる庭園であることが分かる。

- ・ 季節・時間帯・気象

庭内に燕子花と楓が描かれていることから、夏と秋の季節が挿図内に混在していることが分かる。

時間帯の指標となる霞は夜を表現する霞の描写が使用されており、これが夜であることが分かる。さらに室内には行灯が置かれ、縁先に立つ人物の手には手燭があることから夜であると判断できる。

これらを総合すると、楓が描かれているが、夏に重きを置いた描写が多く見られる

ことから、この庭園の主題は夏の夜の光雲寺庭園である。

- ・人物

挿図には影を含めると 5 人の人物が描かれており、全員室内に描かれている。座敷に座った僧侶や縁側の男性が室内から庭園を見ていることから、室内からの鑑賞を勧めていることが分かる。

- ・動物

土橋の付近の池中に鷺が 2 匹描かれている。またその近くの池中に蛙が 2 匹、燕子花の前に 2 匹描かれている。

- ・詩歌

図の左上に「光雲といふに いなつまやきのふは東けふは西 其角」と記されている。寺の名称から雷雲を連想した歌であり、かつ夏を想像させ、挿図の情景に合わせた詩歌である。

## (2) 月夜を描く「清水圓養院」

本図（図 279）は清水寺の塔頭である円養院の庭園を描いた挿図である。庭内で月見をする僧侶たちが描かれている。

本文には「音羽清水寺」の項で円養院は庭園についてのみ記述がある。

円養院は林泉より遠望すれば八幡、山崎、淀川の長流鮮にして奇観なり  
これにより、円養院庭園は遠景を利用した庭園であり、それが奇観であると評価していることが分かる。加えて、挿図には「雪月名所」と図題の横に記されていることから、秋と冬に見頃を迎える庭園であると知ることができる。これを基に、庭内で月見をする情景を描いたのだろう。

- ・地割

眺望を活かした平庭であり、生垣によって敷地が囲まれている。庭園は庭石がなく、地面には地被類が植えられているだけの簡素な庭園である。

- ・水系

描写なし。

- ・ 石組・景石・敷石・敷砂利

描写なし。

- ・ 植栽・植生

庭内の植栽は少なく、手水鉢付近にすすきや数種の樹木、刈込が植えられている。敷地は刈込で囲まれ、地面は地被類で覆われている。庭外には杉や松などの樹木が見られる。すすきによって、秋を示していることが分かる。

- ・ 構造物

図の下部に自然石と加工石の沓脱石が見られ、図の右側には手水鉢が描かれている。庭内には床机を3つ並べている。

- ・ 建造物

描写はないが、図の下部に沓脱石が描かれていることから手前に建物があると思われる。

- ・ 周辺景観

庭園からは眺望が見え、近くには「大佛殿」が見えている。図の右には町並みや田畑が広がり、その中に「光明寺」「東寺」が書き記されている。図の左には山並みが描かれ「豊国山」「音羽山」が書き記され、図の右側へと山々が連なっている。庭中から遠景を望めることは本文中にも示されている。よって、遠景をとる庭園である。

- ・ 季節・時間帯・気象

月見をする様子が描かれていることや手水鉢の横にすすきが描かれていることから、この挿図が秋の様子を描いたものと判断できる。

霞は夜を表す霞 - 2 の表現が使用されていることから、夜であることが分かる。

- ・ 人物

図には7人の僧侶が描かれており、僧侶らは庭園に置いた床机の上で宴会をし、手に持った紙に書き記したり見せたりしており、歌会か何かをしている様子が見てとれ

る。

- ・動物

描写なし。

- ・詩歌

図の左上に詩歌があり、「対月　こたへせぬ影をや果はかこたましとはすかたりの月にせられて　岡崎慈延」と書き記されている。これは月を詠んだ歌であり、秋夜を描いた挿図の情景に合わせた詩歌となっている。

### (3) 夕暮れを描く「同所角屋雪興（文鳴）」

夕暮れを描いた図に「同所角屋雪興」（図 251）がある。本図は京都市指定名勝の角屋の庭である座敷庭が描かれており、島原の揚屋である角屋の賑やかな様子と共に図題に雪興とあることから、雪が積もっている様子が描かれている。

本文にはこの挿図と対応する項目はなく、挿図のみで名勝を表している。

- ・地割

座敷に面した平庭である。図の左側には茶室があり、図の右下には大きな松があるのみであり、庭園の主役がこの松であることが分かる。

- ・水系

描写なし。

- ・石組・景石・敷石・敷砂利

茶室前に飛石が数個打たれているのみである。

- ・植栽・植生

図の右下に「臥竜松」と書かれた松の大木が描かれている。松は庭園の端から端へ枝を長く伸ばしており、茶室前まで伸びた枝は支柱で支えられている。その枝先には黒くぶら下がっているものがあるが、松ぼっくりか。右下の土塀と松の隙間に樹種は不明であるが、樹木が描かれている。茶室周りにも2本の松が描かれており、そのどれもが近景の松の描写方法によって描かれている。そのほか茶室の周りに臥竜松の下

に見られた植物や刈込、地被類などの植栽が見られる。

渡廊下の付近にも同様の植栽が見られる。

- ・ 構造物

座敷正面には切石の沓脱石があり、渡廊下に面した縁には橋杭型の縁先手水鉢が見られる。茶室前には金属製の雪見燈籠が描かれている。挿図に描かれた手水鉢と雪見燈籠は現在の庭園によく似たものが見られる。また、茶室の奥には柵が描かれている。

- ・ 建造物

図の右に建物があり、2 階部分には「青階間」、中央の座敷は「大座鋪」と書き記されており、大座敷の左には渡廊下が続いている。図の左下には「曲木亭」と書かれた茶室がある。建物の名前ではなく、各部屋の名称を図に書き記すこと手法はこの挿図にのみ見られてることから、建物も見どころの一つとして挿図で示したかったと考えられる。

- ・ 周辺景観

背景はなにも描かれておらず、この庭園が「庭造の法則ある」庭園とされていることが分かる。しかし庭園を建物から見た様子を描くのではなく、右下に塀があるため外からの視点で図を描いており、ここでも庭園と共に建築を見どころとして表現する意図が感じられる。

- ・ 季節・時間帯・気象

季節は図題や雪が積もる情景であることから冬であることが分かる。

さらに、時間帯を表す霞は、昼を示す霞より線が多く、夜を示す霞の描写より線の数が少ないという中間的な霞の描写であるため、夕暮れを表現する霞であると分かる。

- ・ 人物

図には 33 人の人物が描かれており、饗宴を楽しむ人物らの姿が生き生きと描かれている。庭内には雪球を転がしたり、雪合戦をしたり、雪を楽しむ姿が描かれている。

よって、本図に描かれた庭園は鑑賞だけにとどまらず、遊びの場であったことがわかる。揚屋であることから遊宴を強調した図となっている。

・動物

夕暮れであることを助長するように、図の左上には飛び去っていく鳥が描かれている。

・詩歌

図の左上には「つむ雪に尾上を思ふ庭の松 松仁太夫みつから書」とあり、雪が積もった臥竜松を詠んだ歌であることが分かる。この歌は、この庭園の特徴でもある臥竜松や雪景色を強調する働きがある。

### 第3項 気象表現が特徴的な林泉図

(1) 晴れた情景を描いた「龍安塔頭大珠院（中和）」

挿図の多くは晴を描いた図が多く、降雨や降雪を描く図は「金閣寺其一（中和）」「其二（中和）」、「妙心塔頭靈雲院（中和）」のみである。気象の違いを明確に示すために、晴れた情景を描く挿図を取り上げる。

本図（図 280）は龍安寺の塔頭である大珠院の庭園を描いたものである。図の右下に建物があり、その前に大きな園池が広がっている。樹木が雪をかぶっており、屋根にも点描が見え、雪が積もっていることが分かり、冬の情景が描かれている。

本文の「龍安寺」の項では鏡容池、方丈庭園、塔頭である西源院、東林院、大珠院の持仏や什宝について記載しており、大珠院の庭園については以下のように記述されている。

大珠院の林泉は、鏡容池西の方に巡りて庭中の美となる。池中の島へ石橋をわたして、島の中に綾杉といふ名木あり。株の皮目に杳ありて綾絹に似たり。葉は常の杉に等し。高さ三丈<sup>ばかり</sup>許、京師の珍木なり。その木下に墳墓あり。中に真田左衛門尉幸村の墓あり。石塔婆<sup>せん</sup>を建て法号を鐫ず



この事から、大珠院庭園は鏡容池の西側を利用した庭園であり、石橋が架けられた中島には綾杉や真田幸村の墓があると分かる。

また、鏡容池については以下のように記述されている。

龍安寺の林泉は封境に名池あり、鏡容池と号す。冬日鴛鴦多く聚りて洛北の眺望世に名高し。池中に三つの島あり、中の島を伏虎といふ。また水分石といふあり、霖雨の時この石上へ水越ぬれば西の方の樋を上て水を落すなり。三笑橋といふは東の方にあり

大珠院の庭園でもある鏡容池は鴛鴦の名所であり、池中には3つの島があり、水分石や三笑橋が見どころであることが分かる。

#### ・地割

図に大きく広がる園池は鏡容池の西部であり、これを大珠院の庭園としている。池中には鏡容池に3つあるという中島のうちの2島の中島が描かれている。園池の手前の石垣が上には建物が建っており、建物の横にある階段によって庭園へ降りることができる。

#### ・水系

巨大な園池が描かれている。これは本文の記述に鏡容池の西部であることが示されている。さらに本文中には鏡容池について、池の水位が水分石の上を超すと池の西部にある樋を上げて排水していることが記されている。しかし図ではその樋は描かれていない。

建物前と図の左部に中島が設けられている。建物前から中島に橋が架けられている。図左部の中島には社があり、手前は栈橋状に張り出した場所に橋が架かっている。園池には鴛鴦が多く飛来している様子が描かれている。

#### ・石組・景石・敷石・敷砂利

建物前の中島の護岸に景石が据えられている。園池手前の護岸には飛石が打たれ、建物横の階段へ続いている。図の中央やや左の園池の中には「水分石」と書き記され

た景石がある。水深がこの石を超えると排水していたと本文に記述があることから、園池の管理の目安となっていた。

建物は石垣の上にあり、その石積が描かれている。建物のある場所から図の下部中央までの土地が高く、その間に庭園へ降りる階段が描かれている。

#### ・植栽・植生

建物前の中島や護岸には松が多く、中景の描写で表現され、松葉を表した塊の上には雪が積もった様子を描いている。中島には 1 本だけ背の高い樹木が描かれており、「綾杉」が書き示されている。本文からこの杉の幹肌が彩絹に似ており、高さが約 9 mある珍木であるとしている。そのほか中島には松や柳などが描かれている。園池の対岸には竹や松などが描かれている。

#### ・構造物

建物の縁先には切石の沓脱石があり、建物前の中島には石橋が架けられている。図からは材質が石であるか木であるか判別がつかなかったが、本文中に石橋であることが述べられているため、石橋であることが分かった。この石橋は 3 石の石を繋いで作られていることが図から分かる。中島には雪見燈籠と五輪塔「真田幸村墓」が描かれている。図左部の中島にも中央を高くした橋が架けられている。

#### ・建造物

図の右下に建物があり、屋根には雪が積もっているため描写方法が不明である。ただし、屋根の下部の黒い縁取りが共通しているため檜皮葺もしくは柿葺であることが分かる。図左部の中島には社がある。

#### ・周辺景観

園池の背後には町並みと山並みが描かれている。図の中央、綾杉の左側には塔があり、仁和寺の五重塔と思われる。よって、遠景をとる庭園であると判断する。

#### ・季節・時間帯・気象

雪が積もっている描写があることに加え、園池には冬に飛来する鴛鴦が多く描かれ

ていることから描かれた季節は冬である。

時間帯は霞の描写が夕暮れを表現する霞であることから、夕暮れであると判断できる。

#### ・人物

挿図には7人の人物が描かれており、建物内には座敷から庭園を眺める人物らと縁先に立って眺める人物が描かれている。どちらも中島の方を見ていることから、見どころを暗示していることが分かる。庭中の人物らは図の左部にある中島の方を眺めている。

#### ・動物

本文に冬に鴛鴦が飛来するため眺望の良い場所として有名であったことが分かる。それを表現するように、園池には鴛鴦が多く描かれている。

#### ・詩歌

図の中央上部に漢詩が書かれており、真田幸村の墓について詠まれている。名勝として強調する役割を持っていたことが分かる。

### (2) 降雪の情景を描く「金閣寺其一（中和）」「其二（中和）」

雪が降る様子は「金閣寺其一」（図18）「其二」（図19）に見られる。本図は鹿苑寺（金閣寺）庭園を描いたものであり、1956年に国の特別史跡・特別名勝に指定されている。金閣寺の挿図は1丁半にわたり、金閣を中心に鏡湖池を大きく描いた図であり、雪の積もった冬の景色が描かれている。

本文には「鹿苑寺」の項に沿革、金閣、庭園、明王院、足利義満について記述されている。庭園については以下が記されている。

林泉に三重金閣あり（中略）池を鏡湖といふ、九山八海石あり、御茶水を

銀河泉といふ、竜門瀑に鯉魚石あり、安民沢に臥龍石あり

これによって、金閣や名石を見どころとしていることが分かるが、具体的な庭園の様子は記述されていない。しかし1丁半にわたる挿図があり、そこに見どころを明記し、

情景に富んだ図が描かれている。

- ・地割

園池が図の3分の2を占めるほど大きく描かれている。「金閣寺其一」には園池の右部分や竜門瀑、安民沢、夕佳亭などが描かれている。図の右側に石段があり、安民沢や夕佳亭が高い位置にあることが分かる。「其二」では図の右側には金閣があり、その前に園池が広がっている。園池には中央下部に大きな中島と、その上に「亀島」が描かれている。そのほか池中には景石が多くある。図の上部には龍門瀑からの流れがあり、その対岸には春日社などがある。

- ・水系

「金閣寺其一」の図の中央やや上には「龍門滝」があり、豊富な水が流れ落ちている。図の左上から「其二」の図の右上に渡って「安民沢」が描かれており、中島が見える。龍門瀑からの流れは、「其二」の図の右上にある「岩下水」と「銀河泉」の前の流れを伝い、図の中央上部の池に入り、そこから金閣の前に大きく広がる園池「鏡湖池」に水が流れ込んでいる。園池の岸付近には氷が張っている。

- ・石組・景石・敷石・敷砂利

園地の護岸に石組があり、池中には岩島がある。また、龍門瀑の部分にも石組があり、滝壺の中には鯉魚石が描かれている。金閣の正面の池中には金閣の右側面から正面にかけて「夜泊石」があり、その手前には「九山八海石」がある。図の左側にある岬の先には「赤松石」、岬の奥側には「畠山石」がある。

- ・植栽・植生

園池の周りには中景描写の松が多く、「其二」の図の左上には松並木のように遠景描写の松が描かれている。「金閣寺其一」の池岸には遠景の描写の柳が見られる。すべての樹木の上部は白く縁どられ、雪が積もっている描写がされている。

- ・構造物

夕佳亭の前には柵があり、右側には方形の手水鉢が描かれている。安民沢の中島に

は層塔が建っている。「其二」の図の下部の中島の右端には火袋が丸い石燈籠がある。岬には六角型石燈籠があり、春日社の前には鳥居が描かれている。その奥の流れには橋が架かり、奥の園池から鏡湖池への流れにも橋が架けられている。奥の園池の左岸には「橋野三平塔」と書かれた石造物がある。

#### ・建造物

「金閣寺其一」の図の右側に建物がある。上部には夕佳亭とそれに附属した茅葺の建物が描かれている。「其二」の図の右には金閣があり、流れの側には岩下水を覆う茅葺の屋根がある。図の上部には春日社があり、その前方には茅葺の建物が描かれている。

金閣については本文に「露盤に鳳凰を置、上を究竟頂、中を潮音堂、下を法水院といふ（悉く金鉑を以て押、故に金閣の名あり）」と記述があり、構造を知ることができる。

#### ・周辺景観

「其二」の図の左上には雪の積もった山が描かれており、「衣笠山」と書き記されている。よって、本庭園は遠景をとる庭園であること判断できる。

#### ・季節・時間帯・気象

図には雪が積もった様子や池に張った氷によって、冬を表現している。描かれた時間帯は霞 - 2 の描写であることから日中を表している。

気象については人物に注目したい。図には傘をさした人物が描かれており、雪が降っている様子を示している。雪が降っているにもかかわらず、金閣寺を参詣しに来ているのである。鴛鴦の名勝として評価するのであれば雪を降らせる必要はなく、それでも雪の降る様子を描いたのは、雪が降っている日に金閣寺を鑑賞することを秋里が推奨しているからではないかと考える。上述した鴛鴦の名勝である「龍安塔頭大珠院」では雪は積もっているが、屋外にいる人物が傘をさしていないため、雪は降っていないことを表している。よって「龍安塔頭大珠院（中和）」は冬が見頃であり鴛鴦

の名勝としているのに対し、金閣寺は雪見の名勝として描かれている。

- ・人物

「金閣寺其一」の図の右側の建物に僧侶が描かれているが、庭園を鑑賞しているかは不明である。園池の脇には傘を差した人物が歩いており、「其二」の図の金閣の側の庭内には見物に訪れた人物が2人描かれ、これらの人物が傘をさしていることから雪が降っていることが分かる。金閣の一層目には座って鑑賞する人物が描かれ、二層目、三層目には縁に立って鑑賞している。金閣からの庭園を鑑賞することができたようである。

- ・動物

園池に鳥が描かれている。「龍安塔頭大珠院（中和）」に描かれた鴛鴦と同じ描き方であるため、金閣寺「其二」に描かれている鳥も鴛鴦だと判断でき、冬を表現していることが分かる。

- ・詩歌

詩歌なし。

### (3) 雨の情景を描く「妙心塔頭靈雲院（中和）」

雨の情景を描く図に「妙心塔頭靈雲院」（図48）がある。この図には1931年に国の史跡・名勝に指定された、妙心寺の塔頭靈雲院にある靈雲院庭園が描かれている。

図には建物の周りに庭園が造られている姿が描かれており、石組や刈込が見られる。さらに、雨の降る情景を描き、室内の人物が庭園にいる蛙を見ている姿が描かれている。

本文の妙心寺の項には沿革や伽藍建築について、十境、什宝、虫干し図、塔頭についての記述がある。その中で靈雲院は沿革や庭園、什宝、建築について記述されている。庭園については「この林泉は相国寺の是庵作りしといふ」とのみ記述されており、図に描かれている庭園が是庵という人物によって作られたことが分かる。これは挿図中にも記されている。

- ・地割

建物脇の狭い敷地にかぎ型に造られた枯山水である。

- ・水系

描写なし。

- ・石組・景石・敷石・敷砂利

建物で遮られて見えにくいですが、図の中央に枯滝石組があり、図の右手に石組がほどこされている。第2章 第1節 第1項に述べたように、現況と比較すると滝石組の左側が図と異なっているが、右側の石組はよく似ている。

- ・植栽・植生

枯滝石組の背後に近景描写で描かれた楓があり、右側の景石部分には刈込が植えられている。刈込には花が咲いており、雨が降る様子からも夏であることがうかがえ、サツキやツツジであることが分かる。枯滝石組の付近には地被類が描かれ、その他の石組の周りにも点描があり、枯滝石組箇所の地被類と別種の地被類が描かれている。

- ・構造物

描写なし。

- ・建造物

図の左側に建物が描かれている。屋根は檜皮・柿葺-3の描写で描かれている。

- ・周辺景観

庭園の背景が描写されていないことから、庭造の法則ある庭園と分かる。

- ・季節・時間帯・気象

サツキが咲いていることから夏であることが分かる。時間帯を示す霞が描かれておらず、描かれた時間帯は不明である。そして、斜線で雨が描かれていることから、雨が降っている様子を描いている。雨が降り、サツキが咲き、蛙を描くことでこの庭園の見頃を夏としていることが分かる。

- ・人物

図には室内に 2 人の人物が描かれており、縁に座って庭園を鑑賞している。人物らの視線は庭の蛙に向いており、読者の視線を誘導し、そこに蛙がいることに気付かせる働きがある。

- ・ 動物

庭内に蛙が 2 匹描かれており、季節を強調する働きを持つ。

- ・ 詩歌

図の左上に「遠里時雨 夕日さす雲間の峰は雪見てしぐれにくるる山本の里 慈延」と書かれている。雨の情景に合わせて選ばれた詩歌であることが分かる。

## 第 2 節 人物・風景の演出が特徴的な林泉図

### 第 1 項 人物による鑑賞方法が特徴的な林泉図

#### (1) 庭内を散策して鑑賞する「等持院（中和）」

本図は等持院の庭園を描いた図（図 281）であり、現在も同院に庭園があり、京都市の名勝に指定されている。図には園池が広がり、背後の築山には茶室が建てられ、人物らが庭内を散策する様子が描かれている。

等持院について本文には夢窓国師を開山とし、天龍寺十刹の内の一つであるとしている。また本庭については「林泉に芙蓉池ありて風色優雅なり」と評しており、園池が芙蓉池と呼ばれていたことが分かる。さらに、挿図内には「夢窓国師作りたまふ」と記し、本庭を夢窓国師の作庭によるものとしている。

- ・ 地割

建物前には大きな園池が広がり、園池には大きな中島が設けられている。園池の背後は築山となり、図の左上には茶室が建てられている。園池の周りに飛石が打たれており、回遊できるようになっている。

- ・ 水系

園池は本文中から芙蓉池と呼ばれていると分かる。芙蓉池の建物前は出島となり、



中央に中島がある。園池の右側は入り組んだ護岸となっている。水面の描写は水流の表現はなく、穏やかな水面が描かれている。

- ・ 石組・景石・敷石・敷砂利

芙蓉池の護岸は護岸石組がほどこされ、建物前の護岸には景石が多く据えられている。そして、図の中央右の築山に多くの石組は枯滝石組のように見える。園池の外周には園路があり、飛石が打たれている。途中、築山に登る石段に変わり、築山上でまた飛石になり、庭園を回遊できるようになっている。建物前は白砂敷の描写がされている。

- ・ 植栽・植生

庭園全体で松が多く、築山上には他の樹木も多くみられる。特に中島と枯滝石組の横には枝ぶりの立派な松が描かれ、園池に枝を伸ばしている。中島や築山上には刈込も見られ、図左の園路脇には四角く刈込がされている。園池護岸の外周や築山などには地被類が見られる。図の左、池中の護岸付近には燕子花が見られる。

- ・ 構造物

島には橋が3方から架かっており、出島から島に架かる橋と出島から築山へ架かる橋は切石の反り橋であり、図の右側の護岸から中島へ架かる橋は自然石の橋である。現況では、自然石の石橋が1本架かっているのみである（図 282）。

茶室の側には四角型石燈籠と手水鉢が描かれている。左下の建物の縁先には縁先手水鉢がある。中島の右側の松とその右にある松は支柱で支えられている。

- ・ 建築物

図の左下の建物と、図の左上に茶室がある。茶室は「義政公好清連亭」と書き記されており、茅葺屋根の茶室である。

- ・ 周辺景観

茶室の背後に「衣笠山」が描かれている。この事から遠景をとる庭園であることが分かる。

・季節・時間帯・気象

園池に燕子花が描かれていることから、この挿図からは夏と秋を読み取ることができる。夏の晴れた日中の様子が描かれている。

・人物

挿図には 7 人の人物が描かれており、室内には座敷から庭園を眺める姿が描かれ、室内から鑑賞する庭園であることが分かる。しかし庭内にも人物が描かれ、飛石の上や橋の上にいることから散策を楽しむ庭園であることも示されている。また、建物前にいる人物は島を眺め、中島の右側の人物も中島に行こうとしているため、中島が見どころの一つであることが分かる。

・動物

描写なし。

・詩歌

図の左上に漢詩が書かれている。

(2) 定点鑑賞を示唆する「大徳寺塔頭芳春院（中和）」

本図（図 14）は大徳寺の塔頭である芳春院の庭園を描いたものである。画面左中央に呑湖閣を配し、昭堂に至る廊橋打月橋が架けられている。図の手前に広がる庭池には島があり、欄干付きの反り橋が 2 つ架けられている。画面中央右には枯滝が描かれており、その奥に大きな築山には園路が設けられていることが分かる。図の左下には本堂の屋根が描かれており、本堂と庭園の間には 2 人の男性が描かれており、庭園を鑑賞している様子がうかがえる。本文において芳春院は大徳寺の項中に

○（北）芳春院〔直指心源禪師玉室和尚塔所。慶長年中加州金沢城主中納言前田肥前守利長の母華岩夫人造立、此夫人加州大納言利家卿ノ室土方掃部助ノ女、元和三年七月十六日逝ス、号ス芳春院華岩宗富ト。又後陽成院第七皇子一条関白昭長公（法号慧観）為当院檀越ト〕  
呑湖閣〔横井氏田屋等造る〕又有<sub>二</sub>飽雲亭打月橋<sub>一</sub>。

客殿中ノ間 薄彩色祖師図 深幽筆

礼ノ間 墨画獅子牡丹 同筆

檀那ノ間 薄彩色四愛堂図 同筆

衣鉢ノ間 墨画山水 同筆

大書院 薄彩色花鳥 同筆

小書院 墨画山水 同筆

とあり、庭園に関して記述されておらず、挿図内にも説明文は記されていない。

#### ・地割

芳春院は東部に方丈、南部には書院、西部には呑湖閣が配されており、これらの建築の間に池がある。池には中島が設けられており、2本の橋が架けられている。さらに書院と呑湖閣をつなぐ打月橋という橋廊がある。池の北側は築山状となっており、野筋が見られる。中島の形状は図では東西に長いが、現況では南北に長く、差異が認められる。これは火災や明治初年の書院新築などによって改変があったと考えられ、図の正確性は不明である。参考までに、図 283 に現代の平面図を示す。

#### ・水系

図では池の護岸は入り組んでおり、画面奥から手前に広がり、左方向に池が広がった北から西へ折れた形となっている。しかし現況では、北岸は緩やかな護岸を形成しているのみで、ほかは直線の護岸となっている。これは火災や明治初年の書院新築などによって改変されたものであろう。

#### ・石組・景石・敷石・敷砂利・敷砂

築山の中腹に瀧石組が見られる。池の護岸は土留めと石組によって形成され、中島の南側や呑湖閣前には立石がみられ、景石として配置されている様子がうかがえる。

#### ・植栽・植生

高木が多く植えられており、特徴的なのは池の北岸に楓が植えられ、庭園北辺にのみ松が植えられている。

・ 構造物

中島に石灯籠があり、六角型の燈籠である。また中島には木製の欄干付き反り橋が2本架かっているが、中島から池北岸に架かる橋には橋脚が見られ、方丈から中島に架かる橋より中島から池の北岸に架かる橋の方が高く、勾配も急になっている。欄干の意匠はともに同じ作りになっている。現在、方丈側は切石の反り橋に、呑湖閣側はコンクリート橋に架け替えられている。

・ 建造物

芳春院は『都林泉名勝図会』が板行される3年前の寛政8年(1776)に焼失しており、2年後の同10年(1798)に諸堂が再建されるが、呑湖閣は文化13年(1816)に再建されている。このことについて飛田範夫は『都林泉名勝図会』の図は『築山庭造伝』と見た角度が似ていることから、火災後に『築山庭造伝』を模写あるいは焼失前に『築山庭造伝』を参考にしながら現地でスケッチしたのではないかと推測している<sup>48</sup>。さらに吉川需は現在の呑湖閣と『都林泉名勝図会』を比較すると、現在の呑湖閣の外形意匠上異同が認められるとし、再建の際に相当後補されたのではないかと推量している<sup>49</sup>。以上のことから、2つの仮説が立てられる。一つは飛田が述べるように、火災によって実物を見て描けず、『築山庭造伝』を見て描いたために似た図になったということ。二つめに『築山庭造伝』を参考にしつつも、庭園の細部にわたる描写が『都林泉名勝図会』の方が優れていることから現地を見ながらスケッチしたことが考えられる。これらについては両図の比較を行い、検討する。

『築山庭造伝』に描かれた呑湖閣(図284)は、1層目の壁面には花燈窓があり、床は格子状に描かれ、石敷のような描写がされている。2層目の壁面は花燈窓が両端にあり、中央部は閉じているのか上下に横線があり、その間に縦線で2分されている。また、欄干が描かれている。屋根には横向きの短線でも用が描かれ、頂には宝珠が載せられている。基壇部分の側面は長方形に2分された模様が描かれている。一方、『都林泉名勝図会』に描かれた呑湖閣は1層目、2層目の描写が酷似しており、欄干の形

状も同じである。異なる点は屋根に模様が描かれていないこと、基壇の側面の模様が長方形をずらして積んだ模様となっている。その外、園池の形状、景石の位置や形、築山に設けられた園路、呑湖閣の右側に楓が描かれている、打月橋の形状などが酷似している。『築山庭造伝』の板行から64年が経過していることを考慮すると、庭園の姿が変化している可能性も考えられる。よって、『都林泉名勝図会』は『築山庭造伝』を参考に描かれたことが指摘できる。ただし、『築山庭造伝』に描かれていない石組の背後の築山が『都林泉名勝図会』に描かれていることから、飛驒の指摘通り、現地を見ていると考えられる。

現在、昭堂（呑湖閣）と打月橋は京都府の指定文化財となっている。

- ・ 周辺景観

背景は描かれておらず、庭園外の風景は省略されていることから、「庭造の法則ある」庭園であることが分かる。

- ・ 季節・時間帯・気象

本図では特に天候や時間帯を示す表現はされていない。季節については、島と呑湖閣をつなぐ橋のたもとに楓が描かれていることから秋を思わせる。しかし、楓は1本しか描かれていないことから、特に紅葉の名所であることは感じられない。

- ・ 人物

本堂と庭園の間には2人の男性が描かれており、庭園を鑑賞している様子が見える。人物の位置から鑑賞位置が示され、池と呑湖閣を含めた景色が本庭園でのビューポイントであることが分かる。

- ・ 動物

描写なし。

- ・ 詩歌

詩歌なし。

### (3) 見どころを示す「本法寺（草偃）」

本図（図 269）では本法寺庭園を描いた図であり、本庭園は 1986 年に国の名勝に登録されている。図の手前には書院の縁先が描かれており、沓脱石や縁先手水があり、描かれていないがその手前には方丈が建っている。さらに 8 個の葛石で形成された蓮池があり、奥には石組や築山が描かれている。図の左方には枯滝石組があり、右方の築山と共に画面の中心となっている。本文において本法寺の項には庭園に関する記述として

林泉は光悦の作にして、世に三巴の庭と賞す。その形築山泉石ともに浪の紋を摸す

とあり、本法寺の項の中で最初に述べられているほど注目度が高いことがうかがえる。そのほか什宝について記述するのみであり、寺の由緒などは記述されていない。

本法寺は天明の大火で類焼しているが、そのことについても本文中に記載はなく、飛田は「焼失後 10 年あまりでこれだけ落ち着いた庭ができるものであろうか。本文中に火災のことが記されていないのは、かなり以前にこの第 1 巻を著述したからではなかろうか」と指摘している<sup>50</sup>。しかし、同じく巻之一に取り上げられている相国寺と東本願寺の項に天明の大火についての記述があることから<sup>51</sup>、天明の大火後に著述されたものであることは確かである。

そして重森完途は秋里の著述を指して「集団石組そのものを巴の形と見ているからであって、本庭は集団石組そのものは巴の形ではないから、これは明らかに秋里籬島軒の誤りである（中略）強いていえば、波の紋を模したというのは、滝石組に用いられている青石が縞石を用いて滝の水を表現しているところから、その落水表現にまで発展して、枯山水であるが、落下した形而上的に考えた水の紋が巴の形になるとしたものであろうか」と指摘している<sup>52</sup>。これについて、秋里は「共に」という言葉を付けていることから築山と石組の両方を指していると考えられ、巴形の築山と枯滝石組の石の紋様が共に浪を表すものであるとする、秋里の解釈である。

・地割

本図に描かれた庭園は方丈の南に面しており、かぎ状に東に折れた地割となっている。巴型の築山が東、南、東南の3箇所があり、東南にある築山には枯滝石組が配され、その前には石橋が架けられている。図ではほとんどの石組がこの東南の築山に集中しており、そのほか燈籠や層塔も見られる。南の築山は刈込が目立つ。庭園の中央には切石で囲まれた蓮池がある。図には方丈は描かれていないが、南面する縁先空間が描かれており、沓脱石や縁先手水鉢、傍には井戸枠も描かれている。

この挿図では実際の庭園の大きさと比べると図の人物が小さく描かれている。これは一見、誇張表現のように見えるが当時は庭園の東北隅にある宝蔵はなく、さらに方丈南側の縁先が現在より北にあったため、庭園の大きさも現在より大きかった。よって、現在感じる庭園の大きさとは異なり、図は当時の庭園の大きさを表現したものであることから、実態を示していると考えられる。人物の大きさについては凡例に庭園の広さを知る指標としていることが述べられており、人物が庭園の広さを知る手掛かりとなっていることが分かる。方丈の変遷については、建造物の項で後述する。

#### ・水系

本図の手前に8石の切石で囲まれた蓮池があり、蓮の葉が茂っている。この池は現在、やや姿を変えて現存している。明治44年(1911)に刊行された『日本名園図譜』では切石の片端をずらした渦巻き状の八角形であるが(図285)、昭和11年(1936)に実測された重森の平面図(図286)では10個の切石で形成された特異な十角形となっており、現在もこの形である(図287)。半円形を組み合わせた円形の石と同じく、飛田は1911年から1936年の間に改修されたものとみているが『都林泉名勝図会』と『日本名園図譜』を比較すると、『都林泉名勝図会』では切石の両端をそろえているが『日本名園図譜』では片端をずらしており、若干の違いがある。そのため、1799年から1911年の間の第1次の改修と1911年から1936年の間の第2次の改修と、2段階の改変があった可能性が指摘できる。しかし『都林泉名勝図会』が実景をそのまま描写しているとも限らないので、定かではない。

- ・ 石組・景石・敷石・敷砂利・敷砂

上述のとおり石組は東南の築山に集中しており、築山の形に沿って護岸石のように配置され、その奥に枯滝石組がある。枯滝石組は中央の石が倒されており、現在でも挿図と同じ姿を見ることができる。現況では東の築山に五右衛門腰掛石と呼ばれる景石があるが図には描かれておらず、挿図では名のある景石は図内に書き示すため、当時はまだ名がつけられていなかった、もしくは秋里が見どころとは考えていなかったことが分かる。しかし東の築山部分は背後に倉庫が建てられたためか、現状と比較して燈籠の位置や石組に差異が見られるため、改変された可能性もある。さらに現況では蓮池の北側に半円形の石を 2 つ組み合わせて円形にした石が据えられているが、図では確認できない。これについて飛田は『日本名園図譜』（1911）の平面図（図 285）にはこの石はなく、『日本庭園史大系』（1936）の平面図（図 286）には見られることから、1911 年から 1936 年の間に改修されたものとしている<sup>53</sup>。

- ・ 植栽・植生

大きな樹木は庭園を囲むようにあり、図で目立つのは築山にある刈込だろう。東南と南の築山に多くあり、庭石の粗っぽさと刈込の球体との対比が面白い。また築山には芝の様な地被類が描かれており、庭の中央部分には描かれていないことから、現在の様に前面が苔に覆われた庭ではなかったようである。現在は楓が植えられており、紅葉が楽しめる庭になっている。

- ・ 構造物

それぞれの築山に 1 基ずつ石燈籠が置かれており、また東南の築山には層塔と切石の橋が架けられている。東南の築山に描かれている石燈籠は四角型であり、現在のものは六角型であるが、据えられている位置は同じである。南の築山に据えられた燈籠も同じく四角型であるが現在は同位置に型の違う燈籠が据えられている。東の築山の燈籠も同様に四角型であるが、現在は築山の更に北側に六角型燈籠が据えられている。



縁先には蓮華を象った手水鉢が置かれており、その側には井筒と石塔がある。しかし現況では渡廊下が増築されたため南庭が分断され、渡廊の西側に図に描かれている物と似た手水鉢が据えられている。

東南の築山には切橋が架けられているが、現況では自然石である。

#### ・建造物

図には描かれていないが、縁先手水鉢や沓脱石があることからその手前に建物があることがうかがえる。現在は方丈が建っているが、挿図と現在の庭園を比較すると縁先の位置が異なる。挿図では、蓮池のすぐ手前に縁先が描かれている。現在は蓮池を越した位置に縁先がある。また、挿図に描かれるような庭園の景色を見るためには、書院の中から鑑賞する必要がある。しかし現在の方丈から見ると南側の縁先が庭園を隠してしまう。そのため方丈の南縁は現在より、北に位置していたと思われる。現在の方丈は天明の大火での焼失後、文政 12 年（1829）に紀州家の寄進によって建てられ、翌年完成した建物である。そのときに縁先が、再建される以前より南へ張り出したと思われる。

#### ・周辺景観

庭園の背景は空白であり、庭園外の風景は描かれていないことから、「庭造の法則ある」庭園であるとしている。

#### ・季節・時間帯・気象

本図では特に天候や時間帯を示す表現はされていない。季節については、池の蓮の葉が茂っていることから、夏とみることができる。

#### ・人物

図には枯滝石組の前に僧形の人物と刀を持った人物が描かれている。また縁先に僧形の人物が 1 人と、計 3 人の人物が描かれている。石組の前に立つ 2 人は庭に下りて枯滝石組の前に立ち、石組に注目しているようである。さらに 2 人とも、石組を指さして話をしていることから、秋里は枯滝石組をこの庭園のひとつの見どころとし

で紹介していることが分かる。現在とは異なり、庭園内に入り込んで鑑賞することができたのだろう。

- ・動物

描写なし。

- ・詩歌

挿図内には「すずしさや水はなくとも波の紋」と雨龍の歌が記載されている。作者については不明であるが、枯山水であるため庭園に水は使用されていないにもかかわらず、巴が他の築山や石の紋様に波の紋を見ることができ、涼しさを感じることができるとする歌であるが、これは秋里が本文中で本庭園を説明する「築山泉石共に浪の紋を摸す」という文章に呼応するものである。この歌と秋里の本文について重森完途は「籬島軒と共に、文学的解釈にすぎるといわねばならない」と述べているが、そこが秋里のオリジナリティーである。俳諧師であった秋里が庭園に対して文学的解釈を織り交ぜて、庭園を紹介すること『都林泉名勝図会』の特徴のひとつであり、秋里の庭園に対する考え方を垣間見ることができる。

## 第2項 庭園の背景描写に特徴がある林泉図

### (1) 庭造の法則ある「西六條本願寺對面所林泉（中和）」

本図（図31）は西本願寺書院の東側にある本願寺大書院庭園が描かれており、本庭は国の特別名勝、史跡に指定され、虎溪の庭とも呼ばれている。

本文内において「本願寺」の項では七夕の花籠と盆燈炉という二つの行事についての記述のみであり、これらについては「西六條本願寺對面所 七夕簞花」と「同本願寺御堂盆燈爐」と題する図にその様子が描かれている。しかし本庭に関する記述はなく、また図中にも説明は記されていない。西本願寺については『都名所図会』において来歴や建築、什宝について述べられており、庭園については滴翠園の記述があるが書院庭園についての記述はない。

- ・地割

対面所に面した庭園は敷地いっぱいに広がる枯池に島が二つあり、図左辺から切石の反り橋でつながっている。さらに図中央やや左に枯滝石組があり、石組の前には自然石の橋が架かっている。庭園の奥部は松などの高木や刈込が植えられている。

- ・水系

描写なし。

- ・石組・景石・敷石・敷砂利・敷砂

大きな景石が多く、図の中央には枯滝石組があるが、松に隠れて目立たない。現在では亀島と呼ばれている図中央の島の右側に島から突き出た景石があるが、現状の亀島の表現はよく似ている。島や護岸付近の枯池底には玉石が敷かれている。

- ・植栽・植生

図の左に枯池へ伸びる松が描かれており、近景の松の表現が使用されている。その左後ろや庭園の奥には中景の描写の松が描かれている。中島や護岸には蘇鉄が植えられ、図の中でも目立って見える。また、その背後にある丸や四角の刈込も特徴的である。

- ・構造物

枯池にある、図中央部の二つの島に架かる切石の石橋が2本あり、さらにその奥の枯滝石組の前に自然石の橋が架かっている。現在は図と同様に島に切石の橋が2本架かっているが、枯滝の前に描かれている自然石の橋は見られず、また現在は南の中島から東南の対岸へ自然石の橋が架かっているが、図では島に植えられている蘇鉄の陰となっており、確認できない。

- ・建造物

図手前に「対面所」と書き示された建物が描かれている。対面所は庭園に対してやや斜めに面して描かれ、やや傾いているように描かれているが、庭園が良く見えるよう建物の位置を操作したか。

- ・ 周辺景観

庭外の風景は描かれておらず、空白である。現在は本庭から御影堂を望むことができるが本図では描かれておらず、これにより「庭造の法則ある」庭園であると秋里が捉えていたことが分かる。

- ・ 季節・時間帯・気象

本図では天候や時間帯を示す表現はされていない。季節について、桜が描かれているが強調する表現は見られないことから、見ごろは設定されていないと考える。

- ・ 人物

本図手前に 2 人の人物が描かれている。人物が軒内を歩いており、庭内に人物が描かれていないことから回遊する庭園ではないとしていることが分かる。

- ・ 動物

描写なし。

- ・ 詩歌

なし。

## (2) 風景を専らとする「拇尾高山寺三尊院（中和）」

本図（図 288）は高山寺の塔頭三尊院の庭園が描かれているが、庭園は小さく左上に描かれており、崖下の風景が大きく描かれている。三尊院は現存していない。

本文の拇尾高山寺の項において、はじめに「拇尾高山寺の林泉は三雄のその一なり」とある。高山寺内のどの庭園を指すかは定かではないが、高雄・楨尾・拇尾を指す三雄の中で最も優れた庭園があるという。

- ・ 地割

崖上にある簡素な平庭であり、眼下には溪谷が広がっている。庭園は建物に面しており、眺望を活かすために視界を遮る物が置かれていない。図左側の建物前には小さな段差がある。

- ・ 水系

描写なし。

- ・ 石組・景石・敷石・敷砂利

石組や景石はない。図の左上の建物前に段差があり、その段上は玉石が敷かれて、その中に飛石が打たれている。

- ・ 植栽・植生

庭内には建物前に楓があり、そのほかは刈込や生垣がある程度と、植栽は少ない。石垣の下にも刈込が見られる。

- ・ 構造物

建物前に沓脱石が2箇所があり、それぞれに二番石も据えられている。

- ・ 建造物

茅葺屋根の建物が図の左上に描かれている。その右側の建物の屋根の頂には宝珠が乗っている。

- ・ 周辺景観

遠くには山並みが描かれ、その山中に「天狗岩」と書き記されているが、どれを指しているかは不明である。図の右側の山中には「石雲庵」「一瀧村」が書き記され、建築が描かれている。庭園の眼下には溪谷が広がり、楓が多くある。溪底には「深瀬」と記された川が流れ、橋が架かっている。その側には「稻荷社」がある。谷には「けさかけ松」や「文殊石」「ゑほし石」などがある。

庭内より、そこからの眺望である溪谷の中に見どころを配置し、眺望の描写に力を入れている。よって、この図は凡例で示された「法則庵なる」庭園であり、「風景を専」らに描かれている。「法則庵なる」庭園は悪評とも取れる言葉であるが、庭園を主題とする名所図会で取り上げているため、本当に評価に値しない庭園であるはずがなく、挿図中には風景を眺める人が描かれ、その風景の中には見どころを伝えるために名称を書き示している。よって、「法則庵なる」庭園を否定しているわけではなく、眺望を楽しむための庭園であることを評価していると考えられる。

・ 季節・時間帯・気象

庭内にある楓や溪谷に楓が多く描かれていることから、秋の情景を描いている。

・ 人物

庭中には眺望を楽しむ人物らが描かれている。また溪谷には橋を渡る人物が描かれ、散策できたことが分かる。このことから、眺望を楽しむ庭園であることが分かる。

・ 動物

描写なし。

・ 詩歌

図の上部 2 箇所には詩歌が記されており、どちらも庭内からの眺望である溪の紅葉の情景や紅葉と川の情景を詠んだ詩歌であり、名勝の特徴をとらえた詩歌である。

(3) 遠景をとる庭園「東林院其貳南谷師書齋幻華庵（草偃）」

本図は大通寺の塔頭である東林院を描いた図である（図 289）。図題に「南谷師書齋幻華庵」とあることから、これがこの庭園の見所であったことが分かる。

本文は遍照心院の項において、沿革や持仏、建物や塔頭について述べられており、塔頭のひとつとして東林院が挙げられている。その記述をいかに記す。

林泉広くして東南をうけて、月に雪に美観たらずといふことなし。この院

は書聖南谷師の住居にして、庭中の西に書齋あり

庭園は広く、月の風景や雪の景色を評価している。そして挿図の図題にもあった、南谷師の住居であり、この庭園の西に書齋があることが記されている。

また、図にも庭園について記載が見られる。

庭中の遠望は伏見城より三ッ峰月輪山を次第次第に北へめぐり、洛東鮮や

かに見へて西北は衣笠山大内山御室まで見へわたる

この文章から庭園は遠景をとる庭であることが分かり、伏見城や月輪山などが見渡せ、京都の東の風景を見ることができたという。また西北は衣笠山、大内山、御室まで見えていたことが分かる。

- ・地割

平坦な敷地に横長の池が掘られている。庭園からは景色を望むことができ、記述から京都の東が見えるとしていることから、東向きの庭園であることが分かる。

- ・水系

左右に長い池があり、図の左には給水か排水かは不明だが柵が設けられており、給排水施設があることが分かる。園池はゆるくカーブを描いた形をしており、水面には水流表現が見られず、流れの少ない穏やかな園池であることが分かる。

- ・石組・景石・敷石・敷砂利

護岸には角形の石が多用されており、給排水施設の付近には護岸石組が描かれている。図の中央下部には園地へ出島上に飛び出した地形があり、そこに飛び石が数石打たれている。

- ・植栽・植生

池には蓮や燕子花が植えられており、燕子花は花が咲いている。蓮は近景表現が用いられており、蓮の葉脈や葉の形が良く分かる。遠池の手前の護岸には地被類が池の岸に沿って生えているが、対岸には全く生えておらず、石組を強調しているように見える。そのほか、庭園の周囲には中景描写の松、池の右側には梅、図の右にある建物付近には棕櫚が植えられており、庭園の奥には大きな刈り込みで外周を造っている。また、図の中央下部、やや左には遠地に張り出し、先が細くなった形に刈り込まれた刈込が目を引き。

- ・構造物

池には橋が2本架かり、右側には切石製の八橋、左側には木橋が架かる。図の右手前には石塔、中央やや右には五輪塔が描かれている。図の左下には手水鉢が描かれている。

- ・建造物

図の右部に建物が描かれている。南谷国師の書斎は図左辺「南谷書斎」と文字で書

き記されており、茅葺らしき屋根が樹木の隙間から見えている。

#### ・周辺景観

景色の手前部分には田畑が描かれており、その向こうには家の屋根や山並みが描かれている。図内の記述から南は伏見城山まで見え、東は月輪山などの洛東、西は衣笠山、大内山、御室まで見る事ができたという。しかし、それらの山は書き記されていない。遠景をとる庭園は次の「大徳寺方丈（中和）」で見られるように、眺望に面した箇所には高木を少なくし、開けた空間を取ることが多い。この庭園では眺望に面した場所には等間隔に背の高い松が植えられており、景観の妨げのようにも感じられる。よって、文章で示すのみとし、図中に記すことを控えたのか。図に山並みや家の屋根、田畑が描かれていることから遠景をとる庭園であることが分かる。

#### ・季節・時間帯・気象

蓮や燕子花が描かれていることから夏が、また池の右側には梅が描かれていることから春を読み取ることが可能である。本文には「月や雪に美観足らずといふことなし」とあることから、この庭園は四季それぞれに楽しめる庭園であることがうかがえる。

#### ・人物

本図には5人の人物が描かれており、庭の奥にいる人物が広げた扇子を掲げ、その扇子から糸が繋がり、対岸でその糸を持った人物が描かれている。扇子を凧のかわりにして遊んでいるかのような様子が描かれている。遊ぶ男性たちの側には、それを喜ぶ子供の姿が描かれており、楽しげな様子が伝わってくる。その脇には、僧侶が声をかけている姿が描かれており、迷惑そうにしているとも取れる動きで描かれている。このようなことができたかは分からないが、比較的自由的な庭園であると感じることができ、人物表現に遊びが入れられている。人物の遊ぶ姿から、庭園の機能を戸外活動とした。このように、庭内で遊ぶ姿が描かれる図は数例見られる。

#### ・動物

園池に魚が泳いでいる様子が描かれている。



## ・ 詩歌

図の上部に秋里自作の詩歌が記されている。「谷師の旧棲と聞て 庭にまで筆威の  
こるやなめくじり 籬島」とあり、この名勝が谷師の住まいであったことから、名勝  
から連想して詠まれている。詩歌は、庭にあったなめくじの這った跡を筆跡に見立て  
て詠んだ歌であり、この歌からもこの庭園のユニークさを表現しているように思われ  
る。

### (4) 遠景に演出が加えられている庭園「大徳寺方丈（中和）」

本図(図 15)は大徳寺方丈庭園を描いたものである。図の手前に方丈の屋根を配し、  
画面中央に大きく庭園が描かれている。庭園の外には田畑が広がり、農耕を行う民の  
姿が細かく描写されている。その背後には山並みが描かれており、庭中の木々の間  
には比叡山の雄大な姿が見てとれる。庭園内に注目すると、画面中央に枯滝石組が描か  
れ、その背後には刈り込まれた樹木が植えられている。枯滝石組の両脇には塀と生垣  
に沿って石組が配されており、要所に松などの樹木が植えられている。地面には白砂  
が敷かれていることが、石組との境が描かれていることから推測できる。また図の右  
寄りには明智門が描かれている。そして庭中には 3 人の人物が描かれており、僧侶が  
2 人の男性に何かを指して説明する様子が窺える。本文では大徳寺は由来や各建築、  
什宝の虫干しの様子、各塔頭などについて明記しており、そのうち方丈については

○方丈〔初め玄恵法印建る。応仁兵火の後泉南の宗臨及び寿源等方丈厨を  
建る。寛水十三年京師後藤縫殿益勝方丈の狭陋なるをもつて新に大方丈を  
造る、於是古方丈を移して庫院とす、方丈の額張即之筆〕

とあり、方丈の建物について説明するのみであり庭園について記述されていない。挿  
図中には「天祐和尚作」書き込まれ、作庭者について明記するのみである。

## ・ 地割

南側は塀によって、東側は生垣によって囲まれた、南から東へ折れる矩形の地割で  
ある。現在は南庭と東庭に分けられ、その境には葛石が敷かれており、これは昭和 11

年（1936）の重森による平面図<sup>54</sup>（図 270）ではすでに見られる。現況と挿図の差異については飛田範夫が、図と比較して方丈の東側が広く見えるが、方丈がその後改修されていないことを理由に図では誇張されていることを指摘していることは、すでに第 2 章 第 3 節 第 3 項に述べた。また、南庭と東庭の境目に葛石が置かれていないことや、比叡山が都市化のために見えなくなっていることも指摘している。

#### ・水系

図には水系は見られず、本庭園は枯山水様式である。

#### ・石組・景石・敷石・敷砂利・敷砂

昭和 30 年（1955）に修理された際、中根金作は挿図と現況があまりにもぴったりと一致することに驚いている<sup>55</sup>。南東隅に石組があり、それぞれ西と東に塀や生垣に沿って石組が延びている。図には画面中央に南東隅の石組が描かれており、ひととき存在感を放っている。現在は石組後ろの椿の刈り込みが繁茂し石組が埋もれており、図のような存在感を感じられない。明治 16 年（1883）頃に明智門を金地院に譲渡し、その跡に山内の唐門を移築した際、元あった明智門より 2 倍近い大きさがあったために門の西側にあった石組の内の 1 石を取り外していることを指摘し、その所在は不明としている<sup>56</sup>。

東庭の石組は七五三石組または十六羅漢石組とも言われるが、東側に広がる田園風景や遠く見える比叡山の景色を効果的に見せるためか、生垣に沿うように小振りの石が配されている<sup>57</sup>。

本庭園の作庭者については諸説あるが、本史料では天祐和尚としている。石の組み方が異なるため南庭と東庭では作者が違うとする説もあるが、中根は共に一貫したひとりの作者によるものであり、第二者が新しく作った形跡はないことを指摘している。寺伝では南庭を天祐和尚、東庭を小堀遠州としている。

#### ・植栽・植生

石組の背後に根締めとして低木が植えられており、多くのものが刈込まれている。

境外の風景を遮断しないためか、庭内には高木を多く植えず、大きく空間を開けて要所に配置している様子がうかがえる。滝石組の右側に梅が配されている。

- ・ 構造物

描写なし。

- ・ 建造物

画面手前に方丈の屋根。明智門と塀。図に描かれている明智門は明治 16 年 (1883) 頃に金地院に譲渡されており、そのあとには大徳寺山内にあった勅使門が移築されたものである。

- ・ 周辺景観

庭園の東側には農村の風景が広がり、作業をする人物や牛か馬か判別はできないが農作業用と見られる動物が描かれている。よって、遠景をとる庭園であると分かる。その奥には山並みが描かれ、「達磨峰」と「比叡」の文字が書き込まれている。達磨峰とは本文中には

○達磨峰〔未<sup>タレ</sup>詳<sup>ニ</sup>何<sup>ケ</sup>峯<sup>ト云コトヲ</sup>、或<sup>カ</sup>云指<sup>スニ</sup>比叡山<sup>ヲ</sup>、是風景にして当境にあらざるなり。然<sup>トモ</sup>以<sup>ニ</sup>心境相對<sup>ヲ</sup>論<sup>スレ</sup>之。右雲門菴已下の十名は大徳寺の十境とす〕

と述べられ、どの峰を指すかは明らかではないが、比叡山を指すものであると推測している。達磨峰の項目以前は「雲門菴」、「起龍軒」、「金剛軒」、「看雲亭」、「明月橋」、「官池」、「梅橋」、「古巖松」、「瑞雲亭」を記しており、これらが大徳寺の十境として紹介している。現在比叡山を見ることはできないが、南東の滝石組の背後に大文字山を見ることができる。しかし図の比叡山の位置を地図に当てはめると、本来大文字山が見えている位置に比叡山が描かれている。

- ・ 季節・時間帯・気象

本図では特に天候や時間帯を示す表現はされていない。そして枯滝石組の右側に小さな梅が描かれており、その枝に花が見られることから春を表していることが分かる。

ただしすべての挿図に季節が割り当てられているわけではなく、この図に描かれている木々が葉ばかりのため季節を強調しているとは考えにくく、梅はその植物の特徴を示す役割にとどめている可能性が高い。

・人物

この図で注目したいのは、この人物が何を見ているかである。3人は庭園の外を見ており、僧は扇子で何かを指している。さらに図中には比叡山と達磨峰が描かれており、庭園からその景色が見えることが分かる。庭中の外に注目するのであれば比叡山の方向を向いているのが自然であるが、人物は図中の比叡山がある方向を見ずに東を向いている。図中では比叡山が庭中から見て東南の方向に描かれているが、本来の位置は東である。この矛盾を解消するために人物を比叡山が本来ある方向に向けさせたのではないか。実際に読者が本庭園を訪れた際に、挿図が実際の景色と異なっていたとしても人物を頼りに庭園を鑑賞すると比叡山を望むことができる、という工夫がなされている。

・動物

描写なし。

・詩歌

詩歌なし。

### 第3節 現状との比較において特徴的な林泉図

#### 第1項 修理・復元された庭園

##### (1) 挿図をもとに修理された「不二菴遺愛石（中和）」

本図（図8）は東福寺の塔頭である霊雲院庭園を描いた林泉図である。霊雲院は不二菴とも呼ばれ、挿図では不二菴と示されている。現在、同塔頭に庭園があり、昭和45年（1970）に重森三玲によって修復された。その際、本庭に続く南側の庭園が同氏によって作庭されている。

本図は遺愛石を中心とした枯山水が描かれており、人物たちも遺愛石に注目している様子が描かれている。本文中には東福寺の項で沿革や建築、什宝、塔頭などが記述される中で、塔頭の一つとして霊雲院が挙げられており、その記述を見ると、4丁分にわたって遺愛石に関する記述が述べられている。霊雲院へ置かれることとなった沿革や遺愛石の様子について記され、最も詳しく書かれているのが遺愛石についての諸名家による詩歌や記述が紹介されている。本庭における遺愛石の注目度がいかに高かったかを知ることができる。

- ・地割

白砂敷の平庭の中央に遺愛石を乗せた台が置かれている。平庭の背後には築山があり、植栽や石組がほどこされている。図の左側には建物が描かれている。

- ・水系

描写なし。

- ・石組・景石・敷石・敷砂利

築山には石組が見られる。遺愛石の右後ろに位置する、築山の合間に石組がほどこされている。図の左側の築山の合間にも石組がほどこされている。こちらは、やや大ぶりの景石がみられる。

重森三玲による修復によって枯滝石組が江戸初期風に復元したという<sup>58</sup>。現在、図において遺愛石の右後ろに位置した石組と同様の場所に枯滝石組が見られる（図290）。図とは石組の形状がやや異なり、石の数も違うように見える。さらに、挿図では流れに敷石をしている描写はないが、修復後は溪流表現として真黒石が敷かれている。左側の築山にある石組は現状では見られない。大きな立石の景石は現在も同様に据えられている。

- ・植栽・植生

平庭部分には植栽がなく、白砂敷である。築山の部分に松や桜、杉、楓、刈込などの植栽表現が見られる。築山は地被類で覆われており、平庭の白砂との境にも地被類

が描かれている。

現状では松や杉、刈込は見られるものの、桜は植えられていない。その代わりに楓があり、庭園の両端には台杉が植えられている。築山は苔で覆われている。

・ 構造物

庭園の中央には「遺愛石」と書き記された名石が台座の上に置かれている。遺愛石は現状のものと描写がよく似ている（図 291）。ただし、図と現状ではその向きが反転しているように見え、挿図には遺愛石に松が生えているが、現状では生えていない。本文ではこの遺愛石について詳細な記述があり、この庭園での遺愛石の注目度をうかがい知ることができる。

遺愛石（当院庭中にあり。相伝ふ、この名石初は肥後大守細川光尚侯の持物なり。かつて湘雪和尚細川家にちなみて後こゝに住す。その時大守より寺産五百石を与んと命じたまふ。湘雪拝謝して云、出家の後祿の貴は参禅の邪鬼なり、願くばこれに換て庭上の奇石を賜らば寺宝とすべしと乞ふ。

因レ茲銘を遺愛石と号し、こゝに贈りたまふ。高さ三尺横四尺、岩頭に小松卷柏を樹る。石肌細やかにして色青し。台に石刻の須弥壇なる物あつて、その上に石槽をすへ、その中にあり。無双の名石なり。諸名家の記文あり。

軸物両卷に満る。初卷の二三をここに挙る）

当時、遺愛石には松と卷柏が植えられていたことが分かる。また、遺愛石を乗せている台についても記述があり、須弥山と呼ばれる台の上に石槽が据えられており、その上に遺愛石を乗せたいとある。石槽の中には玉石が敷かれている様子も図から分かる。現在、遺愛石を乗せている台は挿図とよく似ており、石槽には白い玉石が敷かれている。

遺愛石とその台以外に、図の左の築山上に層塔が描かれている。現在はその場所に石塔は見られず、庭園の南東に層塔が見られるが形が異なるため、同じであるかは不明である。さらに、現況では雪見燈籠や火袋が丸い活け込み燈籠、六角型石燈籠が据

えられている。

- ・ 建造物

図の左に建物が描かれている。現在はこの建物はなく、新たに庭園が造られ、蹲踞や六角型石燈籠が据えられている。

- ・ 周辺景観

描写がないことから、「庭造の法則ある」庭園であることが分かる。

- ・ 季節・時間帯・気象

桜があることから春と分かる。また、図の右に楓があることから秋でもある。二つの季節が混在している。本庭の見どころは遺愛石であるため、見ごろを強調した描写はされていない。

- ・ 人物

図には遺愛石の周りに3人の人物が描かれており、遺愛石を様々な方向から鑑賞している。よって、遺愛石がこの庭園の見どころであることを示している。

- ・ 動物

描写なし。

- ・ 詩歌

本図には図の上部に東海菴和尚の漢詩が記載されている。これを読むと、本庭の遺愛石について詠んだ詩歌であり、詩歌によっても名勝が強調されている。

## (2) 挿図を基に植栽整備をされた庭園「養源院其一（草偃）」「其二（草偃）」

「養源院其一」（図 292）は「其二」（図 293）に連続して描かれた挿図であり、現在は養源院庭園として京都市指定の名勝庭園である。長らく放置されて荒廃していた庭園は平成3年（1991）から5年（1993）にかけて修理事業が行われ、発掘や史料をもとに枯滝石組や園池の修理が行われた。さらに、植栽については本史料が参考とされた。

養源院について本文では所在、沿革、建築、什宝について述べており、庭園につい

では「当院の林泉は風光閑雅にして奇岩多し」と紹介している。その記述通り、挿図には大きな石材を用いた石組や景石が描かれている。特に石橋や礼拝石が特徴的に見える。そして、作庭者は図の中で小堀遠州であると記載している。

- ・地割

本図には園池とその背後の築山が描かれている。「其二」に続いた園池の右側には刈込を主体とした平庭部分が描かれている築山には枯滝石組がほどこされており、そのほか刈込や景石が見られる。園池は横に広く、緩やかな護岸で形成されており、2箇所には石橋が架けられている。園池の右側と庭園の背後には建物が描かれている。

- ・水系

緩やかな護岸を持つ園池が左右に広がり、手前の岸は護岸に沿って石が据えられ、築山川の護岸には刈込が多くある。水流の表現がないことから、水流のない園池であることが考えられる。また、図の右側の建物の側には「千鳥井」と書かれた井戸がある。

- ・石組・景石・敷石・敷砂利

池の手前側には護岸石組が見られ、中央には大きく、角張った形状の礼拝石があったことが分かる。礼拝石の近くの池中には3石の景石が見られ、それぞれ形状の違う石が用いられている。築山には橋の右側に枯滝石組があり、その前には玉石で敷き詰められて流れが表されている。その中には大ぶりの水分石がある。図の右下には鉢前の石組があり、その右側から橋まで飛石が打たれている。

- ・植栽・植生

松と刈込が多く、特に、図の右下にある幹が大きく曲がった松は池に枝を伸ばしている姿が描かれている。そして滝石組の右横にも大きな松が植えられている。築山には丸く形作られた刈込が多く植えられており、背後の四角に刈り込まれた刈込との対比が見られる。そして、園池の岸や築山の一部には地被類が見られる。築山背後には大きな刈込があり、庭園が区切られている。



平成3年から5年に行われた修理事業において、本史料に滝横の松が描かれていることを参考としてアカマツが植えられた<sup>59</sup>（図294）。そのほか根締めにつツジ類を植え、ヒサカキを配植して景を整えられた。

- ・ 構造物

園池には自然石の橋が2箇所には架かり、左側は護岸を形成する細長い石を筋違いに配置することで橋を長く見せている。図の右下には手水鉢があり、その上方には井戸がある。図の中央下部には自然石の沓脱石が描かれている。

- ・ 建造物

図の右側には建物が2棟、庭園の背後にも屋根が見える。また、図に描かれていないが、下部に軒内が描かれていることからその手前にも建物があることが分かる。

平成3年から5年に行われた修理事業において建築について史料を用いて考察されており<sup>60</sup>、庭園の背後の建物を護摩堂、右側に描かれた手前の建物を内仏殿、その奥に描かれた建物を客殿（本堂）としている。そして、図の手前に位置するであろう建物を書院として、本図は書院南側広縁から眺めた庭園の景としている。

- ・ 周辺景観

庭園の背後に建物と松が描かれている。それ以外は空白であることから、凡例における「庭造の法則ある」庭園であることが分かる。

- ・ 季節・時間帯・気象

季節の指標となる植物がないため、季節は強調されていない。日中の晴れた庭園を描いている。

- ・ 人物

図には3人の人物が描かれている。礼拝石と橋の上に立つ人物が描かれており、そこが庭園の鑑賞ポイントであることが分かる。また袴を付けていることから、徳川家にゆかりのある寺院であることを示していることが推測できる。

- ・ 動物

描写なし。

- ・ 詩歌

描写なし。

### (3) 移築復原された「本國寺中真如院（草偃）」

真如院では庭園全体を表す「本國寺中真如院」（図 295）と烏帽子掛石を大きく取り上げた「真如院烏帽子掛石（草偃）」（図 296）の 2 図がある。

両図は日蓮宗大本山本國寺の塔頭であった真如院の庭園を描いている。昭和 24 年（1949）に隣接していた明德高校の校地拡大にともない、現在地である下京区猪熊通五条上ルに移転した。庭園は昭和 11 年（1936）の重森三玲による実測調査時にはかなり荒廃しており、その原因を重森は明治前後の度重なる改造によるものとしている。そして昭和 36 年（1961）に重森三玲によって昭和 11 年の実測図（図 297）や本図を参考として、本庭を復元したものである<sup>61</sup>。

本史料の本文中の本圀寺の項で本圀寺の来歴、名品、塔頭について書かれており、そのなかに真如院についての記述がある。

真如院の庭に瓜実灯炉あり（足利將軍義昭公の銘なり）、烏帽子石は義昭

公烏帽子を掛置たまひしとなり。ここに真如水といふ名泉あり

この記述から「瓜実灯炉」と「烏帽子石」、「真如水」がこの庭園の銘品としてあったことが分かる。本文中で示した通り「本國寺中真如院」には瓜実燈籠が図の中央に、真如水は木々に隠れて見えないが囲み文字で書き記されている。「烏帽子石」は別図「真如院烏帽子掛石」大きく取り上げられている。

- ・ 地割

「本國寺中真如院」を見ると、平坦な地形の中央に枯池を配置し、庭の奥側は高木が植えられ庭外を区切っている。枯池は中央がくぼみ、出島状に張り出している。昭和 11 年の実測図と比較すると、枯池の形状は似ているが中央の出島状の部分は図より大きく見え、枯池内の中島も見られない。

- ・水系

図の左側に「真如水」と書き示されており、木々に隠れて見えないが、本文に「ここに真如水といふ名泉あり」と記されているように泉の存在を知ることができる。

- ・石組・景石・敷石・敷砂利・敷砂

枯池の底に石を敷き並べていることがこの図の最も特徴的な箇所であり、この表現は本図にのみ見られる。図の下部には枯池内に中島に向かって沢飛石の様に飛石が打たれているが、昭和 11 年の時点では沢飛石は見られない。また、別図に描かれた烏帽子掛石は実測図では出島状の部分に据えられており、現在の庭園でも出島に据えられている（図 298）。

- ・植栽・植生

図の中央部や島に松が植えられており、そのほか樹種が分かる物として図の中央部に槇、図の中央下部に梅が描かれている。さらに、枯池を囲むように地被類があり、奥の築山へと続いている。

- ・構造物

図の中央部の出島部分に燈籠が描かれており、図内に「瓜実燈籠」と書き記されているため、この庭園の見どころの一つであることが分かる。現在は同様の燈籠が中島の中央に据えられている。その左手前には切石の橋が島に架かっている。図の左中央部には燈籠が描かれており、火袋が四角形であることから四角型石燈籠であることが分かる。

現在は重森によって復元された庭園となっているが、瓜実燈籠が今も庭内に据えられている（図 299）。図では台座が四角形に見えるが、現状では六角形の蓮弁模様の台座である。そのほか、図に見られた四角型燈籠はなく、現在は庭園中央に六角型燈籠が据えられている。また、図にはないが庭園の西側に呼子手水鉢がある。

- ・建造物

描写なし。

- ・ 周辺景観

図の背景は空白であり、周辺景観は描かれていないことから、凡例において、造園技法にしたがって造られた庭園は側の建物を除くことを示しているため、本庭園は造技法の面で優れた庭園であると考えていたことが分かる。

- ・ 季節・時間帯・気象

本図では天候や季節、時間帯を示す表現はされていない。唯一、梅が描かれていることから春であることが分かるがその 1 本だけであり、強調しているとは言えず、見ごろは設定されていないと考える。

- ・ 人物

図の左下部に僧が 2 人と男性が描かれている。庭内を散策せず、3 人が一箇所に描かれていることから、回遊せず人物が描き示された場所を鑑賞位置としていることが分かる。

- ・ 動物

描写なし。

- ・ 詩歌

詩歌なし。

## 第 2 項 現存していない庭園

現存しない庭園を描いた挿図について、第 4 章 第 2 節 第 1 項で論ずる上で〔枳殻馬場（中和）〕、〔東六条祭主三位輔親卿旧館（中和）〕（図 3）の両図を挙げる。〔東六条祭主三位輔親卿旧館〕は典故の図であるが、比較のため取り上げたい。河原院については作者の秋里は跋文で「煙霞風流も名残なき籬が島の古き蹟に棲て」と述べていることから河原院の跡に住んでいたことや、序者の藤波李忠が輔親の子孫であること、また板種によって該当する挿図の丁数に出入りがある事などから大きな意味を持つ挿図である。

(1) 河原院との関係性を示した〔枳殻馬場（中和）〕

本図には図題が記されていないが、図内の文章から枳殻馬場を描いた図であると判断した。その文章は以下のとおりである。

河原左大臣の古蹟千鳥池、あるは祭主三位輔親卿の林泉、天橋立を移されし跡は、今の東六条本願寺御堂のほとりより東なる枳殻馬場の地ならんと思はれける

この文章から分かるように、河原院跡かつ輔親の邸宅跡は東本願寺の枳殻馬場、つまり現在の涉成園の地であるとしている。また、図には「融大臣塔」が描かれていることから、河原院の風景を描いたのではなく、枳殻馬場を描いた図であるとした。

本庭は『都名所図会』にも挿図に描かれており、「東殿」（図 300）とされている。『都名所図会』では俯瞰的に庭園を描き、かつ視点の位置を〔枳殻馬場〕とは反対側に設定して描いている。また「東殿」は『東本願寺大絵図』（宝暦 11 年（1761））内の「百閒屋敷御庭之図」との合致点が多いため、この絵図を基に描いたと考えられている<sup>62</sup>。

・地割

広大な園池を有する庭園であり、亭を持つ島や石塔が立つ島、鐘楼が建つ島などが見られる。園池の奥には山並みが描かれており、眺望の良い庭園であることが分かる。

・水系

広大な園池であり、複数の島が描かれている。園池の水面には水流の描写がないため、流れの少ない穏やかな水面であったと思われる。

・石組・景石・敷石・敷砂利

庭石は少なく、図の右下の池に張りだした建物付近の池中に景石が見られる。亭が建つ島の裾部にも石組が見られる。

・植栽・植生

また下部には中景表現の松や遠景表現の楓も見られる。全体的に松が多く描かれて

おり、池の対岸には遠景表現の松も描かれている。園池には蓮の葉が浮かんでいる姿が描かれ、園池の岸には地誌類が描かれている。『都名所図会』「東殿」にも園池に蓮が描かれており、また、『都花月名所』でも蓮の名所に東殿が挙げられていることから、本図にも蓮が描かれたことが分かる。

- ・ 構造物

園池の中島には「融大臣塔」と書かれた層塔が立ち、中島の亭の前には手水鉢がある。また、図の左下には船が描かれている。

- ・ 建造物

図の左下に屋根だけが見え、右側には園池に張り出した建物が描かれている。中島には亭があり、さらに奥の中島には楼が描かれている。『都名所図会』「東殿」にも園池に張り出した建物と中島に建つ亭が描かれている。鐘楼は亭の隣に描かれ、異なる位置に描かれている。『都名所図会』の図は当時の様子を描いていないものであるため、本図の様子と差異があることは当然である。

- ・ 周辺景観

図の上部には山並みが描かれており、遠景をとる庭園であることが分かる。『都名所図会』「東殿」の視点と逆方向から描いた理由に、この遠景をとる庭園であることを表現する目的があったことが指摘できる。

- ・ 季節・時間帯・気象

蓮や楓の描写があることから、図には夏と秋が混在している。しかし、植物によって季節がうかがえるが強調しているとはいえず、見ごろの時期は設定されていない。

霧が夜の描写を表しており、月があることから夜の風景であることが分かる。

- ・ 人物

描写なし。

- ・ 動物

描写なし。

・ 詩歌

描写なし。

(2) 『袋草子』を典拠として描かれた〔東六条祭主三位輔親卿旧館（中和）〕

本図は輔親の邸宅であった南院の様子を史料に基づいて描いたものである（図 4）。

この図に対応する庭園についての記述は、東本願寺の項に当時の状況に続いて記されており、敷地内に輔親の邸宅があったとしている。

この館舎の中に、大寝殿小寝殿の名目あり。これを按ずるに、むかしこの地は祭主三位輔親卿の殿舎なり。その林泉に丹後の海橋立を移して、池を広く掘りて松を樹、風景うるはしく月を賞ぜられしなり

輔親の邸宅にあった庭園が天橋立を映したものであり、松が植えられた風景の良い庭園であり、月見が行われていたことが分かる。さらに、挿図の上部にも「林泉に天橋立の風景を移さる」と記されている。

本図は典故に基づいて描かれた挿図であり、『袋草子』（1157～1158 頃）に書かれた輔親の邸宅、南院についての記述があり、図はその場面を描いたものである。以下に、本文中の該当箇所を記す。

袋草子云く南院は海橋立なり、輔親卿の家なり。月を見ん為に寝殿の南庇を差さずと云々。懷園が池水はあまの河にやかよふらんとよむ、この所にての詠なり。月明夜にて行向へるに、夜更けて人もねぬらんと思ふに、寝殿の南面に輔親一人月を見て居て、時に相互ひに興に乗じてこの歌を詠む、暁更くるに帰ると云々

縁側に座った輔親であると思われる男性が月眺めている様子や、図の右下には邸宅を尋ねる懷円と思われる人物が訪ねてきている様子が描かれている。また、輔親の足元には紙と筆、硯が置かれており、歌を詠もうとしている場面に見える。

・ 地割

広大な園池を持つ庭園であり、中島が複数個描かれている。図の左上には岬状の地形が見られ、天橋立を映したという景色がうかがえる。園池に大きく張り出した建物があり、そこから中島へ飛石を用いた園路が作られている。

- ・水系

広大な園池が描かれており、池中には複数の赤字魔や景石が描かれている。園池の岸近くには穏やかな水流表現が見られ、奥の方は水流のない穏やかな水面が描かれている。図の左上には岬状の地形があり、天橋立を映したとされる景が作られている。

- ・石組・景石・敷石・敷砂利

石組や景石は建物付近に見られる。池の護岸に石が組まれ、中島には橋挟石などの石組が描かれている。さらに、軒先の池中には景石が据えられ、中央に描かれた島の右側にも景石が見られる。全体としては石組が少なく、園池と島や地割によってその景を重視する庭園であろうことが分かる。

建物の軒先から島へ渡る橋に向かって飛石が打たれており、途中で折れ曲がった直線的な園路である。

- ・植栽・植生

図の左下には中景表現の松や遠景表現の楓が描かれている。岬状となっている部分には遠景表現の松が描かれており、全体として本文に記されたように松の多い情景が描かれている。園池の岸や飛石の周りには地被類が描写されている。

- ・構造物

図の左下の中島には自然石の橋が架かっている。その中島には六角型石燈籠が描かれている。

- ・建造物

図の右には園池に大きく張り出した建物が描かれている。本文中に建築について「月を見ん為に寝殿の南庇を差さず」とあり、この建物が寝殿を表しているのか断定はできない。また、図の左上の大きな中島には茅葺の建物が建っている。図の右下に



は塀と門が描かれている。

- ・ 周辺景観

霞の奥に山並みが描かれている。

- ・ 季節・時間帯・気象

夜を表現する霞が描かれ、月も描かれていることから夜の風景であることが分かる。本庭は月を鑑賞していたという本文の記述が表現されている。また、典故の題材である『袋草子』の懷円が夜に邸宅を尋ねる情景を描くための演出でもある。

また、楓が描かれているため季節は秋と読み取れるが、図に記された詩歌から夏であることもうかがえる。

- ・ 人物

図には3人の人物が描かれており、縁に座って月を見る男性と、訪ねてくる僧侶とそれを出迎える子供が描かれている。『袋草子』を典拠としたことから、僧侶が懷円であり、縁で月を眺めている男性が輔親であると考えられる。また、輔親の側には筆と硯、紙が置かれており、輔親と懷円が歌を詠んだことを示すように表現されている。

- ・ 動物

図の上部、月の右下に鳥が飛ぶ姿が描かれている。

- ・ 詩歌

図の上部に輔親と懷円の歌が記述されており、以下に示す。

七夕をよめる

雲まよりほし合の空を見わたせばしつころなく天の河波 祭主輔親

池水は天の川にやかよふらん空なる月の底にみゆるは 懷円

七夕について詠まれた歌であり、『袋草子』にある懷円が輔親の邸宅を尋ねたときに詠まれた歌である。

## 小結

各林泉図の分析において挿図を用いた修復以前の状況と比較すると、大徳寺方丈庭園や霊洞院庭園において『都林泉名勝図会』の挿図とよく似ているといった評価が見られたことから、一部の庭園に関して写実性の高い史料であることが考えられる。しかし、その描写に秋里が見た名勝のイメージが加味されていることは、金閣寺や霊洞院の冬の情景を描いた図や芳春院や本法寺を描いた図によって、挿図に秋里の庭園に対する捉え方が反映されていることは明らかである。ただし、現状との差異に関して、芳春院庭園や本法寺庭園において『都林泉名勝図会』板行後の建物の改築や撤去などにより庭園の地割が変更され、挿図との差異が目立つ庭園もあった。

林泉図の細かな分析により総体的に捉えることができ、林泉図全体で統一して人物の働きや季節表現などを確認できた。また、第 2 章で論じた各構成要素の描写方法が林泉図全体で用いられ、描写の統一がなされていることが分かった。

さらに、植物などの季節表現や画中人物の行動によって秋里が各庭園に対して、見どころや見ごろ、鑑賞方法についてどのように捉えていたのかが推察でき、ひいては江戸時代中末期の庭園の特徴を示すことができるのではないかと考える。これについては次章 第 2 節において論じる。

## 第4章 『都林泉名勝図会』の描写の特徴

### 第1節 京都名所案内記における庭園に関する記述との比較

#### 第1項 名所図会における庭園に関する記述との比較

『都林泉名勝図会』では本文中に、庭園に関する記述が全項目の93件中30件（約35%）に見られた。庭園に関する記述が全体の3割程度にとどまっていることから庭園のみに偏らず、名所案内としての性格を果たしていると言えることは第1章第1節第1項においてすでに述べた。しかし林泉に特化した名所図会であることを考えると庭園に関する記述が少ないように思う。では、秋里が手掛けた他の名所図会ではどうか。比較のため秋里籬島の京都を舞台とした4作の名所図会、名所記において、庭園に関する記述を抜き出したものを表にまとめた（表14）。これを見ると、庭園に関する記述が見られた項目は『都名所図会』で全593項目中17項目（約3%）、『拾遺都名所図会』では全839項目中17項目（約2%）、『京の水』では全346項目中10項目（約3%）、『都花月名所』では全443項目中12項目（約3%）である。秋里著の名所図会全体では庭園に関する記述がごくわずかであることが分かった。4作の名所図会の庭園に関する記述の割合と比較すると、『都林泉名勝図会』では庭園に関する記述がいかに多いかが分かった。

また秋里が手掛けたほかの名所図会の記述において庭園に関する記述を見ると、『住吉名勝図会』では109件中3件（約3%）、『摂津名所図会』では1,304件中3件（約0.2%）、『東海道名所図会』では665件中6件（約1%）、『河内名所図会』では552件中11件（約2%）、『木曾路名所図会』では656件中1件（約0.2%）の庭園に関する記述が見られた。『大和名所図会』、『和泉名所図会』、『伊勢参宮名所図会』、『近江名所図会』では庭園に関する記述は見られなかった。京都以外の名所図会と比較しても結果は変わらず、『都林泉名勝図会』を著した後に板行された『河内名所図会』、『木曾路名所図会』にも庭園に関する記述の増加は見られなかった。よって、『都林泉名勝図会』は挿図だけでなく、本文の記述内容においても庭園に特

化していることが分かった。

『都林泉名勝図会』における庭園の記述の内容については第1章 第1節 第1項にてすでに紹介したが、『都名所図会』や『拾遺都名所図会』に共通する名所が取りあげられており、記述内容の比較が可能である。秋里の初期の名所図会と林泉を主題とする『都林泉名勝図会』との記述に共通箇所が見られるのか、またどのように変容しているのかを検証する。各名所図会に共通して庭園に関する記述のある項目をその記述とともに表15に示した。『拾遺都名所図会』は『都名所図会』の続編であり、『都名所図会』で紹介しきれなかった名所を取り上げているため3作すべてに共通する庭園はないが、『都名所図会』と『都林泉名勝図会』に共通する庭園が9件あり、神泉苑、河原院、遍照心院方丈庭園、慈照寺庭園、安養寺塔頭庭園、龍安寺方丈庭園、鹿苑寺庭園、天龍寺方丈庭園、西芳寺庭園であった。『拾遺都名所図会』と『都林泉名勝図会』では輔親の庭園である天橋立が共通して記述されていた。東本願寺東殿、現在の涉成園について『都名所図会』だけに記述があるにもかかわらず表内に示しているが、この記述が天橋立と河原院の記述について考察する上で必要であることから、取り上げている。以下、記述の変遷について考察していく。

神泉苑は『都名所図会』では作庭者について記述しているのみであるが、『都林泉名勝図会』では作庭者に加え、造営時の状況や現状がどうなっているかを記しており、『都名所図会』より詳細な記述となっている。

天橋立は『拾遺都名所図会』では東本願寺の北から六条魚棚までを旧跡としており、輔親の邸宅の庭園が天橋立を映したものであることを述べている。一方『都林泉名勝図会』では東本願寺の項に記述され、東本願寺の大寝殿・小寝殿の地を旧跡としている。『拾遺都名所図会』と同様に天橋立を映した庭園であることを記述している。さらに、『袋草子』を取り上げて記述に客観性を持たせている。この『袋草子』の記述を用いて典故の図を描いている。

河原院については『名所図会』に庭園がどのような姿をしていたかの記述があり、

陸奥の松島を映した庭園であったことを記述している。さらに、東本願寺の項中に東殿の小項があり、そこでは涉成園（百間屋鋪としている）の地が河原院の旧跡であるとしている。『都林泉名勝図会』では本文に記述はないが挿図内に庭園に関する記述があり、河原院もしくは輔親の邸宅の庭園が涉成園（枳殻馬場）の地であるとしている。両書の記述を比較すると、涉成園が河原院の跡であるという記述は共通しているが、『都林泉名勝図会』では涉成園を輔親の邸宅跡とも考えていることが分かる。近年の研究により涉成園が河原院の旧跡であることは否定されており、河原院は五条橋の南東の地であるとされている。また、輔親の邸宅は東本願寺の北に位置していたとされている。

輔親の邸宅と河原院について整理すると、『都名所図会』では東本願寺の涉成園（百間屋鋪）を河原院跡としており、『拾遺都名所図会』では東本願寺の北を輔親の邸宅跡とし、『都林泉名勝図会』では涉成園（枳殻馬場）を河原院跡かつ輔親の邸宅跡としている。『都林泉名勝図会』の記述は『都名所図会』、『拾遺都名所図会』との記述と矛盾しており、河原院跡と輔親の邸宅跡が同一視され、両者の姿を挿図に描いている。ただし、〔東六条祭主三位輔親卿旧館を訪ねる図（中和）〕と〔枳殻馬場（中和）〕の図が省かれている版本もある。図題が重複する挿図を掲載していることについて、野間が序者である藤波李忠と秋里の関係を指して指摘しており、「序者である水竹居主人藤波李忠に敬意を表して、その祖輔親の故事を図するとともに、輔親の旧跡が籬島の号に因みある河原院の旧跡らしく思はれることを誇示するために、ことさら同趣の図柄を拡大重複して掲出したのであろう<sup>63</sup>」と述べている。さらに、秋里は跋文において河原院やそのほかの旧跡に対する考えを述べている。

六条河原院のおもしろきさまは、古きうたどもにいちじるしく、荒れたる趣もまた哀に聞ゆ。源順の、人物はかはれども、煙霞はかはらず。時世はあらたまれども、風流改まらずと賦せられし、その煙霞風流も、名残なき籬が島の古き蹟に棲て、いにしへをしたふからに、なほこゝかしこを思ふ

に、寛平法皇の亭子院の御園、中川の水せき入れし上東門院のわたどのゝ  
やり水、鳥羽の離宮祭主輔親卿の天橋立なども、唯名のみなるは悲し。さ  
れば、今さだかに遺れる所を見ぬ人にも、しらせまほしく、画工をいざな  
ひて、露たがはずうつさしめ、目て都林泉図会といふ。（後略）

秋里は六条河原院や輔親の邸宅などを例に挙げ、現存せず名前しか残っていない庭園  
について嘆き、その跡を見たことのない人にも知ってほしいという思いを語っている。  
さらに秋里自身、河原院跡である籬が島に住んでいたこともあり、秋里個人も河原院  
に強い思いを持っていたことが分かる。

遍照心院方丈庭園では『都名所図会』に廬山を模した庭園であることが記述されて  
おり、『都林泉名勝図会』にも同様に記述されている。さらに具体的に庭園の様子を  
記述し、作庭者についても記述している。『都名所図会』より詳細な記述が見られる。

慈照寺庭園では『都名所図会』で造園の規範とする庭園として高い評価がなされ、  
庭園の姿を紹介している、しかし『都林泉名勝図会』では本文に庭園に関する記述は  
なく、挿図内に記述されている。作庭者を相阿弥とし、経年によって姿が変わったこ  
とを理由に挿図に描くとしている。記述より挿図に重点を置いていることが分かる。

安養寺塔頭の庭園について『都名所図会』ではどのような庭園であるか、池に船を  
浮かべたり、四季の花を楽しめたり、蹴鞠をしたりと華やかな庭園であることがうか  
がえる。しかし『都林泉名勝図会』では洛東の佳境と評価しているが、庭園の具体的  
な様子の記述はない。その代わりに安養寺の塔頭の挿図は多く、挿図をもって庭園の  
詳細を知ることができる。

龍安寺方丈庭園について、『都名所図会』では庭園が細川勝元の好みであることだ  
けが記述されている。『都林泉名勝図会』では本文と挿図の両方に記述があり、相阿  
弥によって作庭され、洛北で最も名庭であるとしている。庭園の姿が記述されており、  
虎の子渡しと呼ばれていることが分かる。また、細川勝元が書院から男山を遥拝する  
ために奇岩ばかりの庭園となったことが分かる。

鹿苑寺庭園について『都名所図会』では奇石が多くあり、金閣の周りが池であると簡単に庭園の様子を記述している。『都林泉名勝図会』ではひとつひとつの構成要素を紹介し、奇岩についても明記している。『都名所図会』より具体的に庭園の様子が分かる。

天龍寺方丈庭園について『都名所図会』は夢窓国師の作庭であり、池を曹源池ということだけが記述されている。一方、『都林泉名勝図会』では夢窓国師の作庭であることに加え、庭中から臨む山々を庭中の荘としていることが記されている。

西芳寺庭園について『都名所図会』は詳しく記述しており、夢窓国師の作庭であること、その作庭時の逸話について詳述されている。『都林泉名勝図会』では同様のことが端的に記述され、加えて応仁の乱で荒れた庭園を伏見の島之介が補修したことが記されている。

全体的に見ると『都名所図会』より『都林泉名勝図会』の方がより詳細な記述となり、具体的な庭園の様相や評価などが付け加えられている。ただし、慈照寺庭園や安養寺塔頭庭園などは『都名所図会』の方が詳しく記述されているが、『都林泉名勝図会』では庭園の鑑賞方法や見どころ挿図の中で提示することによって、本文中の庭園に関する記述の少なさを補っている。

## 第2項 京都の名所案内記

数ある地誌の中でも『都林泉名勝図会』が庭園に特化しているという点で特異であることから、このような地誌が他の地誌からどのような影響を受け、さらにその後の地誌に与えた影響について検討、考察する。

京都の主要な地誌は表 16 に挙げる。使用する史料について『都林泉名勝図会』と同じ地誌に絞って比較検討するが、地誌の要素が強い史料や庭園に関する描写が見られるものに関しては積極的に取り入れることとする。これらの地誌の内容を比較するにあたり、史料ごとの性格や特徴を把握する必要があるため、以下にこれを記す。

史料を性格的に分類するにあたり、『国書総目録』の分類に従って史料を分類した。その結果①地誌、②和歌、③俳諧、④神社、⑤紀行、⑥評判記、⑦医学、⑧名鑑、⑨記録、⑩災異、⑪雑誌、⑫書画、⑬年中行事がある。そのうち庭園に関する記述が見られたのは、①地誌（50件）、②和歌（1件 ただし地誌を兼ねる）、③俳諧（1件）、④神社（1件）、⑤紀行（1件）、⑥評判記（1件）である。地誌以外が含まれているが、地誌の要素が大きい事と、庭園に関する記述があることから使用したい。ただし『国書総目録』にはすべての史料が記載されておらず、分類の不明なものも多い。そのため、類似史料から検討して分類した史料が含まれている。

さらに史料の特徴的に分類するため、立項方法によって分類した。その結果9種に大別でき、その種類は㉠寺社や山河などの名所ごとに立項している地誌、㉡各地名や通り名などを項目とし、その中で地域や名所について記述している地誌、㉢名所を寺社や山河、名品などに分類して立項している地誌、㉣旅行の日程を示し、その日程ごとに名所の記述をしている地誌、㉤行政的な内容の立項をしている地誌、㉥歴史的事柄を立項している地誌、㉦商品、職人、名物などを項目とし、その内容について記述している地誌、㉧その他、㉨項目を立てていない地誌である。また、1件の地誌に1種類の立項方法ではなく、複数種の立項方法を併用している地誌もあった。㉠には『京童』、『洛陽名所集』、『京童跡追』、『出来斎京土産』、『京師巡覧集』、『菟芸泥赴』、『宝永花洛細見図』、『都名所車』、『山城名所寺社物語』、『都名所図会』、『拾遺都名所図会』、『都林泉名勝図会』、『洛陽十二社靈驗記』、『洛西嵯峨名所案内記』、『八幡名所案内記』、『開化絵入京都見物独案内』、『京華要誌』、『旧都巡遊記稿』、『明治新撰西京繁盛記』、『京都新繁昌記』などがある。

㉡には『京雀』、『京雀跡追』、『山城名勝志』、『山州名跡志』、『京町鑑』、『京之水』、『京都坊目誌』などがある。

㉢には『扶桑京華誌』、『京羽二重』、『雍州府志』、『京羽二重織留』、『名所都鳥』、『山城名跡巡行志』、『都花月名所』、『花洛羽津根』、『伏見叢書』など



がある。

㊦には『京城勝覧』、『京内まいり』がある。

㊧には『伏見大概記』、『洛水一滴抄』、『京極沿革史』、『新彫伏見鑑』などがある。

㊨には『山科郷史』などがある。

㊩には『全盛糸の音色』、『水の富貴寄』、『海内医林伝』、『商人買物独案内』、『京都書画神名人名録』、『天保医鑑』、『商人買物独案内』、『洛医人名録』、『都商職街風聞』、『四方のはな』、『花の枝折』、『売買ひとり案内』、『西京人物誌』、『都の魁』、『新京極道のしおり』、『京都著名諸家案内』、『京の華』などがある。

㊪には月日ごとに行事が記された『日次紀事』、季節ごとに項目を分け、行事、動植物などの風景・風物を描写している『堀河之水』、図と文章で扁額を記した『扁額軌範』、番付風に名所を紹介した『京都土産』、その他『伏見大概記』、『都繁昌記』、『京猫一斑』、『京都土産』、『京都繁昌記』、『都のにぎはい』などがある。

㊫には紀行文で記した『近畿歴覧記』や天明の大火について記した『音無川』、『万民千代乃礎』、『花紅葉都嘶』、地震について記した『本朝地震記』、『地震奇談平安万歳楽』、またほかにも『平安鬱脩記』、『甲子兵燹図』、『洛中大火夢物語』、『秋の日照』などがある。

京都の地誌の記述内容を比較する方法として各地誌での庭園に関する記述を抽出し、その記述内容についてどのような差異があるのかを検討する。そしてその記述において庭園がどのように評価されているかを検討する。まず京都の地誌において、本文中に庭園についてどのような記述があるかを調査した。調査対象は江戸時代から昭和までに、京都で刊行された地誌とする。各地誌の庭園に関する記述については「假山」、「水石」、「泉石」、「築山」、「庭園」、「庭」、「林泉」、「園」、「苑」といった単語に注目して抜粋し、そのほか庭園を表す記述についても取り上げた。その結果は表 17 に示す。

庭園に関する記述は、①庭園または庭園の構成要素について、②庭園の古跡または廃絶した庭園について、③故事や逸話、年中行事において利用された庭園について、④和歌の題材としての庭園について、⑤庭園用語の説明や造園について、⑥町や池の名前の由来となった庭園について、⑦その他の 7 種類に大別することができた。次項において、その考察について述べる。

### 第 3 項 京都名所案内記における庭園に関する記述との比較

『都林泉名勝図会』の庭園に関する記述と他の地誌における記述件数を比較してみると（表 18）、『京童』では 87 件中 6 件（約 7%）、『洛陽名所集』では 258 件中 17 件（約 7%）、『京雀』では 1,164 件中 6 件（約 1%）、『京童跡追』では 68 件中 2 件（約 2%）、『出来斎京土産』では 270 件中 14 件（約 5%）、『京雀跡追』では 130 件中 5 件（約 4%）、『京羽二重』では 1,191 件中 1 件（約 1%）、『雍州府志』では 2,732 件中 65 件（約 12%）、『京羽二重織留』では 1,325 件中 39 件（約 3%）、『名所都鳥』では 591 件中 18 件（約 3%）、『堀河之水』では 129 件中 15 件（約 12%）、『京城勝覧』では 302 件中 11 件（約 4%）、『都名所車』では 272 件中 9 件（約 3%）、『京町鑑』では 169 件中 12 件（約 7%）の庭園に関する記述が見られた。『雍州府志』や『堀河之水』など記述件数が多いものでも約 12%となっており、『都林泉名勝図会』の約 35% は地誌の中でも庭園に関する記述が多いと言える。しかしそれでも記述は全体の 3 割程度に過ぎず、寺社の由緒や典故、什宝に関する記述が主体であると言える。

京都の地誌に見られる庭園に関する記述は、その内容によって 7 種に分けられた。その種類は①庭園または庭園の構成要素についての記述、②庭園の古跡または廃絶した庭園についての記述、③故事や逸話、年中行事において利用された記述、④和歌やその題材となった記述、⑤造園用語の説明や石材などの記述、⑥町名が庭園に由来しているという記述、⑦その他であり、地誌別の内訳は表 18 に示した。『京童』から『京羽二重』間の 8 件の地誌で①庭園または庭園の構成要素についての記述より②庭

園の古跡または廃絶した庭園について、③故事や逸話、年中行事において利用された庭園について、④和歌の題材としての庭園についての3種が多く記述されていることが分かった。これらは当時の庭園の状態を記述するか、過去の出来事を記述するかの差がある。例えば①の記述とは「墨染寺 日蓮宗なり。この寺の庭に。墨染の桜とて有」（『洛陽名所集』五巻「深草」）、「此寺の庭は絶景の工あり」（『出来齋京土産』六巻「西方精舎」）、「山城の國伏見のさと西行寺と云寺の庭にあり」（『京羽二重』一卷「月見の池」）などがあり、当時の庭園の評価や庭園の構成物について記述されている。そして②「古しへ源の左大臣融公は六条河原院とて八町四方に家つくりしてすみ給へりつき山泉水その頃世にたぐひなかりしとにや」（『京雀』六巻「塩がまの町」）、③「念仏法語をとて諷経しける時にかの角をさゝげて庭上に立ちりけるを見侍べり」（『出来齋京土産』一卷「極楽院」）、④「しばし庭にたたずみて 草も木も成仏すつととくのりのまことなるかな庭の羅漢樹」（『京童跡追』二巻「鹿苑寺」）などは過去の状態の庭園について記述されている。

そして『雍州府志』から『京町鑑』までの5件の地誌では②、③、④の記述より①の内容が多く、過去の状態の庭園より当時の庭園の状態を記述することが多くなった。さらに以降の地誌は『都名所図会』から『都林泉名勝図会』という秋里籬島著作の4件では当時の庭園の状態を紹介することが極めて多く、庭園のとりあげ方に特徴を見付けることができた。

さらに地誌がとりあげている庭園の中で最も特徴的であったのは、『京羽二重織留』にあった「仮山地」という項目である。それ以前では独立した庭園の項目はなく、各寺社や各町名の項目を立て、その中に庭園に関する記述があった。『京羽二重織留』の前作であり、同作者の水雲堂孤松子による『京羽二重』では町名、寺社、名池や名水などの名品、山川、旧跡などの項目を立てているが、その中には「仮山地」の立項はなかった。これは元禄年間の初めには庭園が名所として確立していたことを示唆している。

当時の庭園の記述については、さらに庭園の特徴、構成要素、作庭者についてなど細かく分類することができる。そのうち、以下では庭園の評価について検討する。

評価については『都林泉名勝図会』の本文中または挿図内に記述がある庭園に限り、かつ多くの地誌にとりあげられている庭園に絞って検討する。即ち、西芳寺庭園、神泉苑、天龍寺庭園、龍安寺庭園の4庭である。

京都の地誌における西芳寺庭園の評価は高い。『扶桑京華志』において「是洛西ノ奇観也」とあり、洛西を代表する奇観とされている。『出来斎京土産』では「此寺の庭は絶景の工あり」と庭園の景色は技術を用いた絶景であるとしている。『雍州府志』では「水石の状、凡作の及ぶところに非ず」とあり、庭園の様を凡作との格の差を述べ、評価している。秋里籬島は『都名所図会』において「庭中の造化四時の風光玄妙にしてまた比類なし」と記し、四季それぞれの庭園の風景が美しく趣深いことを評価している。『都林泉名勝図会』では「名園なり」とだけ記述している。その後『花洛羽津根』において「四時の造化風光微妙なること、凡人の論ずる処にあらず」とあり、『都林泉名勝図会』と『雍州府志』の記述を合わせたかのような記述となっており、凡人が論じるまでもない程の庭園の造形の美しさを記している。『京華要誌』では「境地清閑樹石蒼古また洛西の一名園たり」と、境地の静けさや樹石の古めかしさの中にある趣をもって洛西一の名園と評している。『旧都巡遊記稿』では「京師近郊に於ける真に屈指の名園なり。只惜む、地位西に僻し曳筈の客少きを」とあり、京都近郊において屈指の名園にもかかわらず、立地の都合で観光客が少ないことを惜しんでいる。これらの記述から、西芳寺庭園は洛西の代表とする庭園として高く評価されており、特に庭園内の景色がその評価の対象となっている。また凡作や凡人の及ぶところにあらずと、庭園の造形の非才さを論ずる地誌もあった。しかし近代になると、名園と観光客の多さは比例していないことが分かる。

神泉苑は地誌が刊行された当時「僅の林泉」、「形のみ残れり」という状態のためか、作庭者や逸話の記述は多いが、庭園の評価は少ない。『近畿歴覧記』では「古へ

此社方六町ノ境内ノトキ社ノ前ニ池水アリ其中ニ一箇ノ岩石巍々トシテ立テリ然モ其ノ石ノ景致自然ニ見所アリ」と、池の中に立てられた庭石の姿を評価している。『都林泉名勝図会』では「中頃明德応仁の兵燹に罹りて、今は僅の林泉となる。しかはあれど、大内裏の遺跡千載の賜とぞ思はれける」と庭園が縮小した今となっても行幸地の名残を感じられ、年月を経た現在の様子も評価している。『京華要誌』では「平安等一の林泉なり」と京都一の庭園と評価されている。

天龍寺の庭園は夢窓国師に関する記述や造園に関する記述が多く、評価する記述が少ない。しかしいずれの書においても庭園と借景の関係について高く評価されている。

『都林泉名勝図会』では「亀尾山、あらし山、大堰川、戸難瀬の瀧を庭中の荘として、この辺の妙境なり」と、庭園の造形より庭園から見える山川などを評価している。『京華要誌』でも「花時庭中より嵐山を望めは、洞中より武陵を望むか如く、秋晚紅葉池辺に満ち、霜後の風情いはん方なし」とあり、春に庭中から嵐山を見ると中国の武陵を望むかのようであり、秋は池辺に紅葉が満ちて風情がよいと、やはり庭中から見る景色を評価している。『旧都巡遊記稿』では「如此数多の奇巖怪石参差として庭中に在り、加るに嵐山の眺望を以てす。実に天然と人工とを配合して、其宜しきに適ひ風景殊に秀逸なり」と、庭の石組と眺望を合わせた風景を評価している。評価に関する記述だけをみると庭中からの景色ばかりが高く評価されてきたようにみえるが、評価する記述がないだけで、庭中の築山、石組、池についての記述も併せてあるため、庭園そのものが評価に値しないものではなかったと考えられる。

龍安寺の庭園の評価は特徴的な記述である。『東西歴覧記』では「庭ヲ作ルモノ、是ヲ手本トス」、『雍州府志』では「その石の大なるもの、九箇。これ、勝元のみづから畳むところにして、その布置、凡巧の及ぶところに非ず。故に、世の假山を設くる者、これをもつて亀鏡とす」とあり、作庭の手本とするほど巧みに配置された庭石を評価している。『京羽二重織留』では「左右の奇勢、凡人の及所にあらず、世に築山をこのむもの此假山を以て標格とす」と、『雍州府志』と同じく作庭の手本とする

庭園であり、左右のバランスを評価している。『山州名跡志』でも「姿勢奇也」と石組を評価している。『都林泉名勝図会』では「所謂方丈の庭は相阿弥の作にして、洛北名庭の第一とす。庭中に樹木株もなく、海面の体相にして、中に奇巖十種ありて島嶼に准へ、真の風流にして他に比類なし」と洛北一の名庭と述べられ、他に類を見ない庭園の様であることを評している。『旧都巡遊記稿』では「真に一奇観なり」と庭の景が評価されている。どの地誌も高い評価をしており、作庭の手本とするべき庭園として記述されるのは他にはない特徴的な記述である。

評価の内容に関しては、地誌によって表現の違いはあるものの庭園ごとに一定の評価が見られ、約 300 年の間に特に大きな変化は見られなかった。しかし評価対象となる庭園についてみると、庭園のとりあげ方と同様に、地誌によって差が見られた。それは地誌によって過去の庭園を多く扱うか、当時存在した庭園を多く扱うかという差異である。評価についても同様に、評価する対象が古跡であるか、現存する庭園であるかに違いが見られた。

『京雀』から『京羽二重』の間は古跡である庭園を評価する記述が現存する庭園を評価する記述より上回り、『雍州府志』から『都林泉名勝図会』の間は現存する庭園の評価が古跡を評価する記述より上回っている。このことから地誌において、庭園の情報は古跡に関する評価よりも現存する庭園の評価が求められていたのではないだろうか。

『京羽二重織留』における「仮山地」の立項は、元禄年間初頭には庭園が名所として確立されていたであろうことを示唆している。しかし現段階では『京羽二重織留』以降、庭園の立項は見つかっていない。しかし『京羽二重織留』の数年前に刊行された『雍州府志』以降の地誌においては、庭園に関する内容に現存する庭園についての記述が増えていることが指摘できる。また、庭園の評価に関する記述が古跡より現存する庭園へ増加したことは、名所とする庭園が、現存する庭園を重視するようになっていたと言えるのではないだろうか。そして『雍州府志』や『京羽二重織留』の刊行か

ら約 100 年後に『都林泉名勝図会』という庭園を主題にする地誌が刊行されることから、元禄期から寛政期までの間に庭園が名所として確立していったことが推察される。

## 第 2 節 『中国名所図会』にみる秋里籬島と籬島軒秋里

### 第 1 項 『中国名所図会』と名所図会との比較

序章 第 1 節 第 3 項に秋里籬島と籬島軒秋里が同一人物であるかどうか、先行研究を用いて論じたが、本項では籬島軒秋里が記したとされる名所図会『中国名所図会』を用いて、秋里が籬島軒秋里と同一人物であるかどうかを論ずる。

籬島軒秋里の著述でよく知られるのは『石組園生八重垣伝』や『築山庭造伝』後篇である。『都林泉名勝図会』は庭園に特化しており、凡例で北村援琴の『築山庭造伝』を基にし、本書に収めきれなかった庭園は後編に備えるとしていることから、籬島軒秋里の『築山庭造伝』後篇がそれにあたるとする論もあることはすでに述べたとおりである。しかし、本史料は名所図会であることは本文の記述が名勝の紹介をおろそかにしていないことや、挿図が名勝の見どころや鑑賞方法・時期をしめしていることなどからも名所図会の性格が強い。その点『築山庭造伝』後篇は造園書であり、本文は作庭方法や樹木の取り扱いなど造園に関する記述のみである。下巻には庭園の全様が描かれているが、その描写は庭園の細部まで精密に描いており、その描写を遮るような人物や季節表現はない。そのため、書物としての性格を全く異にしており、比較することができない。そのため、本史料と同じ名所図会であり、籬島軒秋里の著書であるとされる『中国名所図会』との比較をもって同一人物かどうかを論ずる。

『中国名所図会』は大本 4 巻 4 冊の稿本である。金毘羅宮図書館に所蔵されており、稿本以外に板本も写本も見当たらないことから孤本であると考えられている。奥書がなく、著作年代は不明である。ただし、巻之一本文冒頭下に「籬嶋軒平秋里図著」とあることから、作者が籬島軒秋里であることが分かる。また、巻之四は「錦帯橋」の項が文章半ばで終わっており、目録によると項目が錦帯橋で終わりであることから、

半丁分ほどが抜け落ちているとされている<sup>64</sup>。木版用として記された稿本であるため、所々に張り札があり、彫師に対する注文事項が記されたり、朱書きで誤字を訂正したりしているという。そして、凡例の最後に「再びこの集をつぎ、肥前長崎まで後編に挙げて後星に綴るのその初めなり」と述べられており、現存する『中国名所図会』は前編であることが分かる。

林英夫は『中国名所図会』の凡例に「前に摂津・播磨の両国既に成りて文明なれば」とあり、「摂津」とは秋里の『摂津名所図会』、「播磨」は秦石田の『播磨名所巡覧集』（1804）の刊行以降に著されたことを指摘しており<sup>65</sup>、秋里著と考えれば文化3年（1806）～10年（1816）頃に書かれたものであるとしている。さらに、凡例が『東海道名所図会』によく似ており、その一部は『東海道名勝図会』の凡例を補筆しただけのものであることを指摘している。これについては同意であり、第1章第1節第2項において名所図会の凡例を比較したが、名所を取り上げる基準として『延喜式』が挙げられており、これは『東海道名所図会』だけでなく『和泉名所図会』、『木曾路名所図会』にも見られ、秋里の名所図会と同様の基準が設けられていると言える。そのほか、どの地域の名所をどのような範囲で取り上げるかについての凡例や、引用に用いた書物の提示などは『中国名所図会』以前の凡例にも共通して述べられている。

さらに、林は巻之二「馬の墓」の項の後に、『摂津名所図会』の奥付にある大阪の書誌に森本太助が登場することを指摘している。

此外古戦場の珍説多くして、又八栗志渡寺は一里二里なり。しかし此篇は  
中国案内の第二を以て書肆森本金毘羅の辺り斗りを乞ふといへど、白峯矢  
島は前に盛衰記を絵解して此度所に至り見れば、いとほしきまゝ書添ぬれ  
ば、後は霊場記の増補もあらばと、此所にて讃岐の部終る。然し我友高松  
に藍渠老人有て、当国の説悉校合を加る

ここに登場する「書肆森本」が大阪の書誌森本太助であり、『中国名所図会』が森本



に頼まれて書かれたものと推定されるとしている。また、「盛衰記」とあり、これは秋里籬島の著作『源平盛衰図会』（1764）を指しているとする、『中国名所図会』の作者は秋里籬島であるとして差し支えない、としている。

## 第2項 秋里籬島と籬島軒秋里

先行研究において秋里籬島と籬島軒秋里を同一人物とする根拠に名前や遍歴が似ていることを挙げられているが、これをもって同一人物とするには難しい。ただし序章 第1節 第3項に詳述したが、千田が指摘した『築山庭造伝』後篇の跋蹄に記された、図に対する考え方などが似通っていることについては、一考の余地がある。

さらに同書の跋蹄から推察している。

又図を見に心得べき事は東海道名勝図画に挙げてあれど、再びまた爰に解は本法の得安からしめん為なり。先其所に不至といへど、意味を弁へ是を見る時は不至して其趣を得、其趣を得ときは其業をなす。画にも又しかり。古人の作を見て其趣を得て以て図す。しかれば此書乃趣を意得すれば、古人の作に違ず造れる也。人をもつて伝るは全すれど得難し。近頃は法を伝ふひとなし。又伝を受る人なし。欲とは成りぬ。是は流行の為所にして徒に非ず。故に図を以て伝ふ事をするす

上記にある「図を見に心得べき事」から、籬島軒秋里の意図は図という表現手段によって、古人によって作られた庭の趣意が伝わると解釈している。これを「図的表現主義」あるいは「図の思想」とし、このような方法が既に『東海道名所図会』にある事が跋蹄の中で述べられているとしている。以下に『東海道名所図会』の跋文を示す。

千羊之皮、不如一狐之腋。示君一弓図、勝重十年見、是謂図果勝于見乎。不知。重見成図、無見非図、因見及図、無見非図。奈今人為見者多弄図者少。逮得図迺豁其襟懷娛心志。図不謂不勝于見乎。是予之所立之意也

これは『史記』に説かれた狐の腋下の皮は貴きもので、それ一枚で千枚の羊皮に勝る物である。まさに「図」もまた「見」をしのぐものである。「図」として表現されないところでは「見」というものはない。今の人間は「見」をなすばかりで「図」に意を払うものが少ない。「図」に表現して思いを豊かにし、心から楽しむことができるものであるとし、この『東海道名所図会』の跋に述べられたことが『築山庭造伝』後篇に言う「図を見に心得べき事」そのものであり、「図の思想」の表明であるという。また、本文中に『東海道名所図会』が引用されていること、『築山庭造伝』後篇にある「泉州境浜之薬師 東光寺陰舎之庭 滝口之間湘夕遷図」とあり、「湘夕」は秋里籬島の字であることを指摘している。以上のことから籬島軒秋里は秋里籬島その人である可能性は極めて高いとしている。

以上のことから、『中国名所図会』の作者である籬島軒秋里と秋里籬島は同一人物であると判断する。しかし、『築山庭造伝』後篇や『石組園生八重垣伝』の作者である籬島軒秋里と同一人物であるとするには書物の性質が大きく違うため、断定はできない。さらに『都林泉名勝図会』を造園学的に考察したうえでの比較が必要であり、今後の課題としたい。

### 第3節 『都林泉名勝図会』にみる江戸中末期の庭園の特徴

#### 第1項 『都林泉名勝図会』における庭園の見どころ

林泉図において、庭園のある構成要素に画中人物が注目している様子を描くことで、その庭園の見どころを示している。その見どころがどこに設定されているかをまとめると、景石、滝、石組、石造物、植物、建築、眺望の6種が見られた。

まず、景石に見どころを置いている庭園とその対象は「真如院烏帽子掛石（草偃）」（図 296）の烏帽子掛石、「知恩教院方丈林泉其一（草偃）」（図 301）の護法石、「清水成就院其一（草偃）」（図 302）の籬島石、「不二菴遺愛石（中和）」（図 8）の遺愛石、「恵日塔頭莊嚴院（中和）」（図 303）の双峨石、「天龍寺塔頭妙智院林泉（中和）」（図

304) のシシ岩である。どの景石にも名前双峨石が付けられており、図題や挿図内に書き示されている。知恩教院と妙智院には本文中に景石の記述はないが、それ以外の庭園では本文においても景石についての記述があることから、これらの景石が見どころであったことが分かる。

滝を見どころとしている庭園に「圓山正阿弥其二（中和）」(図 305) がある。やや離れた位置から築山の凹部にある滝を鑑賞している。これは滝が手前の松に隠れて見えにくいことから、人物を配置して滝があることを強調する目的にも見える。

石組を見どころとする庭園とその対象は「本法寺（草偃）」(図 269) の枯滝石組、「妙心塔頭大嶺院（中和）」(図 306) の枯滝石組があった。本法寺では本文中に「その形築山泉石ともに浪の紋を模す」とあることから、庭園の重要な構成要素であったことがうかがえる。一方「妙心塔頭大嶺院（中和）」の枯滝石組は庭園の奥部に小さく描かれており、本文中にも枯滝石組についての記述はない。見どころとされた構成要素が庭園内のどの位置にあるかは関係なく、細部まで紹介しようとする秋里の意が見える。

石造物を見どころとする庭園とその対象は「大徳塔頭碧玉庵紫式部碑（中和）」(図 307) の紫式部碑、「建仁寺正傳院（草偃）」(図 308) の中島の層塔、「歌中山清閑寺（草偃）」(図 275) の要石、「本國寺中真如院（草偃）」(図 295) の瓜実燈籠、「天竜塔頭真乗院林泉（中和）」(図 309) の亀頂塔と織部型の石燈籠である。多くは図題や図中にその名を書き示しているため見どころであることが分かり、人物はそれを強調する役目を持っている。正伝院の層塔と真乗院の石燈籠については名称がついておらず、本文中での記載もないことから、一般的な見どころではなかったことが考えられる。しかし、そうであっても秋里がその場所を見どころと考えていたため、それらの前に鑑賞する人物を描いたのだろう。

次に植物を見どころとしていた庭園とその対象物についてである。この表現が見られるのは「大通寺東林院（草偃）」(図 310) の切戻された樹木、「黒谷西翁院反古菴

（草偃）」（図 311）の桜、「南禅塔頭聴松院（中和）」（図 312）の管神霊夢松、「靈山  
巖阿弥長嘯梅（草偃）」（図 313）の長嘯梅に見られた。聴松院と巖阿弥では図題や図  
の差記述によって、その庭園の名物であることが分かる。西翁院と東林院では図の中  
で対象となる樹木が目立っているが、明記はされていない。

建物を見どころとしている庭園とその対象は「大徳寺塔頭芳春院（中和）」（図 14）  
の呑湖閣、「建仁塔頭正傳院織田有楽斎茶亭（中和）」（図 314）の如庵、「赤山社（中  
和）」（図 315）の築山上にある亭、「高臺寺傘亭（草偃）」（図 316）の時雨亭、「妙喜  
菴茶室袖摺松（草偃）」（図 317）の茶室である。芳春院は本文中にも呑湖閣の記述が  
見られ、正傳院、高台寺、妙喜庵については図題や図中に名称が描き込まれているこ  
とから、その庭園の見どころであることが分かる。

最後に景色を見どころとしている庭園は「大徳寺方丈（中和）」（図 15）の比叡山と  
達磨峰、「南禅院龜山法皇古墟（中和）」（図 318）の龜山法皇陵、「成就院其二（草偃）」  
（図 23）の眺望、「清水延命院（中和）」（図 319）の眺望、「東福寺南明院（中和）」  
（図 320）の眺望、「高雄地藏院（中和）」（図 321）の眺望、「梅尾高山寺三尊院（中  
和）」（図 288）の眺望である。大徳寺は第 3 章で述べたように人物と山の位置にずれ  
が生じているが、東を向いて人物らは見どころを表している。そのほかの庭園でも図  
題や図中に山の名前や眺望の中の見どころを明記し、本文中に庭中からの遠景を評価  
する記述が見られる。

これらのことから、秋里は挿図や文字で庭内の名石や名木を明記し、本文において  
も記述しているものに対して、人物をその前に配置して見どころ表現をしていること  
が分かった。また、少数ながら図や本文に明記されていない構成要素を見どころとし  
ている庭園もあった。これらの見どころは『東海道名所図会』に示された名勝を見て  
描いた図の方が名勝を理解できるといった考えから、実際に庭園を見て感じた印象や、  
庭園についても僧侶に取材を行ったことなどが図に反映されていると考えられる。

ただし、「大徳寺方丈（中和）」に見られるような風景描写の操作があることから、

必ずしも実態を描いたとは言えず、図の表現上の理由で風景の位置をずらしたり、情景描写のために実際の見どころに人物を配置しなかったことも念頭に置いておかねばならない。

## 第2項 『都林泉名勝図会』における庭園の機能

第2章、第3章を通して『都林泉名勝図会』における林泉図について分析を行い、画中人物の配置や行動によって鑑賞位置や見どころを提示していることを明らかにした。その表現は名勝をただ見るより名勝を見て描いた図を見るほうが名勝を理解できるという『東海道名所図会』跋文で見られる主張に基づいたものであり、各庭園に対して秋里がどのように庭園を見てきたのか、庭園のどこ魅力を感じたかが表現されていると解釈できる。

本史料の林泉図における画中人物は屋内から庭園を鑑賞したり、庭内を散策して楽しんだり、石組や名石を鑑賞していたりと庭園を鑑賞する様々な姿が描かれている。各庭園での人物の行動については巻末の資料の『都林泉名勝図会』林泉図調査票内の人物の欄にて示した。また、庭園の機能として人物の行動から、定点鑑賞・回遊・茶事・宗教・戸外活動に分類した。その判断基準として、人物が1箇所に配置され、見ているものが同じ場合は定点鑑賞とした。人物が庭園内の複数個所に配置され、それぞれの人物が見ているものが違う場合は回遊とした。茶事と宗教に関しては、庭内で茶事の様子が描かれているか、宗教活動が行われているかで判断した。そして、庭園内で遊んでいる姿が描かれているものは戸外活動とした。以降、林泉図に見られたそれぞれの庭園機能について考察する。

回遊の機能をもつ庭園は多く描かれており、挿図には飛石の上を歩く姿や橋を渡って島に行く姿などが描かれていた。しかし、回遊の機能を持つ庭園の形態や特徴は様々であった。例えば「銀閣寺林泉（中和）」（図9）や「清水成就院其一（草偃）」

（図22）のような庭園の様々な場所に見どころや鑑賞場所がある庭園や、「等持院（中

和)」(図 281)や「圓山多蔵庵春阿弥(中和)」(図 24)などの中島がある、または起伏に富んだ庭園にも回遊の機能が見られた。また、その反対の特徴を持つ平庭に造られた枯山水でも庭内に立ち入って散策する人物が描かれていることから回遊の機能を持っていたことが分かった。築山林泉と枯山水の両方で回遊の機能が見られることから、庭園の形態によって機能が限られているのではないことが分かる。また、中島に橋が架かっている庭園であっても回遊している姿を描いていない林泉図もあるため、庭園の形態によって統一された機能はなく、各庭園で異なっていたことが分かる。ただし、枯山水に限っては庭内に人が立ち入る姿が描かれているが、「妙心塔頭靈雲院(中和)」(図 48)だけは枯山水であるが室内から鑑賞する姿が描かれている。このような狭い土地に造られた庭園には立ち入らず、室内からの鑑賞を示していることから、秋里は庭園の特徴を尊重して機能を表現していたことがうかがえる。

定点鑑賞の機能がかれた林泉図では、人物の配置によってその庭園の鑑賞方法を示す働きがあることから、庭内の特定の場所での鑑賞や室内から庭園の全体の景色を鑑賞する方法が示されている。人物の配置や行動をもとに定点鑑賞の機能を持つ林泉図をみると、4つのパターンがあった。

一つは回遊の機能と並行して定点鑑賞の機能が描かれている場合である。庭内を散策して地割や庭園の細部を楽しむ方法に加え、室内から庭園そのものの風景を楽しむことができる庭園であったことが分かる。回遊機能を持つ庭園の例で挙げた「等持院(中和)」(図 281)や「圓山多蔵庵春阿弥(中和)」(図 24)などに見ることができる。

二つ目には季節・時間帯・気象を強調する目的のために室内での定点鑑賞を描く場合である。例えば「光雲寺(中和)」(図 25)は夜の情景を描いた図であり、人物は縁側から庭園を鑑賞している。夜であることを理由に庭内に人を配置しない訳ではないことが、同じ夜の情景を描いた「靈山叔阿弥(中和)」に庭内に女性が描かれている図があることから分かる。東寺の光雲寺は庭内の散策が不可能であったかどうかは不明だが、秋里がこの庭園を屋内から鑑賞することを推奨していた、もしくは庭園の見

どころを示すより、夏の夜の情景を表現することを優先したためであると考えられる。

「東寺寶輪院（草偃）」（図 322）も同様に夏の庭園を描いた図であるが、こちらは冷涼な湧水がこの庭園の名勝であったことから、それを強調するために縁側で納涼する人物らを描いている。

三つ目に、庭中に建てられた建築からの定点鑑賞の機能を持つ庭園である。これらは金閣寺「其二（中和）」（図 19）や「銀閣寺林泉（中和）」（図 9）、「圓山勝興庵正阿弥書會（中和）」（図 323）などに見られ、庭内に閣や亭が建てられている。そこから景色を眺めることができた、もしくはそこからの庭園鑑賞を推奨するために、屋内に人物を配置したことが分かる。

四つ目に、庭園内の定点鑑賞の機能を持つ庭園である。人物が庭内の複数個所に描かれた回遊の機能を持つ林泉図とは異なり、庭内の 1 箇所には人物が描かれているため、画中人物は庭園の鑑賞位置を強調する働きを持っている。「大徳寺塔頭芳春院（中和）」（図 14）や「本願寺對面所林泉（中和）」（図 31）などの庭園の全景を楽しむような庭園や、「南禅寺方丈（草偃）」（図 50）や「恵日塔頭即宗院自然居士墳（草偃）」（図 324）などに見られる、庭園から離れた位置に人物を配置するなどの描き方がされている。

五つ目に、見どころを強調するための定点鑑賞の機能が描かれた庭園である。「本法寺（草偃）」（図 269）や「不二菴遺愛石（中和）」（図 8）、「恵日塔頭莊嚴院（中和）」（図 303）などの庭内の石組や景石に近付く、または指を指して鑑賞する人物の様子が描かれている。人物らの視線の先には石組や名が記された景石、図題に表された景物などがあり、それらの品に対して強調する役目を持っていることが分かる。これによって、画中人物が庭内の見どころを伝える働きを持ち、強調している。この表現は回遊の機能を持つ庭園でも描かれる場合があり、回遊している人物らが滝石組などを見ている様子が描かれることがある。人物が庭内の鑑賞するべき場所を強調している。

最後に戸外活動の機能を持つ庭園である。「東林院其貳南谷師書齋幻華庵（草偃）」

(図 289)には扇子を凧にして遊んでいる様子や、「東寺山吹岡本林泉(中和)」(図 325)では子供が池の魚を捕る様子が描かれている。これらの林泉図のように、庭内で遊ぶ様子が描かれている。古人の邸宅や揚屋や円山などの遊興施設のみならず寺院でも遊ぶ様子が描かれている。こうした姿を実際に秋里が目にしたのかは分からないが、当時の庭園は鑑賞以外の機能を持っていたと知ることができる。

茶事・宗教活動については林泉図にはなかった。露地を描いた林泉図において茶事の機能が描かれているかと考えたが、露地に描かれた人物らが茶事の最中であると判断することはできず、「建仁塔頭正傳院織田有楽斎茶亭(中和)」(図 314)や「妙喜菴茶室袖摺松(草偃)」(図 317)では人物らが茶室を鑑賞し、散策する様子が描かれている。そのため茶事を行う場所としての露地を描くのではなく、名勝として露地を取り上げていることが推測できる。

### 第3項 『都林泉名勝図会』における庭園の特徴

本史料は藤波李忠の序文に「貴賤老幼車馬のいたわりなく、居ながらにして幽邃の風景をめでたのしませむの心おこして、あづさにちりはむるこそまことにおおかたならぬ雅趣なりけれ」という言葉から分かる通り大衆に向けて著された名所図会であり、江戸時代中末期における庭園がどのようなものであったかを知る一つの手がかりとなる。これを踏まえ、挿図から読み取ることができた庭園の鑑賞方法の特徴をまとめ、本史料から分かった江戸中末期の庭園について論ずる。

本史料の挿図には林泉図が 100 件あり、池庭のある築山林泉や庭石と植物のみで構成された枯山水、茶室に造られた庭園である露地の 3 種類が見られた。そのため林泉とはいえ、泉を設けていない枯山水や露地も林泉と捉えていたことが分かる。

そこで林泉図を築山林泉、枯山水、露地の 3 つの様式別に類別し、どの庭園様式が多いのかを検証した。様式の判断基準として、築山林泉は挿図内に池や流れがあることを基準とした。ただし、1 件のみ図内に枯山水と露地が描かれているものがあつた。



その結果、築山林泉は 48 件（約 48%）、枯山水 41 件（約 41%）、露地 11 件（約 11%）であった。築山林泉が全体の半数を占めており、最も多く取り上げられているが、枯山水とそれほど割合に差はなく、同程度の割合で取り上げられていることが分かった。これにより、当時の林泉の概念として築山林泉だけでなく、枯山水も同程度の注目度があったことが分かった。

多くの寺院や神社の庭園が取り上げられているが、挿図には御所の庭園や門跡寺院の庭園などは描かれていない。本文中には青蓮院や今の桂離宮を指す桂山莊園林堂が取りあげられ、山莊園林堂では庭園に関する記述もあり、その庭園は「洛西林泉の冠たるものなり」と高く評しているにもかかわらず、挿図に描かれていない。しかし、秋里が当時、すでになくなった庭園が忘れ去られることを憂いたためか、神泉苑や藤原邦綱（1122-1181）の邸宅の庭園など、荒廃した庭園や古跡となった庭園については記述されている。また、二条城の庭園も描かれていない。幕府の施設であるため観光名勝とは考えられず、取り上げていないと推測できる。よって『都林泉名勝図会』は当時、寺社が公開している庭園のみを取り上げていると推測でき、御所の庭園や門跡寺院の庭園などは観光名勝として機能していなかったことがうかがえる。その実態について本史料からは知りえることができず、当時の日記などから探る必要がある。これについては今後の研究に期待したい。

一方、優れた庭園でも意図的に挿図を描かないものもあった。「巻之五」の本文中に「葉室西芳寺」の項がある。そこには庭園について記述されているが、挿図は描かれていない。本文については表を参考にされたい。その末尾に「図は築山庭造伝に見えればこゝに略す」とあり、『築山庭造伝』に図があることから本史料には描かないとしている。『築山庭造伝』の巻之中、下には庭園の様相が描かれており、その中に西芳寺が描かれている（図 326）。ただし、『都林泉名勝図会』に描かれている庭園と『築山庭造伝』に描かれた庭園において共通する庭園は他にも 9 図あり、妙心寺大通院庭園、大徳寺芳春院庭園、遍照心院方丈庭園、慈照寺庭園、鹿苑寺庭園、円山

貞（庭）阿弥庭園、清水寺成就院庭園、円山端之寮庭園、天龍寺方丈庭園である。その中で西芳寺と大徳寺塔頭大仙院の2庭園が『都林泉名勝図会』には描かれていない。慈照寺庭園については『都林泉名勝図会』挿図中に、『築山庭造伝』や『都名所図会』で描かれたが、経年により姿が変わったために図することが記されている。大仙院については本文中の庭園に関する記述について作庭者が相阿弥であること、名石が列挙されているのみであり、『築山庭造伝』には触れられていない。

以上のことから考えると、秋里は凡例に示した通り『築山庭造伝』を参考に『都林泉名勝図会』を著したことが分かる。そして、取り上げる庭園の選出については不明なままである。『築山庭造伝』には三井寺塔頭の庭園や追分など滋賀の庭園があるため、『都林泉名勝図会』では都を対象地としていることから、それらを除いたことが分かる。しかしその他の庭園についてどのような基準で取捨選択し、新たに取り上げる庭園を選択したかは不明である。『築山庭造伝』の板行から『都林泉名勝図会』の板行までの64年もの年月があり、庭園が荒廃したり、様相が変化したりと取り上げるべき庭園ではなくなったか、もしくは公開された庭園に絞ったために取り上げる庭園の差異が生まれたかといったことが推測される。

築山林泉や枯山水に比べ、露地が少ない理由として考えられるのは、露地は築山林泉や枯山水に比べて公開しているところが少なかったと考えられる。また『拾遺都名所図会』巻之一に「藪内茶亭庭中之圖」（図 327）の挿図があることから、重服する林泉図の再掲を控えた可能性も考えられる。

## 小結

京都の地誌において、その始まりから庭園に関する記述を確認できた。しかしそれらの庭園は遺跡や故実に基づいたものであり、現存している庭園をとりあげることは少なかった。そして『雍州府志』以降、庭園の描写が増加する傾向が見られた。また名所として初めて庭園が挙げられるのは『雍州府志』の3年後に刊行された『京羽二重織留』

である。『都林泉名勝図会』が刊行されて以降、江戸時代は記述に大きな変化は見られない。しかし明治になって刊行された地誌では、1件あたりの文章量の増加と具体性が増している。特に『京華要誌』と『旧都巡遊記稿』は庭園を鑑賞するように順を追って説明するように記述されている<sup>66</sup>。挿図がない代わりに本文中で庭園を鑑賞しているように、記述によって具体的に説明しようとしたのではないだろうか。

庭園に関する記述を比較した結果、記述描写に『都林泉名勝図会』の明確な影響を発見することはできなかったが、『都林泉名勝図会』のように挿図によって庭園を紹介する地誌は他になく、挿図を駆使して庭園の特質や見どころを伝えた史料は京都の地誌のなかで唯一『都林泉名勝図会』のみである。

その挿図うちの林泉図には築山林泉、枯山水、露地と3つの様式の庭園が描かれており、江戸時代中末期に林泉という言葉で表された庭園は泉を有する庭園だけでなく、枯山水や露地も庭園と捉えていたことが分かる。その中には多くの寺院や神社の庭園が取り上げられているが、御所の庭園や門跡寺院の庭園、幕府の施設である二条城などの記述や挿図はなかった。ただし、本文中に桂離宮の園林堂と思われる項目が登場しており、「桂山荘園林堂」の庭園を「洛西林泉の冠たるものなり」と高く評しているにもかかわらず、挿図に描かれていない。また、西芳寺について庭園の記述があるものの、『築山庭造伝』に図があるため省略することが記されている。

## 結章 『都林泉名勝図会』における庭園描写の特徴

『都林泉名勝図会』は5巻6冊構成であり、巻之一が乾・坤に分かれている。巻之一には主に洛中、巻之二には洛外北東部、巻之三には洛外東南部、巻之四には洛外北西部、巻之五には洛外南西部の林泉名勝が紹介されている。その内容は本文と挿図があり、名勝ごとに記述される本文頁の間に挿図が挿し込まれている。

本文中には93箇所の名勝が紹介されており、その名勝は寺院や神社が多く、古跡や陵、野や溪などの自然名勝も含まれている。記述の内容は名勝の沿革や建築、什宝についてなどがあり、庭園に関する記述も見られる。ただし、庭園に関する記述がある項目は全体の3割程度にとどまっている。庭園に関する記述を『都名所図会』と比較すると、『都林泉名勝図会』の方がより詳細な記述となり、具体的な庭園の様相や評価などが付け加えられている。

さらに、他の作者による京都の地誌との比較において記述の特徴を明らかにしようと試みた。京都の地誌において、その始まりから庭園に関する記述を確認できた。初期の京都の地誌における庭園の記述は遺跡や故実に基づいたものであり、現存している庭園を取り上げることは少なかった。そして『雍州府志』（1686）以降、当時現存した庭園の描写が増加する傾向が見られた。『都林泉名勝図会』が刊行されて以降、江戸時代は記述に大きな変化は見られないが、明治になって刊行された地誌では1件あたりの文章量の増加と具体性を持つ文章へと変化していた。特に『京華要誌』（1895）と『旧都巡遊記稿』（1918）は庭園を鑑賞するように順を追って説明するように記述されている。挿図を掲載しない代わりに本文中で庭園を鑑賞しているかのように、記述によって具体的に説明しようとしたのではないだろうか。庭園に関する記述を比較した結果、記述描写に『都林泉名勝図会』の明確な影響を発見することはできなかった。

しかし、庭園が元禄期から寛政期までに名所として確立したことが分かった。『京羽二重織留』（1689）における「仮山地」の立項は、元禄年間初頭には庭園が名所として確立されていたことを示唆している。また、『雍州府志』以降の地誌において庭園の評価に関

する記述が古跡より現存する庭園へ増加したことは、名所とする庭園が現存する庭園を重視するようになっていたと言える。『都林泉名勝図会』という庭園を主題にする地誌が板行されることから、元禄期から寛政期までの間に庭園が名所として確立していったことが推察される。

次に、『都林泉名勝図会』の挿図について注目した。挿図は西村中和、佐久間草偃、奥文鳴の3人の画工によって描かれており、本史料には158件の挿図がある。これらの挿図は凡例に林泉図、風流の図、典故の絵の3種類に類別できることが示されており、これに従い図を分類すると林泉図は99件あり、全体の約63%を占めている。秋里が著した同じ京都の名所図会には2～3件の林泉図しかないことから、本史料の林泉図の割合は圧倒的に多く、これによって林泉に特化した名所図会であることを特徴づけている。

挿図には必ず人物が描写されており、様々な行動をとる姿が生き生きとした様子で描かれていることは、本史料の挿図の特徴の一つである。これらの人物の動きを林泉図の分析により読み取っていくと、その行動によって庭園の性質を表すための演出、庭園の鑑賞位置、庭園の見どころを示していることが分かった。本史料の本文には庭園に関する記述が少なく、その庭園の見どころや特徴の説明はほぼない。その代わり、挿図内には人物を描き、その行動や配置で庭園の特徴を伝えている。これは『都名所図会』において名勝の風景そのままに描くことは子供が家に居ながらにして名勝を見ているように思わせることができるとの考えを示しており、その考えは『都林泉名勝図会』まで変わらず引き継がれていたことが画中人物の表現や藤波李忠による序文から知ることができる。

名勝の景色だけでなく、そこに人物を加えて名勝の特徴を示すことは『東海道名所図会』の跋文に名勝をただ見るより名勝を見て描いた図を見るほうが名勝を理解できるという主張に基づいたものであり、各庭園に対して秋里がどのように庭園を見てきたのか、庭園のどこ魅力を感じたかが表現されていると解釈できる。このような表現は他の京都の地誌には見られず、『都林泉名勝図会』のように挿図を駆使して庭園の特質や見どころを伝えていることが、本史料の最大の特徴である。

本史料は挿図の写実性の高さが評価されていたが、庭園の構成要素の描写方法を類型化することで、その実態について明らかとなった。特に石の描写や植物の描写によってその描写の実態がよく分かる。さらに、各構成要素の描写方法が林泉図全体で用いられ、描写の統一がなされていることが分かった。その石の描写について、挿図には石組や景石が据えられている姿が描かれているが、石の形状による表現の微差はあるものの、石質の違いによる線画表現の差は確認できなかった。ただし自然石と加工石の石肌の表現の違いが見られることから、その2種は明確に描き分けられていた。さらに植物の描写について、14種の植物の種類が判明した。同じ樹種でも描き分けがされており、特に松は紹介した以外にも描写方法は多岐にわたる。近景描写の樹木は葉の形状がしっかりと描写され、蓮は葉脈まで描かれている。それに対して遠景描写の樹木は簡略化した葉の形で描写されており、『芥子園画伝』に見られる点葉法が確認できた。

さらに、樹種が特定できなかった樹木に注目すると、同じ描法を用いて描かれた樹木が数種確認できた。楓の葉の描写において、点葉法に挙げられた菊花点が用いられていることから、他にも点葉法が使用されているのではないかと比較したところ、介字点、胡椒点、一字点、杉葉点の4種の点葉法と1種の夾葉法が用いられていることが分かった。石や水流、樹木の描写に共通して『芥子園画伝』の描法が見られることから、本史料における描写において明らかに影響が見受けられる。日本では南画の描写方法を『芥子園画伝』を基としたとされており、18世紀には南画家によって明清の庭園画に影響を受けて庭園画様式が確立した。その後の、18世紀末から19世紀にかけて写実性要素が強い庭園画様式へ展開された。そして、18世紀の関西画壇において真景図が流行したという。名勝の中に自らの体験を表すという真景図の描法が、『東海道名所図会』の跋文や本史料の序文に見られる秋里の図を描く理念と合致している。本史料における人物は、庭の造りを楽しみ、遠景を眺め、庭の見所に集まるなど、名勝の体験を表現する真景図と同じであり、庭園画の影響を受けて描かれていることが分かる。このような絵画史的背景の中で、庭園に特化した名所図会である『都林泉名勝図会』が板行されたことは不思議ではなく、自然な流れのよ

うに感じられる。

本史料の庭園描写が優れていたことが分かる史料に、明治 29 年（1896）に刊行された『古今秘伝築山庭造法』がある。上・中・下に分かれた 3 冊構成であり、作者は東京京橋区采女町に住んでいた中島春郊という人物である。上巻・中巻は『築山庭造伝』などの造園書を基に著されており、下巻に『都林泉名勝図会』を基に著されている。奥付にある販売所から大阪、東京、伊勢、京都にて販売されていたことが分かる。下巻を見ると各地域の庭園画描かれており、そのうちの京都では金閣寺庭園、銀閣寺庭園、建仁寺正伝院庭園、遍照心院方丈庭園、妙心塔頭蟠桃院庭園、多福庵庭園、南禅院庭園、智恩教院方丈庭園、妙心塔頭春浦院、大徳寺塔頭寸松庵庭園の 10 庭が描かれている。どれも『都林泉名勝図会』の林泉図をそのまま描いたものである。ただし、人物だけが描かれておらず、庭園だけを詳細に写し描いている。画工が実際の庭園を見ずに描いたためにそっくり写されているのかは不明であるが、『都林泉名勝図会』の存在は明治期になっても色あせず、その板行後においてこれを上回る刊本はなかったのではないかと思わせる史料である。

本史料の林泉図には築山林泉、枯山水、露地と 3 つの様式の庭園が描かれており、江戸時代中末期に林泉という言葉で表された庭園は泉を有する庭園だけでなく、枯山水や露地も林泉と捉えていたことが分かる。その中には多くの寺院や神社の庭園が取り上げられているが、御所の庭園や門跡寺院の庭園、幕府の施設である二条城などの記述や挿図はなかった。ただし、本文中に桂離宮の園林堂と思われる項目が登場しており、「桂山莊園林堂」の庭園を「洛西林泉の冠たるものなり」と高く評しているにもかかわらず、挿図に描かれていない。また、西芳寺について庭園の記述があるものの、『築山庭造伝』に図があるため省略することが記されている。よって『都林泉名勝図会』は当時、寺社が公開している庭園のみを取り上げていると推測でき、御所の庭園や門跡寺院の庭園などは観光名勝として機能していなかったことがうかがえる。その実態について本史料からは知りえることができず、当時の日記などから探る必要があり、これについては今後の研究に期待したい。

挿図と現況を比較すると相似する点があると指摘されることから、当時の庭園の形状

を示しているものと考えられる。しかし画中人物の行動を無視することはできず、江戸時代中末期に『都林泉名勝図会』に見られるような庭園の鑑賞や利用がされていたことが推察できる。本史料では本文による庭園の説明が少ないこと、また秋里の図への考え方から挿図が名勝の説明を担う役割は大きく、画中人物の行動は当時実際に見ることができた、または真景図のように、秋里が実際に庭園を訪れた際に感じた庭園の素晴らしさや見どころ、雰囲気などが表現されたのではないだろうか。少なくとも秋里が各庭園を挿図に描かれたように捉えていたことは、江戸中末期のひとつの庭園の見方であることは確かである。

つまり、『都林泉名勝図会』は大徳寺方丈庭園や霊洞院庭園において挿図と現況がよく似ているといった評価が見られたことから、一部の庭園に関して写実性の高い史料であることが考えられる。しかし、その描写に秋里が見た名勝のイメージが加味されていることは、季節・時間帯・気象の表現や人物による見どころや鑑賞位置を表現していることから明らかである。ただし、本史料は名所図会であり、京都以外にも大阪や江戸、尾張において販売されている。本文が庭園の紹介だけにとどまらず、名勝として沿革や什宝が記されていることから一般的な名所図会であることが分かる。そのため、秋里の主観のみで庭園の見どころや季節、鑑賞方法が表されているのではなく、実際に取られていた手法や庭園の様子であったと考える。これによって、風景の操作や季節の強調のために鴛鴦が多く描かれたり、詩歌や人物の様子によって情景を強調する描写は見られるが、その人物の表現や季節などの表現から『都林泉名勝図会』は江戸中末期の庭園の一つのあり方を知ることができる史料である。現在の庭園への理解を深める助けとなるべき史料である。

(121,424)



## 注

- <sup>1</sup> 平成 27 年日本庭園学会関西支部大会において発表。『都林泉名勝図会』に見る庭園描写」平成 27 年日本庭園学会関西支部大会発表要旨 2015 年
- <sup>2</sup> 飛田範夫『都林泉名勝図会（巻 1）』の庭園「造園雑誌」46（5）日本造園学会 1983 年 3 月
- <sup>3</sup> 昭和 14 年（1939）重森三玲氏によって、建仁寺塔頭靈洞院が『都林泉名勝図会』に則って復元修復された。
- <sup>4</sup> 水江は「初期江戸の案内記」『江戸町人の研究』第 3 巻の中で紀行文と仮名草子以降の名所記との相違点から 4 つに類別している。

第 1 類は紀行文としている。多くの場合、作者の一人称で語られ、作者は話者と同一の存在である。紀行文は近世初頭にも見られ、現代まで変わらずに保たれている。

第 2 類に仮名草子としての物語性を有し、その中に名所記事を含むものとしている。これらは虚構の世界であり、作者は話者ではなく、登場人物の 1 人がその役を担う。作品としては純然たる仮名草子であり、天和（1681～1683）以降は見られないとしている。

第 3 類は物語性の後退、あるいは付与されなかった仮名草子の名所記ものとしている。作者と話者はややつながりを保っている。作品には啓蒙的・実用的な知識が用意され、読者はそれを獲得することもできる。さらに寛永期（1624～1643）の洛中洛外図屏風や江戸図屏風などの画風の流れを汲む挿絵が多く、可視性の強い作品が現れる。寛文（1661～72）・延宝年間（1637～1680）が隆盛の頂点である。

第 4 類は名所の所在を示した実用性が強い名所記としている。作者の実用的意図が強く示され、読者からも積極的な享受・活用がある。第 3 類が出現した後に成立し、貞享年間（1684～87）から元禄期（1688～1703）に完成、享保（1716～35）頃まで流行し、宝暦（1751～63）・明和（1764～71）頃から変貌し、名所図会へと推移していく。

水江は 4 つの分類の展開について、第 1 類は近代まで形式は変化せず、第 2 類は第 1 類の要素を取り入れながら娯楽性を軸としている。第 4 類の実用性は明暦以降、貞享から元禄にかけて一層協調され、道中記や地誌・旅行用心集・案内記などとなり、さらに各種地図・町鑑・方角註解、その他の地誌書目に別れ、後期には挿絵を盛り込んだ図会ものとなるとし、『都名所図会』は第 4 類の完成形とし、名所記の中に分類している。
- <sup>5</sup> “めいしよえ【名所図会】”, 国史大辞典, JapanKnowledge, <https://japanknowledge.com>, (参照 2019-06-29)
- <sup>6</sup> “めいしよえ【名所絵】”, 国史大辞典, JapanKnowledge, <https://japanknowledge.com>, (参照 2019-06-29)
- <sup>7</sup> “絵画”, 日本大百科全書(ニッポニカ), JapanKnowledge, <http://japanknowledge.com>, (参照 2018-01-11)
- <sup>8</sup> 野田麻美「美しき庭園画の世界へのいざない - 江戸絵画史における〈庭園画〉の消長と史的位置」野田麻美編『美しき庭園画の世界 - 江戸絵画に見る現実の理想郷』静岡県立美術館 2018 年 参照
- <sup>9</sup> 注 8 に同じ
- <sup>10</sup> 竹村俊則編『日本名所風俗図会』8 京都の巻Ⅱ 角川書店 1981 年 解説より
- <sup>11</sup> 藤川玲満『秋里籬島と近世中後期の上流出版界』勉誠出版 2014 年 「第一章 籬島の伝記—『秋里家譜』から」より

- 
- 12 市島謙吉『新群書類従』第2演劇 國書刊行会 1907年
- 13 竹村俊則「秋里籬島と『都名所図会』」『日本名所風俗図会』8 京都の巻Ⅱ 角川書店 1981年
- 14 千田稔「秋里籬島と籬島軒秋里一名所図会の作者は作庭師か―」『奈良女子大学地理学 研究報告』Ⅱ 奈良女子大学 1986年
- 15 竹村俊則編『日本名所風俗図会』8 京都の巻Ⅱ 角川書店 1981年 解説「秋里籬島と『都名所図会』」参照
- 16 小川版とは寛政11年に刊行された版元を小川多左衛門としている版を指す。しかし小川多左衛門以外の版元を明記している版は管見の限り見つからない。
- 17 新修京都叢書刊行会『新修京都叢書』第9巻 臨川書店 1968年
- 18 改変前  
又、吉川美濃守広家礼<sub>二</sub>江月<sub>一</sub>、問<sub>レ</sub>法<sub>ヲ</sub>。遺命して立<sub>ツ</sub>墓於<sub>二</sub>当院<sub>一</sub>。広家居<sub>二</sub>防州岩国城<sub>一</sub>、領五万石<sub>ヲ</sub>。
- 改変後  
又、吉川美濃守広正礼<sub>二</sub>江月<sub>一</sub>、問<sub>レ</sub>法<sub>ヲ</sub>。其父藏人頭侍従広家の遺命を以て、立墓於<sub>二</sub>当院<sub>一</sub>。広家居<sub>二</sub>防州岩国城<sub>一</sub>、領六万石。寛永二年九月廿一日卒。六十四歳。号金光院殿中岩如兼
- 19 「月刊公園緑地建設産業」にて1986年2月から隔月で連載していた「植栽の流れ」において、1996年9月から翌年7月の間に「『都林泉名勝図会』の植栽」について論じている。
- 20 龍居竹之介「『都林泉名勝図会』の植栽（その二）」『月刊公園緑地建設産業』1996年11月 p29-30より
- 21 白幡洋三郎『京都の古寺 庭[にわ]を読み解く』淡交社 2012年
- 22 白幡洋三郎『彩色みやこ名勝図会―江戸時代の京都遊覧』京都新聞出版センター 2009年
- 23 藤川玲満『秋里籬島と近世中後期の上方出版界』勉誠出版 2014年
- 24 同上
- 25 重森三玲・重森完途『日本庭園史大系』江戸中末期の庭（1）社会思想社 1973年
- 26 中根金作「大徳寺方丈庭園の復原について」『造園雑誌』20（3）日本造園学会 1957年1月
- 27 仲隆裕「養源院書院庭園の整備」『日本庭園学会誌』5 日本庭園学会 1997年 p23-31
- 28 智積院庭園の指定時の詳細解説文は以下のとおりである。（文化庁 国指定文化財データベース 智積院庭園 参照 <https://kunishitei.bunka.go.jp/bsys/maindetails.asp>（2019年6月27日））  
舊祥雲寺の庭園にして元和元年徳川家康より智積院第三世日譽に與へし所なるも其の建築は天和二年火を失して烏有に歸したり庭園は第七世運敞の時局部的改修を試みられたるも甚しき變化なく今日に傳へらる、書院の東方自然傾斜地には工を加へて之に石組、植栽をなし山麓に沿うて池を穿て書院上段の間の東方對岸なる溪流には石橋を架し其の下方の飛泉及護岸の石組等は紀州産青石の橋と共によく都林泉名勝圖會に描かれたる景觀を存せり 蓋し自然の地形を巧みに利用したる桃山時代書院庭園の好適例なり
- 29 植彌加藤造園株式会社 HP より <https://ueyakato.jp/heritageworks/chisyakuin/>（2019年6月27日参照）
- 30 天照大神が天岩戸隠れの時、天兒屋命が祭祀に携わり、以来連綿として朝廷の祭祀を子孫の中臣氏が継承してきた。この天兒屋命の19代の孫と言われる常盤大連が中臣を称するようになり、欽明朝（539?～571?）には中臣連の姓を賜ったことから、常盤大連が藤波家の始祖とされている。以降、現当主45代道忠まで1500年以上の長い

歴史を持っている。中臣連姓を賜って以降、祭祀の官としての意識を強く持ち、一族は神祇官の長官、次官の職に就き、神祇官の行政に精通し、全国の有力神社に勢力を浸透させていった。神護景雲3年(769)6月には称徳天皇が6代当主清麻呂の長年にわたる祭祀奉仕の功績を高く認めたことから、大中臣姓を賜る。以後、大中臣一族は清麻呂の子孫を中心に繁栄をとげていく。(藤波家文書研究会『大中臣祭主藤波家の歴史』続群書類従完成会 1993年 参考)

- <sup>31</sup> 新修京都叢書刊行会『新修京都叢書』第9巻 臨川書店 1968年の解題を参照
- <sup>32</sup> 東京大学史料編纂所研究紀要 第21号 2001年3月 p146-156
- <sup>33</sup> 藤森玲満『秋里籬島と近世中後期の上方出版界』(2014)において、国文学研究資料館蔵『秋里家譜』(寛政年間後半から享和年間頃か)中に秋里がまず俳諧師として活動したこと、後年に伴蒿蹊に師事して和歌を修め、月並の会に参加していたことが述べられていることを指摘している。さらに藤森は秋里の俳諧活動について、はじめ貞門の系統の而咲堂練石に入門して俳諧を学び、後に関更との繋がりを中心に蕉風復興運動に関わっていったとしている。
- <sup>34</sup> 藤森玲満『秋里籬島と近世中後期の上方出版界』勉誠出版 2014年
- <sup>35</sup> 『都林泉名勝図会』と類似する点については以下の通りである。
- 『都名所図会』(1780):「図毎に人物あり。形容いたつて微少なる人物は、その地  
廣大としるべし」
- 『拾遺都名所図会』(1787):「あながち名所古跡にかかはらず、その辺の地勢によ  
つて風流の景気を画するものなり。旅行の人、道に迷ふて里人に  
声を上げ尋ぬる体、または野原を往来するに、暴風に適ふて笠を  
とらるる体などの類なり」
- 『住吉名勝図会』(1794):「巻中の絵に、現在を画くあり、過去を画くあり、文に  
よりて画くあり、古歌によりて画くあり、画に寄りて画くあり」
- 『摂津名所図会』(1796-98):「寺社の細画は竹原春朝斎の一筆なり。かるがゆゑ  
に姓名印章なし。景物は画に至つてはしからず。これによつて、  
画面に姓名印章をことごとくしるし侍る」
- 『東海道名所図会』(1797):「画図は京師・江戸及び諸邦の寄合書なり。かるがゆ  
ゑに画毎に姓名印章あり。細画は浪速竹原春朝斎の一筆によりて  
姓名を記さず」
- 『東海道名所図会』(1797):「画図は京師・江戸及び諸邦の寄合書なり。かるがゆ  
ゑに画毎に姓名印章あり。細画は浪速竹原春朝斎の一筆により  
て姓名を記さず」
- <sup>36</sup> 草薙奈津子『現代語訳芥子園画傳』上巻 芸艸堂 1984年において巻頭語を参照した。  
また、描法の参考に筑摩書房から出版された青木正兒注釈『芥子園畫傳初集山水樹  
石』上下冊 (1975)を使用した。
- <sup>37</sup> 白幡洋三郎『京都の古寺庭[にわ]を読み解く』淡交社 2012
- <sup>38</sup> 『『都林泉名勝図会』の植栽(その一)』月刊公園緑地建設産業 1996.9
- <sup>39</sup> 挿図と現在の庭園を比べると、書院の縁の位置が異なる。挿図では、蓮池のすぐ手前  
に縁先が描かれている。現在は蓮池を越した位置に縁先がある。また、絵図に描か  
れるような庭園の景色を見るためには、書院の中から鑑賞する必要がある。しかし  
現在の書院から見ると南側の縁先が庭園を隠してしまう。そのため書院の南縁は現  
在より、北に位置していたと思われる。現在の書院は、文政12年(1829)に紀州家  
の寄進によって建てられ、翌年完成した建物である。そのときに縁先が、再建され  
る前より南へ張り出したと思われる。
- <sup>40</sup> 飛田範夫『『都林泉名勝図会(巻1)』の庭園』造園雑誌 46(5)
- <sup>41</sup> 『『都林泉名勝文化庁文化財部記念物課監修『史跡等整備のてびき一保存と活用のため

に一』Ⅲ技術編（同成社 2005）では歴史的庭園の主な構成要素として①地割及び造成地形、②石組・景石・敷石・敷砂利・敷砂、③水に関連した施設（園池・滝・流れ・遣水等）、④植栽・植生、⑤構造物（石造物、園路、橋、石積等）、⑥建造物（建造物と一体となっている渡り廊下、塀等を含む）、⑦その他（周辺景観、動物、庭園の景物としてえ取り込まれているもの、水源・日照等に関連する周辺地域の環境等）を挙げている。

42 国指定文化財等データベース参照

(<https://kunishitei.bunka.go.jp/bsys/maindetails.asp> 2019.07.04 参照)

以下、解説文全文を掲載する。

建仁寺の[[塔頭]たっちゅう]霊洞院の庭園である。書院の南面から東面にわたり汀線の屈曲の多い池を設け、書院南正面の対岸池畔に青石を立てて主人石とし、その前を横切って石橋が架けてあり、池中に亀石を置く。池の背後には低い築山をめぐらしその外側を植込みとし、山畔の要所に石塔・石灯籠・小祠などを配し園路を通じている。

霊洞院は広済禅師の塔所として室町時代初期に建てられ、天文年間に火災にあい、間もなく再建されたが、現在の方丈・書院等は嘉永6年（1853）に改築されたものである。本庭園は作庭の時期・作者等を詳らかにしないが、はやくから建仁寺中の名園として知られ、寛政11年（1799）刊行の「都林泉名勝図会」に載せられた絵図は現在の庭景とほとんど変わらず、遅くとも江戸時代中期の作と認められる。

地割は簡素ながら総体として均衡のとれた構成は、建築ともよく調和して優雅な庭相を伝えている。

43 注 24 に同じ。

44 飛田範夫『京都の庭園－御所から町家まで』下 京都大学学術出版 2017 年

45 注 48 に同じ。

46 注 47 に同じ。

47 注 47 に同じ。

48 注 42 に同じ

49 本多錦吉郎『日本名園図譜』平凡社 1964 年

50 注 42 に同じ。

51 相国寺では項の最後の方に割書きで

当山開山堂の前の林泉、鴨川の支流にて風色絶妙なり、むかし藤木加賀守の作りしといふ。近年天明の回禄に罹れば林泉大いに荒廃す、故に図する事能はず

とある。また東本願寺の項では、項の始めに

〔東六条にあり〕近年天明の末、回禄神の災に罹しより、直に河州八尾の御堂を引移して仮本堂とし、諸国より数千の門徒競来りて、鉦初より大木大石数百を寄附し、粉骨碎身して出精怠らず、多の年を累ず、本堂、阿弥陀堂、菊の門、南の門、玄関、鐘楼、鼓楼、大寝殿、小寝殿、白書院、黒書院、鷺の間、奥の殿舎の数々、庫蔵、台所、茶所に至る迄、厳重壮麗として成就し、今年弥生廿八日本堂開山尊影の遷座、卯月二日には阿弥陀堂の遷仏あり

と、天明の大火についての記載がある。しかし全巻を通して、天明の大火についての記述はこの 2 項目のみである。

52 重森三玲・重森完途『日本庭園史大系』9 室町の庭（2）社会思想社 1972 年

53 注 42 に同じ。

54 重森三玲・重森完途『日本庭園史大系』室町の庭（2）社会思想社より

- 
- 55 中根金作「大徳方丈庭園の復原について」「造園雑誌」20 (3) 1-6 日本造園学会 1957 年 1 月
- 56 注 1 に同じ。
- 57 飛田範夫『京都の庭園—御所から町家まで』下 京都大学学術出版会 2017 年
- 58 重森三玲・重森完途『日本庭園史大系』33 現代の庭 (5) 社会思想社 1976 年 p68-71
- 59 仲隆裕「養源院書院庭園の整備」「日本庭園学会誌」5 日本庭園学会 1997 年 p28
- 60 同上 p25
- 61 重森三玲「真如院庭園」1961 年 5 月 真如院パンフレットより
- 62 加藤友規「渉成園の空間的特質に関する研究—利用形態と情景の変遷にみる時代性の考察—」京都造形芸術大学大学院学位論文 (博士) 2012 年 p115
- 63 新修京都叢書刊行会『新修京都叢書』第 9 巻 臨川書店 1968 年 p5
- 64 林英夫編『日本名所風俗図会』17 諸国の巻Ⅱ 角川書店 1981 年 p442
- 65 林英夫編『日本名所風俗図会』17 諸国の巻Ⅱ 角川書店 1981 年 解説「四、『中国名所図会』」参照
- 66 ただしこの 2 つの地誌は庭園に関する記述内容が非常に似ているため、後に刊行された『旧都巡遊記稿』が先の『京華要誌』を参考に行っていると推測される。

## 参考文献

- ・ 尼崎博正『庭石と水の由来—日本庭園の石質と水系』昭和堂 2002 年
- ・ 井口洋校訂『都林泉名勝図会』柳原書店 1975 年
- ・ 上原敬二編『都林泉名勝図会（抄）』加島書店 1972 年
- ・ 鶴田武良『「芥子園画伝」について—その成立と江戸画壇への影響—』東京国立文化財研究所美術部編「美術研究」第二百八十三号 吉川弘文館 1972 年
- ・ 桜井庄吉編『都林泉名勝図会』日本随筆大成刊行会 1928 年
- ・ 重森三玲『日本庭園史図鑑』第 7 巻 有光社 1937 年
- ・ 重森三玲・重森完途『日本庭園史大系』9 室町の庭（2）社会思想社 1972 年
- ・ 重森三玲・重森完途『日本庭園史大系』24 江戸中末期の庭（1）社会思想社 1973 年
- ・ 市島謙吉『新群書類従』第 2 演劇 國書刊行会 1907 年
- ・ 白幡洋三郎監修『都林泉名勝図会』上下 講談社学術文庫 1999-2000 年
- ・ 白幡洋三郎『彩色みやこ名勝図会—江戸時代の京都遊覧』京都新聞出版センター 2009 年
- ・ 白幡洋三郎『京都の古寺 庭[にわ]を読み解く』淡交社 2012 年
- ・ 鈴木棠三編『日本名所風俗図会』12 近畿の巻Ⅱ 角川書店 1985 年
- ・ 千田稔「秋里籬島と籬島軒秋里—名所図会の作者は作庭師か—」「奈良女子大学地理学研究报告」Ⅱ 奈良女子大学 1986 年
- ・ 新修京都叢書刊行会編『新修京都叢書』第 1-22 巻 臨川書店 1967-72 年
- ・ 新撰京都叢書刊行会編『新撰京都叢書』第 1-10 巻 臨川書店 1985-87 年
- ・ 竹村俊則『日本名所風俗図会』7 京都の巻Ⅰ 1979 年
- ・ 竹村俊則編『日本名所風俗図会』8 京都の巻Ⅱ 角川書店 1981 年
- ・ 立川美彦編『訓読雍州府志』臨川書店 1997 年
- ・ 仲隆裕「養源院書院庭園の整備」「日本庭園学会誌」5 23-31 日本庭園学会 1997 年 3 月

- ・中根金作「大徳方丈庭園の復原について」「造園雑誌」20（3）1-6 日本造園学会 1957年1月
- ・永野仁編『日本名所風俗図会』11 近畿の巻Ⅰ 角川書店 1981年
- ・野田麻美「美しき庭園画の世界へのいざない - 江戸絵画史における〈庭園画〉の消長と史的位置」野田麻美編『美しき庭園画の世界 - 江戸絵画に見る現実の理想郷』静岡県立美術館 2018年
- ・林英夫編『日本名所風俗図会』17 諸国の巻Ⅱ 角川書店 1981年
- ・飛田範夫『京都の庭園－御所から町家まで』下 京都大学学術出版 2017年
- ・飛田範夫『『都林泉名勝図会（巻之一）』の庭園』「造園雑誌」46（5）1983年3月
- ・久垣秀治『京都名園記』誠文堂新光社 1967年
- ・平井良朋編『日本名所風俗図会』9 奈良の巻 角川書店 1984年
- ・藤森玲満『秋里籬島と近世中後期の上方出版界』勉誠出版 2014年
- ・文化庁文化財部記念物課監修『史跡等整備のてびき―保存と活用のために―』Ⅲ技術編 同成社 2005年
- ・本多錦吉郎『日本名園図譜』平凡社 1964年
- ・水江漣子「初期江戸の案内記」西山松之助編『江戸町人の研究』第3巻 吉川弘文館 1973年
- ・森修編『日本名所風俗図会』10 大阪の巻 角川書店 1980年